
ネギま！ advance

赤石 ナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！advance

【Nコード】

N7646X

【作者名】

赤石 ナイ

【あらすじ】

かつての世界で答えを得た、可能性も見つけた。
進むべき道は見えた。

調整者の新たな戦いが始まる。

prologue (前書き)

本作品には作者による独自解釈が含まれており、原作ファンの方々には不快に感じる点もあるかもしれませんがご了承ください。

また、本作品には

『魔法少女リリカルなのはadvance』

におけるネタばれ要素が含まれていますのでご注意ください。

prologue

「お帰りなさい元さん」

ここは俺の家ではない、しかし世界に俺の居場所は存在しなく、世界の外れにあるこの場所…管理者の世界こそが俺の帰る場所になる。

「ただいま…神さん」

「名前では呼んでくれないんですか？」

記憶は戻った、力も封印が解けた…今の俺は全盛期となんら変わらない姿形、力を持っている。

「…イシユタル、今まで迷惑をかけた」

「それが私と貴方の間での約束ですから、お気になさらず」

彼女は俺に再び封印をかけるのか聞いてくる…しかし、俺はそれを否定で答える。

なぜか？

簡単だよ。

もう俺は迷わないし、目的を見失わない。
彼女達と約束したからな…。

「悩んで、苦しんで、考え抜いて答えを出す。だからさ…咎を背負うさ」

「…わかりました。早速ですが、行つて頂きたい世界があります」

「勿論だ…そのために俺は存在する。…それで制約は？」

「E Xランクはなし、Aランクオーバーは2つ、Bランクオーバーは3つ、それ以下は4つです…力を抑えれば、制限もなくなります
が…」

「いや、それでも封印はいい…それで次の世界はどんな世界だ？」

俺の質問に彼女は手を頭にあて、情報を流し込む…。

そこに映し出されたモノは…。

「立派な魔法使い《マギステル・マギ》？ △ンドゥス・マギクス魔法世界？

この世界は魔法が存在するのか…いや、どちらかというと魔術に近いな」

「魔術を行使する貴方としては、魔法とは言いたくないですか？」

「…いや、そこまで傲慢になるつもりは無いさ。世界が違つんだ概念も違つさ…しかし、マギステル・マギが…」

「どうしました？」

「いやエミヤが知ったら、涙を流して喜ぶだろうな…と思つてな」

「守護者ですか…」

「まあ、別にいいさ…それで、創造できる宝具なんだが決まった」

「…そうですね、ッ待つて下さい！」

俺が造り出そうとするところに、彼女からの待ったが入った。
どうやら、向こうの世界の管理者から新しく追加の用件が入ったようだ。

曰く、従者も連れて行っていいとのこと…その代わり、制限が厳しくなる。

「従者…？ 英霊を連れて行ってもいいと？」

「はい…そのかわりですが、Aランクオーバー1つ、Bランクオーバー2つ、以下3つです」

「…厳しくないか？」

「…そうですね、しかし」

「まあ、あいつ等の内1人でも連れて行けるなら、仕事はかなり楽か…」

「行動の幅がかなり広がりますしね、それに英霊のもつ宝具はあなたの制限には入りませんし…」

俺は大して長考することも無く、考えをまとめた。

Aランクオーバーは1つのみ…となれば、広域撲滅にも適した存在…となれば。

「エミヤを呼ぶか…」

「彼をですか？ アルトリアさんやメデューサさんでは無くてですか？」

「俺としては彼女達にも会いたいが、仕事に私情は挟まんさ。制限のある俺としてはアイツの無限の投影は心強い…それにさ」

「？」

「あいつの目から見たその世界の正義の味方というのを知りたいしな」

俺の知る限りの最上級の正義が彼だ。

あまりにも正義であるために、その存在は過激で鮮烈で非情で悲しいものだ。

次の世界のマギステル・マギというものがあいつよりも素晴らしいが見比べたくもある。

「わかりました…それでは彼を呼びます」

俺と彼女の間には眩いまでの光で包まれた。

英霊の座への直接の交渉…。

成功するか？

「失敗しました」

「……」

失敗だった。

「理由を聞こうか」

「根源は今回の件に守護者を用いられたくないようです。あくまで正式な英霊で無いとダメなようです」

「…そうか、ならアルトリアを…いやメデューサを頼む」

「……分かりました」

彼女の視線が痛い。

言っておくが、俺は私情で彼女を選んだわけではないぞ。勿論、彼女に会いたいとは思った…でも私情ではない。

「…たぶん」

「私は気にしませんよ」

「……」

眩いまでの光の中から現れたのは妖艶で美しい紫のロングヘアの彼女だった。

「召喚に応じました…貴方が私のマスターですね、元」

「そうだ、久しぶり…でもないかメデューサ元気か？」

「はい、会いたかったですよ元」

嬉しいことを言ってくれる。

俺と彼女の微笑ましい再会に1人ジト目で見てくる管理者。

「…いいですよ、別に貴方が誰を選ぼうが私には関係ありませんよ」

「……いや、あの」

「関係ないですとも、ですからアルトリアさんに告げ口もしませんよ」

「…っう」

痛いところ突いてくる。

というか、告げ口は勘弁してくれ…。

「そういえば、座から呼ばれるときに彼女に会いましたよ」

「…え？」

「物凄く怒っているような顔でした」

「……」

うん…。

次に会うときは腹を括ろっ…。

「それでどの宝具を持って行くんですか？」

「ああそっだな…それじゃあ」

彼が創り出したのは、計6つの剣と盾、槍であった

絶世の名剣、熾天覆う七つの円環、ロー・アイアスルンテイング赤原獵犬、宝具の射出にも耐えられる洋弓、破戒すべき全ての符、ルールフウカチヤウ干将・ぼくや莫耶の6つである。

「バランスがいいですね」

「俺としては対魔力として破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルグを持っていきたかったんだがな」

「今回は制限が厳しいですからね…」

「という訳だ。メデューサ…期待しても良いか？」

「勿論です元。私が愛した貴方のためにわが身はあるんですよ？」

ツク…嬉しいことを言ってくれる。

俺がメデューサと良い空気を作っていると…、

「元さん…」

「うん？」

「いつてらっしゃい…」

「「はい？」」

地面が開いて、体は綺麗にフェードアウトしていった。
最後に見たものは、恐ろしいまでに良い笑顔の管理者であった。

主人公設定&サーヴァント設定

名前：神堂^{シンドウ}元^{ハジメ}

肉体年齢：26歳

身長：195cm

体重：78kg

特技：空手、柔術、八極拳、システム、合気道を組み合わせた我流の体術 剣術 槍術 弓術

趣味：読書 歴史、神話の独学 鍛練

魔術回路：メイン120 サブ70

魔眼：流動の魔眼

人間の可能性を信じる事が出来たため、本当の力を取り戻した真の調整者。

調整者とは根源…根源の渦のアカシックレコードに記されているイレギュラーによる破滅の結果を正すものこと。

その力は、管理者群に帰属されており、彼らの要求の下行動する。

かつて、あらゆる魔法にも属さない異端の魔法をもって根源に至った存在を管理者が掬い取り調整の役を授けた。

しかし、その力はガイアやアラヤ、抑止力、英霊といった神秘に比べあまりに脆弱であり人間の域をでることがでない。

戦闘スタイルは剣による白兵戦がメインであり彼が用いる五大元素や様々な魔術はあくまで補助にすぎない。

義手に隠されているナイフ、アンカーや圧倒的な戦術幅、剣、槍、弓、体術を効果的に用いて身体的スペックの勝る英霊とも対等に渡り合うことが出来る。

神堂元が英霊達と同等の戦闘を演じられるのは、彼が生前に養ってきた圧倒的なまでの戦術幅と魔眼の力によるものが大きい。

魔術師の腕は超一流であり、最高の才をもち、彼が唯一の超一流となれる分野でもある。

また、世界から外れたことにより彼には起源は存在せず「」である。

身体スペック

筋力 B 耐久 B 敏捷 B 魔力 A + 幸運 C 宝具 E A + +

所持スキル一覧

流動の魔眼：あらゆるモノの流れを読むことが出来る魔眼。それは当人によってオン・オフが可能であり、視ようとすれば世界の流れ

…未来視も可能である。

しかし、それには脳に多大な負担がかかり、廃人になる可能性も高い。

これを用いて、彼は対人・対神秘に対する戦闘を優位に進めることが出来る。

創造：彼の魔法であり、第1～6までも属されない異端の魔法。調整者にまで昇華された最大の要因。

創造の名の通り、対象を理解さえすれば対象と全く変わらないレベルのモノを創れる。これによって本来ランクの下がる投影を彼はランクを下げることなく、完全な状態で造りだすことが出来る。

また、元は根源に至ったため魔力さえあれば新たな命もあまつさえ世界すら創りだす事ができる。

心眼（真）：Bランク

修練・経験の積み重ねによって得られる物。得られた情報と戦闘経験に基づく冷静な状況判断によって活路を見出すことができる。

カリスマ：Cランク

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力であり、Cランクは軍を十二分に率いることができる。

騎乗：Bランク

乗り物を乗りこなす能力であり、魔獣・聖獣ランク以外を乗りこなすことができるが竜種は範囲外である。

軍略：Bランク

多人数戦闘における戦術的直感能力。

圏境：Bランク

気を用いて周囲の状況を感じし、自らの存在を隠蔽する技法。極めれば天地と合一し、姿を自然に透け込ませることができる。

陣地作成：Aランク

魔術師固有のスキル。

戦闘続行：Bランク

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能とする。曰く、泥水啜っても生き延びる。

対魔力：Cランク

第二節以下の詠唱による魔術を無効化し、大魔術・儀礼呪法など大がかりな魔術は防げない。これは彼自身にあるモノではなく、彼の羽織っている黒のコートに施されている。

魔眼：A＋ランク

流動の魔眼

魔術：A＋＋ランク

魔術を修得していることを表し、A＋＋ランクは魔法使いのレベル。

以上上記のスキルは全て、サーヴァントに与えられるものだが、彼もまた似て非なる存在のため、該当するスキルを記す。

しかし、この該当する殆どのものは生前の彼の行いから来るものである。

所有宝具一覧

デュランダル
絶世の名剣：A＋ランク

黄金の柄の中には、聖ピエール（聖ペテロ）の歯、聖バジル（バシリウス）の血、パリ市の守護聖人である聖ドニ（ディオニシウス）の毛髪、聖母マリアの衣服の一部と多くの聖遺物が納められているため、アンデットや吸血鬼、悪魔などの属性が『悪』の者に対しての概念武装ともなる。

また、”折れない剣”という概念の具現化により、いかなる手段によっても破壊されない。

熾天覆う《ロー・》アイアス七つの円環：B＋ランク

青銅の盾になめした牛皮を七枚敷き詰めた盾で、やはりトロイア戦争の英雄ヘクトールの投槍をただ一つ防いだことから、それ以後宝具に昇華した時には七つの花弁を展開し防御する。

投擲系統の武器：手から離れて攻撃されるものに対して絶対の防御を誇る。

フルンディング
赤原獵犬：Bランク

決して持ち主を裏切ることなく、刀剣は血をすすることに硬くなっていく。

敵を自動で感知し、追尾する機能を備えた宝具。

ベーオウルフの攻撃を相手が回避しても、自動的に軌道が修正されるため、ほぼ確実に命中する。

投擲した場合にも同様の効果を発揮し、元は弓を用いて剣としてだけではなく、矢としても用いる。

宝具の射出にも耐えられる洋弓：Dランク

本来、宝具を投擲するさいは弓に絶大な負担がかかるため、並みの弓ではもたない。

しかし、これは元が宝具の投擲にも耐えられるように骨子をより強度にしたものである。

丈夫であることを除けば、神秘性は殆ど無い。

破戒すべき《ルール》全ての符：フレイカーCランク

『裏切りの魔女』の神性を具現化させた至高の対魔術兵装である。刃としての切れ味は少し良い程度だが、ありとあらゆる魔術・魔力を無効化し、呪いや契約を破戒できる。

干将・莫耶：かんしやう げふCランク

持ち主のステータスをアップする効果を持つほか、双剣が離れている場合でも互いを引き合うという性質を持っている。

しかし、それを除けば投影における魔力効率のいい双剣であること以外、特徴は無い。

だが、人の鍛えし宝具としては最高ランクに位置する。（それでもCランク）

煉獄刀・紅蓮：レンゴクトウ グレン- - ランク（B - ランク相当）

再世者である付喪海から受け取った異界における鬼神の一振り。

真紅の刀身が指し示すは圧倒的な破壊である。

血肉を吸えば吸うほど、その切れ味は鋭くなり刀身は赤く染まっていく。

本刀剣は再世者から受け取ったものであり、世界からの制限は元にかからないため、彼の固有武装となっている。

上記のレンゴクトウ・グレンを除けば、破損・欠損すれば新たに投
影（創造）することが出来る。

普段はレンゴクトウ・グレンを除いて、手元には無い。
必要となれば順次、創造、破棄を繰り返す。

名前：メデューサ

肉体年齢：24歳

身長：172cm

体重：57kg

スリーサイズ：B88・W56・H84（cm）

特技：乗馬 軽業 ストーカー

趣味：読書 お酒

属性：混沌・善

魔眼：石化の魔眼キュベレイ

桜に召喚されて、令呪によって慎二と仮契約した騎兵の英霊。その後、セイバーに敗れた際、神堂元に令呪ごと譲渡される。

女性の英霊で、ライダーの名の通り高い騎乗能力と機動力を持ち、豊富かつ強力な宝具を用いる。

常に魔眼を封じるための目隠しを装着しているが、後に近衛の遺産である魔眼封じの眼鏡を受け取る。

武器は鎖の付いた鉄杭を用いた機動性を生かした変則的な戦いを得意とする。

長身で女神にも例えられる妖艶な美貌と、それに似つかわしくない奥ゆかしく丁寧な性格（元曰く「可愛らしい」）で近寄りがたいものはない。

元が愛した数少ない女性の1人であり、彼女もまた彼に対して感謝の念と好意を持っている。

（元が愛した女性の他にはアルトリア、蒼崎青子がいる）

生前は、女神アテーナーも嫉妬するほどの美貌と美しい髪を持つために怒りを買ひ、形なき島に姉のステンノ、エウリュアレ共々追放された。

しかし、それでも英雄達による討伐はやむことは無く、姉達を守るために彼らを殺し続けた。

血を吸い続けたことで崩壊し、最後は魔物『ゴルゴン』と成り果て最後はペルセウスによって討伐されてしまった。

誰もが羨む美貌とは裏腹に彼女にとっての美しさの基準は『小さくて可愛い』であるため、自分の容姿はあまり、好ましくは無い。
なお、求愛してくる海の神ポセイドンには鬱陶しく思っていたようだ。

身体スペック

間桐桜	筋力 B	耐久 D	敏捷 A	魔力 B	幸運 E	宝具 A +
神堂元	筋力 B	耐久 C	敏捷 A	魔力 B +	幸運 D	宝具 A +

所有スキル一覧

魔眼：A + ランク

最高レベルの魔眼・キュベレイを保有。対魔力が低い者はほぼ無条件で石化されてしまう。

高い魔力を持つものでも、全能力値がワンランク低下する“重圧”をかけられてしまう。

単独行動：Cランク

マスター（元）からの魔力が絶たれても現界していただける能力でランクCにおいては、1日程度存在し行動可能。

怪力：Bランク

一時的に筋力を増幅させる、魔物・魔獣が保有する能力で発動中は筋力をワンランク上昇させる。

神性：Eランク

ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。魔物としてのランクが上がったことでここまで退化してしまっている。

対魔力：Bランク

発動における詠唱が三節以下の魔術を無効化する。大魔術・儀礼呪法を用いても傷つけることは難しい。魔力を用いた攻撃には圧倒的である。

騎乗：A＋ランク

騎乗の才能。獣であれば幻想種（聖獣・神獣）すら乗りこなせる。ただし、竜種は該当しない。

ブラッドフォート

アンドロメダ

他者封印・鮮血神殿：Bランク

結界内部に入った人間を融解し、血液の形で魔力へと還元して、使

用者が吸収する。

形はドーム状をしており、端から見れば巨大な眼球に取り込まれたように見える。ただし、結界外からは敵に察知されないために、そのようには見えないようになっていいる。土地の霊脈を傷つけるため、同一の場所に連続して施すのは不向き。

魔力の供給として用いるが、魔力のある人間であれば体調不良程度でとどまるため、魔術師、魔法使いには効果がない。

ブレーカー ゴルゴーン
自己封印・暗黒神殿：Cランク

対象に絶望と歓喜の混ざった悪夢を見せ、その力が外界へ出て行くことを封じる結界。普段はライダーのバイザーとして使用しされており、自身のキュベレイを封じている。

だが、元から魔眼封じの眼鏡を受け取った後は使用する機会は殆ど無い。

当然ながら、自身以外にも使用できるため、この宝具の見せる夢を媒介に、ライダーは対象の人間から吸精することも可能。（淫夢）

ベルレフオーン
騎英の手綱：A＋ランク

あらゆる乗り物を御する黄金の鞭と手綱。

幻想種であっても、この宝具でいうことを聞かせられるようになる。

また、乗ったものの能力を向上させる効果もある。

主に召喚したペガサスに使用し、真名開放すれば、限界を取っ払って時速400～500kmという猛スピードで相手に向かって呐喊する。

その威力は城壁が衝突するに等しく、エクスカリバーにも匹敵する威力を持つ。

第一話 I c a n · t f l y !

本日は晴天なのだろう、雲ひとつない空に映し出されるのは瞬く星々が美しく輝いている。

隣には、男は彼が愛した女性メドゥーサが共に風を切っている。

「なあ、メドゥーサ」

「なんですか？ 元…」

「星が綺麗だな」

「ロマンチックなことを言いますね… 本当にあなたは変わりましたね」

「…こんな俺は嫌いかな？」

小さく彼女は笑う。

その仕草の一つ一つが美しく、愛らしく、愛おしく感じた。

恐らく、同姓である女性ですらその仕草には見惚れるだろう。

「いいえ… 好ましく思えますよ。 初めて会ったときからも前に会った時よりも好ましく思います」

好ましく思うか… こいつらしい言い方だと思う。
でも、そこに惹かれたのかもな…

「それにしても…」

「…ん？」

「いつまで落ちるのでしょうか」

風を切りながらの落下。

世界の外れから落とされた先は空の遥か上空であった。

だからだろうか、いつもよりも星が綺麗に見える。

「…地面に衝くまでじゃないか？」

「私はともかく、元は死にますよね？」

「……確実に」

上空5000mからのパラシュートなしでのスカイダイビング中なのだ。

…ああ、風が痛い。

「季節は3月くらいか」

「場所は麻帆良と言いましたか？」

「イシュタルからの情報はそうだったな、このまま落ちれば間違いなく麻帆良学園という敷地内に着くだろう」

地上まで500mを切ったところでも彼らの心持は全く変わらない。その胆力は英霊であるメドゥーサはともかく…人間となんら変わらない元がこつも落ち着いていられるのは、納得がいかないものがある。

彼は自分はいくまで人間だと言い切るだろうが、この時点で人をやめているだろう。

「…うん？ 地面が見えてきたな」

「そうですね、それでどうするんです？」

彼はその疑問に彼女を抱きかかえるように…所謂、お姫様抱っこの状態である。

「元？」

「少し我慢してくれ」

彼女に微笑みながらそういう彼の周りの大気は激しく渦巻く、それは五大元素のうちの『空』と『風』である。

地面までは50mである。

その場所から、彼らは静かに地面に降り立つ。

「…死ななかつただろ？」

「ふふ…そうですね」

男と女その会話内容はともかく、その空気は惚気ているカップルのものである。

だが、その微笑ましい？光景を壊すものがある。

「なあ、兄ちゃん姉ちゃんよ」

「「ん（はい？）？」」

「こんなところで惚気んなよ」

周りを見渡せば、そこには化生の類がうじゃうじゃしていた。
烏頭や関西弁を話す鬼が20を超えていた。

「…全く、イシユタルも面倒な時に送ってくれた」

「女性の嫉妬は怖い…ということですよ」

「…フツ、メドゥーサが言っていると説得力があるな」

「ふふ…経験談ですよ」

まるで、こちらを異物でも視るようにしている化生の類。
それもそうだろう、彼らの登場のしかた、そしてこの態度は”普通
ではない”のだ。

「一つ聞きたい。 その鬼」

「なんや？」

「ここは麻帆良であっているな？」

「そうや」

「それで、お前らは敵か…？」

その答えに彼らは歪な笑みで返した。

鬼の笑顔など視たくも無いというのが彼の正直な答えだった。

「わて等は召喚されただけや、まあ主の目的からみたら…麻帆良の敵やろうな」

「そうか…メドゥーサ」

「わかりました」

「……!?」「……」

彼らを包んでいた化生たちは目を疑った。

今まで獲物だと思っていた、目の前の男女の空気が一転して変わったのだ。

その空気は普通の人間からは発せられない殺気であった。

「くっ（なんや、こいつら!）」

いや、もはやここまでくれば覇気に近いだろう。

「悪いが消えろ」

「いきます…!」

彼らの生はそこで終わった。

あいつらはなんだ？

一人は黒のパンツに黒のシャツ、黒のコートに真っ黒な髪と肌を除けば全身が黒だった。

それを除けば、普通の人間に見える。

だが、もう1人のでかい女はなんだ…。

「茶々丸…あれはなんだ」

「分析の結果から、魔力と測定不能の物質で形成している人の形をした何かです」

人の形をした何か…だと？

そもそも私達がここにいるのは侵入者を迎撃に出るためだった。今までと同じ、雑魚どもだと思った。

爺からの知らせにうんざりしながら茶々丸と向かった。

予想通り、いたのは数は多いがいつもの鬼や烏頭に狐女のいつもの面子であった。

しかし、その中心にいたのはいつもとは違う見たことも無い男と女だった。

「あいつらも敵か？」

「敵かは分かりませんが、どうやらアノ人たちは彼らの敵のようです」

あいつらも侵入者には変わりはない。

金髪の少女は元とメドゥーサを侵入した際に鉢合わせしたと思ったのだろう。

現にその通りなのだが、目的はまるっきり違った。

「マスター、戦闘に入るようです」

20対2…その戦力比から見ても彼らの負けは目に見えていた。だから、彼女はマスターと呼ぶ少女に戦闘が終わるまで待機を命じた。

少し手でも雑魚共を減らして、くたばってくれることを望んだ。

だが、現実は違った…。

「…なんだ、これは」

…一方的な殺戮でできた。

なんだ、この光景は…。

少し怪しくはあったが目の前にいた男女はただの人間のはずだ…なのに。

「強化をかける必要も無い…！」

「元…生き生きしてますね」

男の持つ深紅の刀は血を吸うごとに喜びの咆哮を上げるかのごとく、次々に仲間達を切り捨てていく。

刀身の長さからか、その円はそれほど大きくは無い。振るわれる刃の軌跡は大きくはないが綺麗な紅の円を描いていた。

その円はつまりは刃の届く長さでもある。

円が無骨な首を通り過ぎる。

その刹那、首は綺麗にずれ落ちた。

斬られた側としてはいつ斬られたかもわからないだろう。

混戦の中、元の後ろから大きな一撃が入ろうとしている。

しかし、その一撃は決して届くことなく、メドゥーサの鉄杭に阻まれ、身体をそのまま貫かれる。

何という光景だろうか。

混戦の中、彼らには傷ひとつ無く、対して化生の数は一つまた一つと減っていく。

最初こそ、20いた存在は今では5つにまで減っている。

「…お前は何なんだ」

「うん？ 人間だが？」

男は息一つ乱すことなく、簡単に返した。
だが、その答えに誰が信じられようか…。
少なくともこの光景を見ているものには信じられるはずにはなかった。

「元は人間かもしれませんが、私は人間ではありませんよ」

「そういう考えならば、俺も人ではないだろう？」

「ふふ、そうかもしれませんがね」

馬鹿にしている。

今の今まで殺し合いを繰り返していた者たちの会話とは思えないまでの和やかな声色だった。

息も感情も乱すことなく、ここまでの光景を作りあげていた。

「貴様等…ふざけているのか！」

「まさかな…。ただ、拍子抜けしただけさ…化生の存在ゆえに少しでも楽しめるかと思っただが…存外そうでもなかった」

「簡単に済むのなら、それでもいいのでは？」

「…まあ、そうなんだがな…こいつがさ」

舐められている。

残ったのは5体…20でも敵わなかったものが5で敵うはずもない。しかし、このままで済ませたくはなかった。

「……」

「まあ、舐められっぱなしってのもなあ…」

「いっちょ…やるか？」

「舐めんなよ…」

「殺す…！」

先ほどまでに無い、殺気が化生から流れ出る。

それもそうだろう…ここまで人間に舐められて黙っていられるほど彼らは腐ってはいなかった。

「いい殺気だ…それでこそ殺す価値がある。…こちらを殺す気もないくせに本気でやってもらおうなどと思っなよ？ 化生共…！」

「やってやらあ…！」

「」「」「うらあああ…！」」「」「」

「来い…！」

いわば、彼のやっていた事は挑発だったのだ。
彼らの本気を引き出すための…。

「…はあ」

彼の性分を理解している彼女も溜息を洩らす。
呆れているのか、見放しての溜息なのかは分からない。
しかし、それはどちらでもない。

「（…まあ、元はこうでなくては）」

本当に彼女は彼のことを理解している。

金髪の少女は言葉を失った。

正体不明の女も男もここまでとは思わなかった。

端から見ていてもわかる…奴等は戦いなれすぎている。

年齢は20代半ばに見える…だが、その年齢とは不釣り合いすぎるまでの戦いようだ。

恐ろしかった。

戦いぶりも、何もかもが。

しかも、男は魔力も気も纏わせることなく戦っている。

異常すぎる…剣技は確かに目を張るものがある。

葛葉や桜咲よりは腕は上だろう…だが、圧倒的に上ではない。

なのに、何故こうも圧倒的なまでに戦えるのか…。

「茶々丸」

「彼の反応スピードは確かに高いです、剣速も葛葉様や桜咲様よりも上でしょう…しかし、目に張るものはそこではありません」

「戦術幅か？」

「はい。…ですが、驚くべきところはそこではありません」

「どういうことだ？」

「逐一変わる戦いの場でその場に最も適した戦術を的確に最速で選択しているのです」

茶々丸に言われて、男の動きをしてみる。

…確かに、言われてみればそうだ。

動きが逐一変わるのだ。

奴等を斬ったと思えば、その瞬間で動きの色が全く変わるのだ。その戦い方はまるで同一人物のソレとは思わない。

一体どれだけの戦術をもつて、体得しているのだろうか。

剣を使ったかと思えば、体術で相手を絡めとり動きを拘束し、首の骨をはずし命を奪い取る。

恐ろしい。

この身は魔力を封じられている。

このまま男との戦闘に入れば、間違いなく破れるだろう。

…だが、封印がとければ男に勝てるのか？

圧倒的な魔法で敵を粉碎し、叩き落す。

それが、アノ男に通じるのか？

「…ッ！」

私としたことが…闇の福音、不死の魔法使いと恐れられた私が恐れ
ているだと！

ありえない…だが、勝てるイメージが浮かばない……。

必死に頭をふり嫌なイメージを拭い去ろうとする少女とは裏腹に隣にいる少女は彼らの戦闘データを冷静にとっている。

「マスター」

「ツな、なんだ」

不意に呼ばれ、声が上がってしまった。

なんと情けないことか…。

悪の象徴として恐れられた彼女は今では唯の少女に成り下がっていた。

だが、そんな彼女の気持ちとは裏腹に茶々丸と呼ばれていた彼女は冷静に彼らの異常性を告げる。

「男性の方は確かに恐ろしいですが、私には女性の方のほうが異常に思えるのです」

…どうということだ？

確かに、女は人間とは思えない。

しかし、ソレほどまでに脅威とは思えない。

「彼女の俊敏性が異常なのです…魔力による強化も気による強化も見受けられないのです」

「…確かにな。だが、あの女は人間ではないのだから人と同一ではないだろう」

「そうではないのです」

「？」

「人間の形をしている以上、動きに限界はあります…。しかし、あの方のソレはその限界を大きく超えているのです」

「…なんだと？」

「仮に人間の女性ならば、筋力、反応スピード、俊敏性、あらゆる面が規格外なのです」

言われて、女の動きに注目してみる。
今まで男のほうに注目していたせいもあり、女のほうの異常性に気づかなかったのだ。

…なんだ、あの女は。
重力を感じさせない動き、瞬発力…確かに異常だ。
男の異常性はその戦い方。
しかし、女の異常性はその動きだ。

目の前に迫った凶刃を何事も無いように避ける。
言葉にすれば、可笑しくも無いことなのだが、目にしたものだけが分かる。

混戦の中、高速で動く得物を綺麗に避けていく。
言葉には出来ない。
言葉には出来ないのだ。

出来るはずが無い。
もし、できるのならば、その人間は表現力豊かな…そう芥川賞ですら簡単に得られるだろう。

「茶々丸…」

「はい」

「タカミチや他の魔法先生共を呼んでおけ…こいつは私達の手には負えん」

茶々丸は静かに頷き、増援の連絡をとる。

この瞬間に闇の福音…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
の負けは確定したのだ。

一個人として、彼女は自分の負けを認めた…。

第二話 麻帆良との出会い

「あい、わかった…すぐに向かわせよう」

部屋に静かに響いた電話の会話は静かに終わった。

それは麻帆良学園の長…学園最強の魔法使いであり、関東魔法協会の理事も務めるご老体である。

その姿からは見えない力をその身に宿しているのだ。

「（まさか、エヴァから増援の要請があるとはのお…）」

最初その通信を聞いた時は我が耳を疑った。

ワシの知るエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという少女は真祖と呼ばれる600年を生きた最強の吸血鬼であり、最強の魔法使いを自称するほどの使い手である。

性格も自らの負けを大人しく認めるほど大人しいものではなく、どちらかというと唯我独尊を地でいくようなものだ。

それが、戦いもせずに増援を求める…。

「恐ろしいのお…」

彼は再び電話に手を伸ばし、魔法先生たちと一部の魔法生徒に連絡をとる。

相手のほうもまさか、増援を求められるとは思ってもしなかったように、声に揺れが見えた。

「それでは高畑先生…頼みますぞ」

静かに受話器をおいて、溜息を吐く…。

「まさかネギくんが来て一月でこうも厄介なことに巻き込まれるとはのお…、いや、ネギくんが目的かの？」

彼の心労は淡々と募っていく。

「メドウス…怪我はなかったか？」

「はい。元もお怪我はありませんか？」

「フツ…この程度で怪我を負うほど軟な鍛え方はしてないよ。…
そこの二人出てきたらどうだ？」

「「!？」」

まさか、気づかれていたのか！

こちらは完全に気配を消していたはずだ。

確かに、認識遮断の魔法は施してはいなかった。

だが、こうまで簡単に見破られるとは思わなかった。

俺達から少し離れたところにある林の中から二人の少女が出てきた。

1人は10歳、もう1人は15、6歳か？

どちらにしても、兩人とも人間ではあるまい。

しかも、片方は…、

「そちらの少女は吸血鬼か…？」

「そうだ」

あくまで気丈でいなくてはいけない。

増援の少なくともタカミチたちが来るまでは、時間をかせがねば…。

…いや、なにより私ともあろう存在がこうも後ろ向きな考えをしなくてはいけないのが腹が立つ。

「私が闇の福音と恐れられる真祖の吸血鬼だ！」

私の口上に呆気にとられるように二人は呆けている。

なんだ？ 私は可笑しなことを言ったか？

「真祖…？ 貴様がか？」

「そうだ、何か文句があるのか」

「…メドゥーサ、真祖に見えるか？」

…なんだと？

「全く見えませんね」

…イラッ。

この女…少し背が高く、胸がでかいからって…。

「まあ世界が変われば、真祖の定義も変わるか…」

「そうですね…。それに真祖がこんなに可愛いはずがないです
し」

「ほお…」

ダメだ…殺そう。

「マスター…」

「貴様等…」

「「なんだ？（なんです？）」「」

「死ねええ！！」

こうして、最強の魔法使いと調整者、英霊の戦いが始まった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

ディレイ・スベル
遅延呪文という技巧を遣い、詠唱を完了させた魔法を待機させる。

「茶々丸！」

「ロケットパンチ」

「なっ！？」

男は両腕の前腕部の有線式の射出パンチ…所謂ロケットパンチに驚

いているようだ。

確かに何も知らない人間がこれを目にすれば、驚きもするだろう。

しかし、男の驚きは一瞬で終わり、放たれたパンチは彼が蹴り上げることで防がれる。

だが、それが隙になる。

「魔法の矢29！」

魔力によって攻勢された29本の矢が放たれる。
しかし、それは彼に届くことはなかった。

――ロー・アイアス――

それは7枚の花弁のごとき盾によって完全に防がれていた。
魔法の矢とはいえ、それは投擲である。

つまりはこの盾には無意味なのだ。

投擲でこの盾を破るのであれば、それこそゲイ・ボルグ並みの神秘
を用いなければ、不可能である。

「クソ……！」

「フッ……」

何なんだ、あの盾は！

エヴァンジュリンは訳がわからなかった。

何も無い空間から、急に盾が現われたのだ。

「（アーティファクトか？）」

「思考に陥っている場合か？」

「ッ!？」

彼女は寸でのところで身体をそらせる、慣性の法則に従い、その場に残った僅かな前髪は斬り散らばった。

だが、それで追撃の手をやめるほど元は甘くは無い。

前動作の無い剣筋は彼女の命を刈り取るうとしている。

「マスター！」

「チィッ！」

しかし、それは男と女の間に入った光の筋によって阻まれた。どうやら、眼球部からのレーザー光線なのだろう。

「ロケットパンチに光学兵器…まるでアニメだな。大した科学力だ」

「お褒めに預かり光栄です」

「それに礼儀作法もシツカリしている…短気な主に比べて有能だな」

「チッ…良く喋る口だ！ リク・ラク・ラ・ラック・ラ「私を忘れてませんか？」ぬう!？」

魔法の作動キーなのだろう…彼女の呪文は最後まで紡がれること無く、メドゥーサの鉄杭に妨げられる。

当たりこそしなかったものの、彼女達は追い込まれていた。

負傷はしていない。

だが、追い込まれている。

「（タカミチ達はなにをしている！）」

彼女は憤っていた。

増援が遅いのだ。

しかし、彼女が増援を要求してから5分も経っていない。

張り詰められた空間が時間を歪めているのかと思うほどに時間の流れが遅く感じた。

「マスター……」

「茶々丸、情けない声を出すな」

「……これではまるで苛めているみたいですね」

「はあ……全くだ」

情けなかった。

ここまで追い込まれても相手は本気のほの時も出していない。

対して、こちらは息も絶え絶えだ。

ここまでくれば、怒りもなく、すっきりもせず、情けなかった。

「クウ……」

強く拳を握る。

私はこんなにも弱かったのか。

闇の福音とまで恐れられた私はこんなわけも分からん奴等に負ける

のか…。

その光景に元は溜息をはいて、深紅の刀身を鞘に戻した。

「…え？」

「どういづつもりで？」

「そちらの戦意はなくなったと判断したまでだ。ならば、こちらが剣を持つ必要はあるまい」

「どこまで…どこまで私等を馬鹿にすれば気が済む！！」

いつそのこと殺してくれたほうがマシにも思えた。

しかし、この身は不死の身。

並大抵のことでは死ぬことは無い。

「馬鹿にはしれないさ…俺らには元々戦う気はないのだからな」

「それはどういう「エヴァ！」タカミチ！」

そこに、ようやく増援が来た。

「エヴァ、無事かい！？」

「あ、ああ…」

エヴァと呼ばれる少女と茶々丸と呼ばれる少女は一気にこちらとの距離をとり、タカミチと呼ばれていた増援達と合流した。

「絡繰さんも無事ですか？」

「桜咲さま…ご心配かけました」

恐らくは魔法使いの増援…中には中学生くらいの背丈の少女も何人かいる。

なるほど…俺達がいた世界よりは神秘に対する姿勢が緩いのか…。

「さて、僕の元生徒がお世話になったようだね」

「（この男…タカミチといったか。デキルな…）」

「高畑先生…」

「分かっています、ガンドルフィーニ先生…。それじゃあ、侵入者の二人…準備はいいかい？」

「タカミチ…気をつける。あいつ等2人とはいえ、かなりやるぞ」

彼らは杖を取り出し、魔法の始動キーを唱える…。

いつ、第二ラウンドの戦闘が始まるうとしていたが…、

「…元」

「分かっている」

彼らは短いやり取りで、一つの答えを導き出した。

それはなんとも呆気ないものであった。

その姿は両手を挙げての…。

「降参だ（です）」

「はい？」

戦いは呆気なく、格好悪く終わった。

第三話 化かし合い

目の前には魔法使いたちが雁首並べて、口を半開きで佇んでいる。まあ、分からなくはない。

これから戦闘だというときにイキナリの降参宣言…。

「ふ、ふざけているのか！ 貴様等は！」

眼鏡をかけた黒人男性のたらこ唇と角刈りが特徴な男が吼えている。全く、鼓膜が痛い。

「ふざけているつもりはありません。そもそもこちらには最初から交戦する意志はないのですから」

「いきなり、仕掛けてきたのはその少女だろうが」

俺達の発言で魔法使いどもは小さき少女に視線をずらす。あまりに予想外の発言に少女は幼女と呼ばれたことに怒りたいのだろうが、そももいかない。

「俺達は事故でこの地に来てしまった。勝手に敷地に入っただけだ。申し訳ないと思う。だが、来てイキナリ化生に襲われたのかと思えば、次はあなた方だ…少しはこちらの話も聞いていただきたい」

「し、しかし…」

「私達には交戦の意志はありません。出来ればその杖を下ろしていただきたいのです」

「ぬ、ぬう…」

黒人の男は言いよんどってしまった。

確かに彼らの視点から見れば、俺達は不法侵入者である。

しかし、だからといって問答無用で攻撃を加えていいはずがない。

それは彼らがマギステル・マギを自称しているはずの魔法使いだからだ。

「先生方！ 耳を傾ける必要なんてありません！」

そこには綺麗なブロンドのロングヘアの少女がいた。

恐らくは高校生程度の年齢だろう。

「不法侵入者の言うことなど信じてはいけませんわ！」

なるほど…、確かにそのとおりだ。

俺が彼らの立場ならば、その通りにするだろうな。

「君はマギステル・マギを目指しているのか？」

「当たり前です！ 魔法使いとはそういうものです」

「ふむ…ならば、君は立派な魔法使いなどにはなれないな」

「侮辱してますのー！」

「いいや、少なくとも自分の価値観のみに固執し、自ら話し合いの場を蹴り飛ばすような愚鈍な存在が立派な魔法使いなどになれるはずが無いだろう？」

「グッ…」

「魔法が使いたいただけの馬鹿は馬に蹴られて死ぬ」

「そ、そこまで言われる謂れはありません!」

全くその通りだと思う。

「元、喧嘩をうってどうするんですか」

「…すまん、ついな。 エミヤを知っているこちらとしてはアノ程度で正義を語って欲しくはなかったのだな」

彼の知る最上級の正義の味方はエミヤシロウなのだ…つまりはこちらの世界の正義の味方はマギステル・マギなのだ。
だから、その程度の認識で正義など語っては欲しくなかった。

正直、苛立ちがした。

「シロウですか…いえ、アーチャーですかね」

「どちらもだよ…」

「何の話をしている?」

こちらの会話に怪訝な表情で伺ってくるエヴァンジェリン。
おっと…話がずれたな。

「申し訳ないが、最高責任者にあわせてもらえないか?」

「は？」

「元？」

「このまま睨みあつていても時間の無駄だろう…それに夜も深い。こちらには女性もいるんだ、それはそちらも同じだろう？」

「何を言っているんだい？」

「夜更かしは美容の敵ってな…」

「プ…」

小さな少女が笑いを洩らす。

それに周りは何があつたんだという怪訝な視線を彼女に送る。他の人間にとっては俺のこれは軽口にすぎないからだ。

「ククク……フハ！ アハハハハハハハハハハっ！！！」

ここまでコケにされれば一層気持ちがいい。

先ほどまで感じていた不快感も情けなさも綺麗になくなった。負けたのは私が弱かったただけなんだ。

「いいだろう、爺のところには私が案内してやる」

「エヴァー！？」

「「「エヴァンジェリン（さん）！？」「」「」

「大丈夫だ、こいつ等は安全だよ。わざわざ呼んで悪かったな」

「フッ…」

「……」

全く、ここまで事態を面倒にした張本人が何を言っているか。
だが、ありがたい反応だ。

「では連れていってもらえるかな吸血鬼のお嬢さん？」

「お嬢さんは止める。 これでも600年生きているんな」

「それは失礼したMs・「エヴァンジェリンだ」Ms・エヴァンジェリン」

「お前等の名前は？」

「度々失礼した。 俺の名前は神堂元という」

「私はメドゥーサといいます」

「元にメドゥーサ…タカミチお前も来い！ 茶々丸は先に戻ってていいぞ」

俺達は楽しそうに笑うエヴァンジェリンの後を着いて行っただ。

後に残るのは慄然と立ち尽くしたかわいそうな人たちだけであつた。

「え〜と…皆、解散」

ソレだけを言い残し、タカミチと呼ばれていた男もその場を後にした。

「「「「」」」」」

「…え〜とお姉様」

「愛衣、帰って寝るわよ」

寂しく、風が流れた。

「ふむ、それで君達は何者かね？」

俺達が案内されたのは、確かに麻帆良学園理事長のいる場所だった

はず。

だが、目の前にいるのは…。

「エヴァンジェリン、誰が化生に会わせると言った」

「ふぉ！？」

「残念だが、こんなんでも人間だ」

「…なんだと」

「まさか、こんな形の人間がいるとは蔵現以上に可笑しな人間がいるとは思いませんでした」

「会って、いきなりその発言はひどいのではないかい？」

「そうだ、こんなんでも辛うじて人間だ」

「エヴァよ…お主が一番ひどいのぉ」

メソメソと業とらしく泣く化生…もとい理事長。
うざったいな…。

「俺の名前は神堂元という、こちらがメドゥーサ俺の人生のパートナーだ」

「初めまして、メドゥーサといいます。 人生のパートナーかは分かりませんが恋仲であることには変わりません」

「うぬう…こちらを無視しながらの自己紹介に惚気を入れるとはや

るのお」

「惚気たつもりはない。あくまで事実しか言っていない」

「まあよい。それでお主らは何の目的でこの麻帆良に訪れたのかの？」

やっと本題にはいったか。

タカミチとエヴァンジェリンは目的に機敏に反応を示した。

タカミチという男はこちらを全く信用していない。

エヴァンジェリンはこちらを認めながらもやはり信用しきっているとまでは行っていない。

会って1時間も経っていないのだから、それ以上をもとめるのは酷であろう。

「目的か…その前に、あなた方は魔術というものを知っているか？」

「魔法とは違うのかの？」

「英霊は？」

「知らないの」

「根源は？」

「聞いたことがないのう」

「調整者は？」

「知らな…いや、聞いたことがある」

調整は知っているか…いや、俺達の認識している調整者と同一の存在かは分らない。

「若い頃にどこで聞いたか覚えてはいないが、確か破界の前触れとして現われ、人々と世界を救うと…な」

ふむ…多少の認識の違いはあるが、恐らくは正解かな？

「元…」

「ああ…まずは目的の前に俺達のことを説明させてもらう」

こうして、化生紛いの理事長との化かしあいが始まった。

「…異世界？」

「そつだ、俺たちはこの世界の人間ではない」

「魔法世界ではなくてかい？」

「魔法世界のことではない、謂わば並行異世界だ」
△ンドウス・マギクス

近衛近右衛門とタカミチ・T・高畑、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは何を言っているんだというような顔をしている。
…まあ、いきなりこんなことを言われてもこうなるよな、こいつがさ。

「元…証拠はあるのか？」

「証拠…ねえ。お前にはとっくに見せているはずだが？」

「なんだと？」

「俺は君たちのいう魔法使いではない、あくまで魔術使いだ」

「魔術…？ 先ほどもでてきたが魔法とは違うのかの？」

「神秘で魔力を使うという点ならば同じではあるが、概念が違う」

「概念かい？」

「そうだ。魔術とは人為的に奇跡・神秘を再現する行為の総称であり、魔法から格下げされたものの事を言う」

「格下げとはどういう意味だ？」

「そもそも魔法とは本当の意味で“奇跡”と呼べる現象を引き起こす神秘を指す。その時代の文明の力：つまりは科学だな。いかに資金、時間を注ぎ込もうとも実現不可能な“結果”をもたらす物のことだ」

「なるほどな…時間が経てば科学力はあがる、それ故に時間と文明の発展と共に魔法から魔術に格下げされるわけか」

「理解が早くて助かる。そして、先ほど言った証拠とは魔術の中にある投影というものののだが…」

「投影？」

「…元、見せたもののほうが早いと思いますよ」

「そうだな…先ほども言ったが既にエヴァンジェリンには見せている故に…」

- - - 創造・開始 - - -

創造の理念を鑑定…、
基本となる骨子を想定…、
構成された材質を複製…、
製作に及ぶ技術を模倣…、

成長に至る経験に共感…、
蓄積された年月の再現…完了。

その手に現れたのは圧倒的な神秘に包まれた聖剣が現われた。
その中に内包されている魔力の量に驚いた。

「な、なんだそれは」

「不滅の刃の意をもつ英雄オーランが有し聖剣デュランダル、先に
見せた盾はアイアスの盾だ」

「デュランダルだ！？ それにアイアスの盾って、あれかギリシア
神話に出てくるヘクトールのあれか！？」

その答えに俺は静かに頷いて肯定する。

やはり、基本な歴史はこちらもあちらも変わらないか…やはり、根
源の影響下の中にあるか…。

「…なるほどの、こちらの魔法では確かにこれほどの魔力を内包し
た剣など造り出すことは出来ん…じゃが、とても君の言う魔術とは
かけ離れていると思うのだがのお？」

「ほお…」

「どういうことです？」

「元くんが言っておつたろ？ 文明の力…科学の力で実現可能なも
のを魔術という…じゃが、とても科学の力ではその剣は作り出せ
ると思えないじゃ」

「大したものだ…この短時間で理解するとは。貴方が思っている通り、これは俺達概念で言う魔法だ」

「つまりは、君も魔法使いということかの？」

「そうだ、俺達のいた世界の6人しかいない魔法使いのうちの一人が俺だ…。本来、投影はランクダウンされて造り出される。しかし、俺の投影は魔法の影響でランクダウンされず、十全の状態で創り出すことができる」

「創り出すか…つまり、貴様の魔法は創造といったところか？」

「いやはや…お前も優秀だな、その通りだ。俺は理解したものを魔力によつて、完璧な状態で創り出せる…応用を利かせれば、理論はあつても基礎科学力が足りなくて作るができないモノも創り出す事ができる」

部屋は沈黙で包まれた…少し見せすぎたか？

「（元、見せすぎです。下手をすれば…）」

「（ああ…排除されるかもな）」

「（なのに、何故そこまで落ち着いているのです？）」

「（忘れたのか？ 曲りなりでもこの世界の魔法使いは正義を自称しているのだ…少なくともいきなり排除とはならんと信じている）」

「（信じている…ですか。やはり、あなたは変わりましたね）」

それに俺はニヒルな笑みで答える。
そうだな、信じるしかあるまい。

この世界の歪みがなんなのかは分からないが、個人だけではとてもではないが対応が出来ないのも事実だ。
過ちを繰り返すわけにはいかない。

「いいじやろう、君達を信じよう」

「いいのですか？」

「いいんじゃないよ…もし、こちらに敵対する気があるんならワシ等など簡単に殺されとるわい。　そうじやろエヴァ？」

「悔しいがな、封印状態の私では手が出ん…いや、封印がなくなとも…」

「（そこまでの相手か…）」

タカミチは男の身なりを見る。

初めて見たときは夜の暗闇の中であつたせいかな、良くはわからなかったが…確かに良く鍛えられている。

衣類の上からでも分かる。

マンガに出てくるような無骨な筋肉の盛り上がりではない。

戦いに必要なところには最大限の筋肉があり、そうでないところには最小限の筋肉がある。

極めて理想的な肉体なのだろう。

「なにか？」

「あ、いえ！　何でもありません…」

私は決して男色ではない。

しかし、その男の出で立ちに同じ戦いを経験したものとして見とれてしまったのだ。

声をかけられ、少し恥ずかしかった。

「ところで、エヴァンジェリンにかけられた封印とは？」

「……」

「うむ…なんて言っていないもののお」

「…登校地獄だ」

「…は？」

「私は15年、この学園に縛られ続けているんだ！」

話を聞くと、ナギ・スプリングフィールドというサウザンドマスタ
ーの異名を持つかつての英雄に悪事をやめさせるために、15年前
に“登校地獄”という呪いを掛けられ、麻帆良学園に縛られている
のだという。

「約束したんだ、3年経てば呪いを解くと！　なのに勝手に死んだ
…」

約束の反故か…。

マギステル・マギだとか、魔法使いだとか…そんなのはどうでもい
いが、一人の男として女に約束したものを破るか。

俺が言えた義理ではないが、許しがたいな…。

「それはあなた方では解けないのですか？」

「無理だ。アイツの魔力はバカみたいにでかいからな…そんな所そこらの魔力では呪いは解けない」

「……。エヴァンジェリン、聞きたいことがある」

「なんだ？」

「もし、呪いが解けたとしたら貴様はどうする？」

「質問の意図がわからんな」

「ならば、率直に聞こう。学園を出ることが出来たら、再び悪の魔法使いとして活動を始めるつもりか？」

「…私は悪の魔法使いだからな。とはいえ、さすがに自分からバカなことするつもりはないよ」

「その言葉に嘘偽りはないな？」

「元…？」

「貴方は何を言っているのです？」

「私は誇り高い悪の魔法使いだからな…嘘は言わん」

「誇り高い“悪の魔法使い”か…」

まあ、正義の意味も知らずに正義を自称するような輩よりは信用で

きるか。

その言葉に薄く笑みを浮かべていた彼の手にはいつの間にか歪な形をした短剣が握られていた。

「その短剣はなんだ？」

「それは…」

「裏切りの魔女という者を知っているか？」

「…あれか？ ギリシア神話に出てくるコルキスの王女か？」

「正解だ…この短剣はそのメデアの裏切りの魔女としての伝説の象徴が具現化した最強の対魔術宝具だ。この短剣で斬られたものはあらゆる契約を一方的に破棄することが出来る」

「…なるほど、呪いとは一方的な契約と見ることも出来るね」

「じゃ、じゃあ、その短剣があれば忌まわしいこの呪いも解けるんだな！？」

「可能だ…だが、それには約束してもらいたいことがある」

「約束…？」

そうだ。

少なくとも、この約束を守ってもらわねば…。

「一つは、呪いが解けたとしても中等部、高等部と最低でも通い続

け卒業すること。二つ目は、人々の迷惑になるような真似は今後行わないこと。三つ目は俺達の協力者となること」

「うん？ 一つ目と二つ目はわかるが三つ目はどういう意味だ？」

「俺たちはつい先ほど、この世界を訪れたばかりだ。この世界のこととは概要は知っているが、詳しくは知らない。だから、知識面においての協力と非常事態時に対しての手を貸すことを約束して欲しいのだ」

「…いいだろう」

「近衛殿と高畑氏も彼女の呪いを説くことに反対はないな？」

「僕からは特にないよ」

「うゝむ…ワシとしては少し不味いのじゃが」

「…本来彼女は3年間のみこの場にいるはずだった。話を聞けばこの世界の悪の象徴として彼女はいるみたいだが、それを縛り付けるのは人としてどうなのだ？ マギステル・マギよ」

「痛いところを突いてくるのお…しかし、これから起こりうる被害の可能性を見逃すほうが人としてマギステル・マギとしてどうかと思うと思うんじゃないか？」

俺もその意見には同意だ。

自分から言っておいてだが、俺の主張には穴がある。とても、大きい穴が。

しかし、その穴を埋めるのは俺が得意とする分野でもある。

「それなら、安心しろ。仮にそうなった場合、もしくはそうなりそうな場合は俺が彼女を殺す」

「ほお…しかし、彼女は真祖の吸血鬼で不死の存在じゃ。簡単には死なんぞ…ましてや、完全に力を取り戻したエヴァは間違いなく最強の呼ぶに相応しい魔法使いじゃからの」

「不死？ 悪いがそんなものは存在しない。エヴァンジェリンよ、貴様は生まれた時から吸血鬼だったのか？」

「いや、最初は人間だった。とある人間にな10歳の時に吸血鬼にされたんだ」

「それは、噛まれたとかではなく、儀礼的なものでか？」

「恐らくはそうだろ…ちょっとまで、まさか吸血鬼のあれも一緒に解けるということは言わないだろうな」

「恐らくは問題ない。真祖とは生まれながらのという意味だ。その儀式も吸血鬼になる呪いではなく、肉体の転生に近いものだろう。恐らくは問題ない」

「恐らくなのだな？」

「…いや、確実に問題ない」

先ほどから、魔眼の力で彼女の体の流れを視ている。一つ魔力に歪みがあるが、それは登校地獄という呪いなのだろう。しかし、それ以外は全く問題がなかった。

「どうする？ 怖くなったか？」

「……」

「エヴァンジェリン」

先ほどから、口を閉ざしていたメドゥーサが口を開いた。その声のするほうに反応すると彼女は微笑んできた。まるで、すべての者を魅了するかのようだった。

「元を信じていいですよ。 彼は一度口にしたら、死んでも守る実直な人間です」

「…しかし、会ってまもない男を完璧に信じろというほうが」

「確かに、難しいでしょう。 ですが、私も彼にすくわれた身ですから」

「そつえば、貴様は何者なのだ？」

「…？」

「どういう意味だい？」

「茶々丸が言ってたんだよ…この女は人間ではないと。 魔力と何か分からないもので出来た人の形をした何かだってさ」

「…抜かりましたね。 まさか、いきなり見抜けられていたとは」

「確かにな…まさか、人外はいるとは思ってはいたが、機械人形がいるとは露にも思わなんだ」

「それで、貴様は何なんだ？」

「それを、貴様に言う必要があるのか？」

「お前に聞いているわけではない。私はこの女に聞いているんだ」

言わせるわけにはいかない。

今はまだ早すぎる。

彼女に怪訝な視線を送らせたくは無い。

「元…かまいませんよ」

「しかし…！」

「貴方は私を否定しないのでしょうか？」

「……！」

彼女は目の前にいる男が自分の存在を否定しなかったら、それでいいのだ。

恋は盲目…とはいうが、目の前の彼女はそうではなかった。

言葉だけを聞けば盲目にも聞こえよう。

しかし、その目は綺麗に澄み通っていた。

俺があげた魔眼封じの眼鏡をかけているのにもかかわらず、その目はそれでも魅了があるものに感じる。

「エヴァンジェリン…あなたの疑問に答えましょう」

「……私も化物なんですよ……」

「化物だと？　貴様も吸血鬼だとか言うのか？」

「確かに血は吸いますが……吸血鬼という概念のモノではないですよ」
「なら、なんだというんだ」

「メドゥーサ……私の名前が答えです」

「……ゴルゴン三姉妹の怪物メドゥーサか？」

「はい」

メドゥーサ…ギリシア語で女支配者つまりは女王の意味をもつ。

かの女神アテーナーが羨むほどの美貌と美しい髪をもっていた美しい女性の名だ。

しかし、その彼女はあまりの美しさで女神の嫉妬と怒りを買ってしまったのだ。

そして、形なき島という流刑島に姉であるステンノ、エウリュアレと共に追放された。

「ですが、それでも英雄達の討伐は止むことはありませんでした。

私は姉達を守るために彼らを殺し続けました。一人は石に変え、一人は身体を引き裂き…殺しに殺し続けて、私は自意識を失いました」

「…ゴルゴンの怪物になったと？」

「…意識を失った私が最後に手をかけたのが、姉達でした。いつもは私を弄って笑って、私は悲しんで…それでも、私は愛されていました、私も愛してました。それでも、私は姉達を殺してしまいました…」

「…その後は」

「貴方達も知っているように小生意気なペルセウスに討伐されました。そして、私はその後英霊の座まで招聘されました」

「…して、英霊の座とは？」

「生前偉大な功績を上げた英雄が死後に信仰の対象となったものが英霊だ…分類としては精霊に近いな。そして、その英霊が招聘される場所が英霊の座だ」

「うん？ 彼女には悪いが少なくとも彼女は英雄とは言えないのかい？」

「何も人々に味方したモノ達が英雄とは単純には言えないのです。人々に恐怖され、忌むべき存在として信仰を集めたものも反英雄として英霊の座に招聘されます」

「なるほどな…それで、確かに貴様の生い立ちは同情に値するかもしれないが、なんでこの男が貴様を助けることになるんだ？ 話を聞く限り、貴様は幽霊のようなものだろう？」

「…それは内緒です。私と元の大切な思い出なので」

「「「……」」」

「…何だ？」

三人は元をジト目で見る。

その目は何とも言えないまるで人に嫉妬するような、微笑ましいものを見るような…そうだ、この目は凜がおもちやを見るような目だった。

「…いや何、愛されているな」

「こんな美人にこうまで愛されるなんて同じ男性として羨ましい限りだよ」

「羨ましいのお…ワシも若ければのお」

「…はあ」

「ふふふ…」

溜息を洩らす俺に彼女は綺麗に微笑む。

その笑みにこの場にいた者が男女問わず見とれたのは言わずもがなである。

「それで、呪いは解く決意はできたか？」

「む…」

そういう男の手の上では歪な形の刃をした短剣が器用にクルクル遊ばれている。そして、元は無表情で彼女の顔をのぞみ込む。

「かまわん、やってくれ」

「了解した…約束事は覚えているな？」

その問いに小さな少女が決意を秘めた目で頷く。

その目は先ほどの迷いが一切見られない、綺麗な瞳だったと覚えている。

そして、俺は彼女の胸元の皮膚に薄皮一枚刺す様に歪な刃を突き刺す。

俺は魔眼で彼女の魔力の流れを見る…うん？

確かに魔力の流れの歪みはなくなった。

「…」

「失敗したのか？」

「いや…歪みはなくなった。だが、魔力に大きな増減は見られない」

「どっつ…ッ！」

まさか、私の力を抑えるモノとナギが私にした呪いは別物だということか！？

私は好々しい表情を浮かべる爺に詰め寄った。

「どういうことだ!」

「どうもこうもエヴァ…お主が思っている通りじゃよ」

やはり、この麻帆良を包む結界に関係しているのか!

「…そちらの事情はなんとなくは分かるが呪いは解けた…。エヴァ、約束は守ってもらうぞ」

「…チツ。わかってる…大人しくしているさ」

「そうしてもらえるとありがたい…こちらも無用な殺生は好ましくないからな」

「でも、本当に彼女を止められるのか? 確かにこの麻帆良ではエヴァの力は抑えられておるが…外に出れば」

「問題ない」

そう言つて、俺は先ほど創り出したデュランダルを肩にかけるように注目させる。

「お前たちはこの剣が聖剣と呼ばれるいわれを知っているか?」

「…すまんのお、すまんが説明してもらえんか」

「古今東西、世界には聖剣・魔剣・妖刀など多くの逸話を残した得物が多く存在する。世界で最もメジャーなのがアーサー王の象徴

たるエクスカリバーだろう。」

人々の想いをもとに星々に鍛えられた神造兵装。

「最強の幻想」
ラストファンタズム

聖剣というカテゴリーの中において頂点に立つあの剣は確かに神秘の象徴にも思える。

「そして、このデュランダル柄には伝承どおり、聖ピエールの齒、聖バジルの血、聖ドニの毛髪、聖母マリアの衣服の一部と多くの聖遺物が納められている……つまりは属性が悪・狂のモノにたいしては概念武装となる」

「概念武装とは？」

「決められた事柄を実行するという固定化されたもので、物理的な衝撃ではなく概念にダメージを与えるもののことを言う」

「概念とは存在そのものということかね？」

「その認識であっている。概念とは存在であり魂魄だ。俺の知る限りの概念武装は“浄化”、“転生批判”、“対吸血鬼に対する滅び”、“男性を拘束する”……まあ他にも色々あるがな」

「なるほどね……概念に直接のダメージを与えるのだから、不死だとかは関係ないということか」

概念武装もやり様によつては、死徒二十七祖でも殺しえるのだ。いくら真祖とはいえ、この程度の存在に遅れをとるつもりはない。それが、元の考えだった。

「まあ…そういう訳だ、大人しくしてろよ？」

「フンッ…。分かってるさ」

「それで、君達が麻帆良に来た目的は？」

エヴァンジェリンの件で話が逸れたが…ここからが正念場だ。
はつきり言って、目的はない。

いや、言葉が足りないな…標的となる存在を見極めることが目的であり、麻帆良に拘るつもりはないのだ。

「目的はない」

「ふお？」

だが、この麻帆良が一つのキーとなるのは間違いないだろう。数え切れないほどの世界を渡り、戦場で生きてきたからか、そういった勘が育まれているのかも知れない。魔眼の作用も大きいだろうが、それだけではないだろう。

「確かにこの場所はそれなりにではあるが、興味があるがこの場所そのものに目的があるつもりはない」

「麻帆良に目的があるわけではないと…？　ならば、なぜ麻帆良の敷地内に来たのじゃ？」

キーとなる理由は幾つかある。

一つ目は、魔法の存在だ。

この人物…近衛近右衛門は関東魔法協会の理事を務めているのだそうだ。

魔術で言うところの魔術教会の関東版のトップだ。

つまりはこのご老人を抑えるということは、魔法使い達にとって有利に動ける。

「一種の事故だよ…いや、迷子と言ってもいい」

「迷子のお…いやはや、物騒な迷子もいたもんじゃ」

二つ目は、エヴァンジェリンだ。

確かに約束はしたが、所詮は口約束だ。

それを信じられるほど俺は若くはないし、お人よしでもない。

少なくとも、俺が確信できるまでは監視下に置いておかなくては…。

仮にも、最強の魔法使いを自称している…それに封印下においてもあの戦闘力は目を張るものがある。

「こんな世の中だ…そういう身元不明の人間がいたっていいのではないか？」

「身元不明…、なるほどのお…並行異世界といったかのお？ それで戸籍のない状態でどうやって、この世界を生きていくつもりなのかね？」

三つ目は、情報だ。

この世界に来る前にイシユタルから受け取った情報のなかには魔法スマギクス世界があつた。

この世界には現実世界…旧世界と呼ばれる今いる世界の他に、対になつて存在するもう一つの世界が存在する。

それは極めて不安定かつ、歪なものだ。

この魔法世界か旧世界かは分からないが…恐らくは行った事はないが魔法世界がこの世界の歪みの中心となるのだろう。

となれば、魔法世界と関係の強いモノ達と関わりを持つことはキーポイントの中でも重要度で大きな割合を占める

「どんな世界だろうと“裏”は存在するだろ？ ならば、その中で生きていくだけさ…こいつがな」

「いやいや、このような美しいパートナーが居って裏に生きようなど男としての責務を果たしてはいないのではないかね？」

「うむ…痛いところを突くな。しかし、安心しろメドゥーサも俺も神秘に頼らずとも簡単に死ぬような存在ではない。仮にそのような場面に見舞われようと、それを受け入れていてくれる…。」

「じゃが、危険なことはないに越したことはないじゃろ？」

「ここは安全だと？」

「少なくとも、“裏”で生きるよりはの」

「だが、私達にはあなたが言うように戸籍がない」

だが、俺がこの麻帆良に居を置くことに利点があるように目の前にいる老人にも俺がいたほうがいい理由が存在する。

「それはワシが何とかできよう」

「私達をこの場所に置いておきたい…監視下に置いておきたいと？」

「随分な言い方じゃのお…」

「自分達の立場は理解している。なので、ここに居て欲しいと言つて貰えれば、こちらでも大人しく言うこと聞こうかと思ひもします」

「（…元、そういうことですか）」

「（まずいな…彼のペースに理事長も引き込まれている）」

「（この男、こちらの意図を完全に理解したうえでそれを悟られず上手く誘導されている…戦闘力だけではなく、頭も切れる…藪をつついて蛇どころか竜か）」

「（うぬぬ…まずいのお）そうかの？ それではここに居てくれる

かの…勿論戸籍は用意するからの」

「とはいえ、こちらにも用事というものがあります。そちらの監視下に入るということは自由に動くことが出来ない…」

「（全く、恐ろしいのお…少しでも気を抜けば絞り取られるだけ搾り取られてしまうのお）じゃが、こちらとしてもあまり勝手に動いてもらっては困る…君達のもつ力はあまりに強大なのじゃ…話して見て分かったが、君たちは悪い人間ではないと思っておる。しかし、強すぎる力には何かしらの騒動が付いて回るもんじゃ…本人にその気がなくとも」

「（なるほど…、絡み手で来るか）…近衛殿の言われていることは分かります。現に前の世界でもそうでしたから…しかし、身にかかる火の粉を振り払うぐらいの力はあるつもりですので…」

「（その力が問題だと…つと、いかん。熱くなつてはあちらに引き込まれるのお…）確かにそれだけの力があることはエヴァを見ればわかる。…じゃが、君たちはあくまで一個人に過ぎん…組織には敵わん。そうじゃろ？」

「こちらを脅しているのですか？」

「（…っ！ いかん、これ失敗じゃった）そうではないよ、君達がこの麻帆良にいる間はワシ等の客人なのだからのお…」

「なるほど…そういうことですか。いや、先ほどの物言い許していただきたい。気を悪くしたら申し訳ない」

「（何を考えておる？）いや、こちらも言葉が足りなかった故、気

にしないで欲しいのお。 ……そういう訳じゃ、この麻帆良に留まってくれないか？」

「…確かに、こちらにメリットはありますね。 ですが、条件があります」

「（氣よったか！）条件とは？」

「一つは私達の住まいの手配、二つ目は職の手配、三つ目はこちらに対する不干渉、四つ目はこちらに対する依頼がある場合はそれなりの代価をお願いする」

「（…おや？ 思ったよりもまともじゃの）その程度であれば、了承できよう。 仕事の件は後日連絡しよう、その時に給料についてもの。 三つ目、四つ目も問題ないの…住まいも本日はエヴァの所にでも「おい！ 勝手に話を続けるな！」…ぬう、ダメかの？」

「当たり前だ！ 何故、私がそんな面倒なことしなくちゃならんだ」

「おや？ 可笑しなことを言うの…。 エヴァンジェリンよ、そちらは神堂元という男に呪いを解いてもらった借りがあるのでないか？」

「うぐっ！」

「ふむ…確かにそうだな。 すまないが、借りを返すと思って今夜は泊めてもらえないか？」

「私からもお願いします」

ケチヨンケチヨンにされた相手をお願いされるが、全く気持ちがすつきりしない。

それもそのはずだ。

彼女は誇り高い悪の魔法使いなのだ。

この程度のこと、借りを返したなど思われたくはない。

「わかった！ わかったから、女あたまを上げろ！ あと、貴様等……この程度で借りを返してもらったなどと思うなよ！ 受けた借りは対等な価値で返すからな！」

「……案外義理堅いのな」

「私を誰だと、思っている！ 誇り高い悪の魔法使いだぞ！」

小さい身体をこれまでもかといくらい大きく逸らせ、胸をはる。そこには何も無い……。

「それじゃあ、家に行くぞ！ 今日もう疲れた……爺、タカミチこの話はまた明日だ！」

そう言つて、その反応も返ってくる前に部屋を出て行った。

「「「……」」」

通路の向こうからはエヴァンジェリンの早く来いという、彼女の声が響き渡っている。

「……まあ、近衛殿。エヴァンジェリンが行ってしまうので、この話はまた後日に……」

「…う、うむ。 それでは明日の昼にでもここに来て欲しい」

「了解した。 それでは、いい夜を…」

「失礼しました…」

彼らが出て行った、部屋は男2人の静かなものとなった。

「理事長…」

「高畑先生も今日はゆっくり寝なさい、疲れたじゃろ」

「しかし、本当によかったのですか？ 確かに監視の意味でも手元に置いておくのはわかりますが…」

「仕方にじゃろ…外に置いておいて、何かあるよりは近くにおるほうがこちらとしても対処しやすいからのお」

「…わかりました」

そう言つて、彼も部屋を後にした。

「はあ…やはり、あの時は冷静ではなかったのお…。 今に思えば、三つ目の条件を了承したのはまずかったのお…」

1人で後悔をするのであった。

第四話 吸血姫

――真祖。

家系としての大元の先祖という意味をもつ言葉。

しかし、魔術師…神秘を扱う者たちにとっては意味が異なる。

改めて、隣を歩く金髪の幼い容姿をした少女を眺める。

…やはり、世界が変われば概念も変わるか。

「…うん？　なんだ、まじまじと見て」

「いや…、やはり君を真祖と呼ぶには抵抗があつてな」

「…バカにしているのか？」

少女は自分がバカにされていると思ったのか、額に青筋を作り、あからさまに不機嫌です…と意思表示をする。

「いや、馬鹿にはしていないさ…ただ、俺達がいた世界の真祖と比べるとどうも可愛らしくてな」

「世界が変われば、概念は変わる…知ってはいましたが、こうも変わる…」

「…やはり、バカにしてるだろ！」

「そうではないんだ…君には俺達の世界の真祖について、説明したほうがいいかな…家の中でさ」

視線を前に向けると、可愛いログハウスが視界に入った。
明かりがついているのは茶々丸という、機械人形の従者がいるため
であろう。

「ふん！ いいだろう…こちらが納得する説明があれば、いいがな
…」

中に入ると、様々な人形が目に入った。

魔術師にも人形を用いたモノ達がいるため、存外に驚きはしなかったが、一部を除き、彼女の趣味によるものも多いのだそうだ。

…幼女？

「おい…今、不愉快なことを考えなかったか？」

勘も鋭いみたいだ…。

エヴァンジェリンがテーブルについたので、俺もメドゥーサと席に着く。

茶々丸に出された紅茶の香りが鼻孔を擽る。

…いい香りだ。

口につけ、喉に流し込む…鼻を抜ける香りが心地良い。

ああ、いい腕だ…。

「さあ、話してもらおうか」

「…ん、そうだな。まず、吸血鬼について話をしようか」

こちらの吸血鬼の概念がどのようなものかは分からないが、それは置いておこう。

目の前に座っている彼女を見る限り、俺達の世界の吸血鬼に比べれば危険性は低いだろう。

「まず、俺達の世界における吸血鬼は元々、人間に対して直接的な自衛手段を持たない星が、人間を律するために生み出した存在だった」

律する？

私はその言葉の意味が分からず、元にその意味を聞いてみたが、元は後でその意味も説明すると言われたため、黙って聞くことにした。

「人間を律する存在…それが真祖と呼ばれる者たちだった。律す

るとは、無限に増殖を続け、星を埋め尽くす人間達の数を減らす…
口減らしをすることだ。しかし、彼らにも吸血衝動があるため、
それはすぐに破綻した。本来、吸血しなくても生きていける存在
であるはずの真祖たちが役目ではなく、自らの娯楽のために人間達
を刈り始めたのだ」

「……」

「彼等…堕ちた真祖たちは魔王と呼ばれた。その力の大半を吸血
衝動の抑制に使っている真祖たちでは対打ち出来るはずもなかった
ため、真祖たちは真祖を討伐するための真祖を作り上げた」

「…同属を狩るためだけに生み出された存在か」

「彼女は同属を狩り続けた…しかし、そんな彼女を生み出した存在
も自らの吸血衝動に打ち勝てず、その身を墮とし、彼女に狩られた
…そして、1人になった」

「うん？ それではお前達の世界には吸血鬼は一人しかいないのか
？」

「そうはならない。なぜなら、真祖に血を吸われ、血を流し込ま
れた人間は死徒と呼ばれるモノになるからだ」

「…死徒？」

「そうだ…そして、死徒となり、長い時間をかけたものたちが自意
識を得て吸血鬼になる。彼女…真祖の姫君はその存在も狩り続け
た」

「人間たちは何もしなかったのか？」

「そんな訳がない。現に俺達の世界には聖堂教会…異端狩りを専門とする組織が存在する。代行者、騎士団、そして埋葬機関と強力な戦力を保有し、吸血種をはじめ人から外れた者達を討伐する者達が存在する」

「人外…それはつまり、真祖もその討伐の範囲内とみてよろしいのですか？」

「それは、おかしいだろう…その真祖はあくまで吸血に身を堕とした奴等しか殺さないのだろう？」

「ところが、そうではない。聖堂教会のなかでは、神秘は限られた人間…謂わば聖者や聖人と呼ばれる者達以外は触れてはいけないと認識しているからな。だから、魔術師たちとの折り合いも最悪だ。それに、真祖の姫君にも吸血衝動は存在する…彼らが真祖を殺そうとするのは当然と言えば当然だ」

「…お前らの世界は随分と物騒なのだな」

「俺が言うのも何だが、物騒だよ。神秘の隠匿に失敗すれば知った人間とその人間は魔術教会に粛清されるし、魔術そのものも命を失う危険性がでかいからな」

「粛清ねえ…この世界とは大違いだな」

エヴァンジェリンいわく、この世界にも神秘の隠匿は存在するが、それはあってないような物であり、悪くてもオコジョにされるぐらいなのだという。

それを聞いて、開いた口が塞がらなかった。

確かにこの世界は俺達の世界とは違って、優しいのかもしれないが、それでも生ぬるい。

神秘に触れるということは死に触れる機会も増えるのだ。

その代償がオコジヨ…聞いて呆れる。

現に、隣に座っているメドゥーサも額を押さえている。

「それで、なんだが」

「…ん？」

「その真祖は強いのか？」

エヴァンジェリンは子供のような目で、こちらを見ってくる。

同じく真祖と呼ばれる彼女に興味を抱いたようだ。

「聞いてなかったのか？ 真祖とは星の意志によって、生み出された存在だと。つまりはバックアップは地球という星なのだ。…弱いわけがあるまい」

「それは貴様よりもか？」

「彼女が本気になれば、俺のような存在など一蹴されるよ。どうか、彼女に対抗できる存在など神秘を取り扱う者達の中でも一握りだ」

「いるにはいるんだな？」

確かに、いるにはいる。

死徒二十七祖や埋葬機関のNo.1や制限なしの俺とか…ああ、後は慢心を無くしたギルガメッシュもだな。

「しかし、お前では勝てんぞ…エヴァンジェリン？」

「ふん！ やってみなければわからん」

「いや無理だ。英霊くらすが2体いて足止め…それでも30%程度の力。抑制なしでの彼女の相手など、できるはずもない。そもそも、この世界に彼女はいないのだからな」

「む…！」

そうだ。

この世界に彼女はいない。

これまでの話は俺達のいた世界での話なのだから。

「英霊と真祖と言えば…」

「どうしたメドゥーサ？」

「真祖と守護者ではどちらが強いのでしょうか…？」

「…む」

嫌なことを聞いてくれる。

そもそも、守護者と真祖がぶつかり合うはずがない。

いや、可能性としてはあるのだが、想像もしたくない。

「おい、守護者とはなんだ？」

エヴァンジェリンは守護者が何なのか聞いてくる。

そつえば、言っただけだったな。

カウンターガーディアン

「守護者とは、抑止の守護者と呼ばれる存在でな、人という種を守るための存在だ。 該当者としては信仰の薄い英霊だな」

「英霊…なら、真祖のほうが強いのではないか？」

「…守護者は世界からのバックアップを受けている。 それは星からのバックアップではなくな」

「世界そのものという意味か？」

「そうだ…恐らく、この世界でも人類が絶滅の危機に瀕すれば、アイツが来るだろうな。そうなれば、制限のかかった俺では時間稼ぎが精一杯だ」

「だが、20年前の魔法世界での戦争にそんな奴がでたとは聞いたことはないぞ？」

彼女曰く、20年ほど前に魔法世界で大きな戦争があったそうだ。被害は甚大で、多くの人たちが死に、魔法世界そのものも滅亡の危機に瀕したのだそうだ。

「…ふむ。だが、その程度では抑止力は働かないだろう」

「どうということだ？」

カウンターガードイアン

抑止力は集合無意識によって作られた、世界の安全装置である。人類の持つ破滅回避の“アラヤ”と、星自身が思う生命延長の“ガイア”の二つが存在し、そのどちらも現在の世界を延長させることが目的である。

世界を滅ぼす要因が発生した瞬間に出現、その要因を抹消し、カウンターの名の通り、起きた現象に対してのみ発動する。

「魔法世界が“アラヤ”と“ガイア”…二つの祈りの範疇外の可能性もあるが、少なくとも、その程度の被害では抑止力は働かない。

アラヤはあくまで人類が滅亡の危機に瀕した時にしか働かず、ガイアは星が滅亡の危機に瀕した時にしか働かない。仮に魔法世界がその危機に瀕しても現実世界がその危機に瀕してないのだから、抑

止力は働かないだろう」

「ふーん…随分と気の利かない奴等だな」

「全くだ…」

俺もそう思う。

口に含んだ、紅茶は既に冷えており、香りもほとんど飛んでしまっている。

茶々丸が新しく、カップに紅茶を入れてくれたが、その彼女から一つの疑問が投げかけられた。

「元様とメドゥーサ様はこちらの世界の方々ではないのですよね？」

「ああ、そうだが？」

「ならば、この世界には抑止力はないのではありませんか？」

確かにこの世界は俺達のいた世界とは違う、並行異世界だ。しかし、その可能性はなかった。

「それは、ありません」

「なぜでしょう？」

「それは、私と元がいるからです」

「「？」」

俺とメドゥーサがいる。

それが、この世界にも抑止力が存在する証明でもあった。

「何故、お前達と抑止力が関係するんだ？」

「それは俺が調整者だからだ」

「調整者…？ 爺にも聞いていたが、それはなんだ？」

「調整者とは、呼んで字の如く調整する者のことを言う」

「何のだ？」

「運命だ」

「「な!?!」」

調整者とは根源の機能の一端であるアカシックレコード…絶対運命に入り込んだイレギュラーを排除し、星々と人々の存続を確定させる者を指す。

「ならば、貴様も抑止力なのか?」

「具体的に言えば違う。調整者とはそもそも、抑止力を…アラヤとガイアを働かせないために生み出された役職だ。アラヤが働けば、多くの人間が死に星の存続も危ぶまれる。また、ガイアが働けば、星は残るが人間の命などは範疇外だからな。それ故に調整者は、抑止力とは違って、これから起こりうるであろう人類と星の危機の前に現われ、それを正すことが目的となっている」

「「……」」

「アラヤの霊長の守護者は最終安全装置ゆえに…極端に言えば、どれだけの九の人間が死のうと一の人間が生き延びれば良いという考えだし、ガイアは星が残れば、人間など死に絶えても良いという考えだからな」

まあ、それ故に管理者群は根源や世界と折り合いが悪いのだからな。

「…つまり、お前は人間ではないのか?」

「まあ…人の道理から外れ、世界の理から外れてしまったというのなら、人間ではないだろうさ」

「その力は人間の限界を超えてはいないですがね」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。真祖のように星からのバックアップを受ける訳でもないし、守護者のように世界からのバックアップを受ける訳でもない。かといって、吸血鬼のような人外になったわけでもない。人間のまま、理から外れただけの存在だ」

「…そうか」

言葉を見つけられなかったのだろう。

あまりにも意外な事実で情報が脳内で処理しきれないのだろう。

「…ちょっと待ってください！」

「…茶々丸？」

自分の従者が言葉を荒げることが珍しいのか、エヴァンジェリンは目を大きく見開き、驚いている。

自らの行動に気づいたのか、彼女は頬を赤くした。

だが、その頬の赤らみもすぐになくなった。

「元様は『これから起こりうるであろう人類と星の危機の前に現われる』と言われましたが、それは…」

「…！！　おい、元！」

「…（迂闊でしたね、元）」

迂闊だった。

口を滑らした…まずいな。

だが、今更、話をあやふやにすることなどできない。

「…迂闊だったな。…これからする話は、決して誰にも言つな…
近衛老にもだ」

「…それほどまでにか」

「俺が今まで、調整者として渡ってきた世界はアカシックレコード
にイレギュラーが入り込んだ世界だ。そもそも、それがなければ
俺が世界に介入することは世界から許されていない」

「アカシックレコード…人智学の創始者であるルドルフ・シュタイ
ナーが提唱した宇宙の彼方に存在する全宇宙の過去から未来までの
全てが書かれた記録のことですね」

「…絶対運命、アカシックレコードに人類の滅亡と世界の破滅が記
されていることはそれほど珍しいものではない。その理由は、相
対してそれを防ぐ英雄も記されているからだ。だが、不純物が入
り込むこともあることもある」

「そして、その不純物が無視できないレベルに達したとわかった瞬
間に調整が働くのです」

「そのイレギュラーが何時、どんな時に働いているかわかりはしな
い。しかし、いずれ抑止力が働くことは確実だ。俺はそれを排
除するためにこの世界に来た」

「…なぜ、それを爺に言わなかった！」

「いきなり、現われた人間に世界の危機を諭されても信じるものなどいないだろう？」

「ム…」

「………」

「今はまだ、情報収集に努める期間だ。それに…」

「それに、なんだ？」

「この麻帆良という地が一つのキーになることは確定のようだしな」

「…どういうことだ？」

「私達がこの地に召喚された…それが全てです」

「「………」」

この会話をもって、今夜はお開きとなった。

少し話しすぎた感は多分にあったが、夜も遅い。

これからの身の振り方も明日の昼になるまでは確定していない。

メドゥーサは茶々丸に案内された部屋に行き、俺はリビングのソファーに横になった。

これから、どうなるかな…こいつがさ。

第五話 朝

ここは夢だろう…。

…理由？

それはわかりやすい。

「よお…」

俺が最も憎むべき男がいるからだ。

昨晚はエヴァンジュリンの家に泊まり、ソファ―に横になったところで記憶がなくなった。

「…カニバル。貴様もこの世界にいるのか」

「クククク…勿論いるよ。まあ、この世界に来る前に再世者にこっぴどく殺^{やら}れたんだけどな」

「そうか…海でも魂魄ごと貴様を屠ることは出来なかったか…」

醜悪で低い笑みでこちらを眺める男に言い切れぬ憤りを覚える。
例え、ここが夢の中でも殺してやりたい。

「…いつまで、お前は人の可能性を信じ続けるんだ？ …アムロじやあるまいし」

「俺はアイツほど、人間を信じきっているわけではない。ただ、可能性を持っている人間が1人でもいる限り、俺は調整を止めるつもりはない！」

「クク…アハハハハ！！！」

耳に響き、脳を壊すのではないかという忌々しい声を夢中で笑い続ける。

答えを馬鹿にするかのように……。

「その果てに再び記憶を、力を封印し…そして、心を身体をすり減らしていくのか！？」

「それはない！ もう、間違いは犯さない！」

「どうだかな！？ お前は良くも悪くも人間だ！ 幾ら心を強く律しようと言はれど脆弱だ！ 再び、過ちを繰り返す…！」

「断言するな！！ ……俺は知っている。 過ちを乗り越えた人間を、可能性を信じきった人間を、弱さを強さに変えた人間を…！」

「…ニュータイプ然り、イノベーター然り、正義、調和、友愛、全てが殺しの正当化にされる……。それが人間だ」

「それが全てではない…そう信じている」

カニバルは溜息を一つ洩らし、男に背を向ける…。

「そう言うお前が一番…」

——人間を信じてないくせに——

「カニバル！！！」

そこは彼女の家の居間だった。

これが、朝の目覚めか…嫌過ぎる。

あいつの言葉を拭い去るように…額に手を当て、溜息を洩らす。
頭を上げると目の前には自分の身長を気にするといふ可愛らしい悩みをもつ彼女がいた。

「…メドウーサ」

「…元、彼が世界こゝにいるですね」

「恐らくはな…」

奴がいるということが解れば、今の制限付きの俺では立ち向かえない。
い。

そうなれば、この世界の人々が奴の捕食の対象にしかない。
そして、奴に余計な力をつける要因にしかない。

「…来て早々ですが、ここの管理者に申請を……」

「制限解除のか？」

確かにそれが正しい行動なのだろうが…。

「それは難しいだろう…俺には実績がある」

制限付きの状態で、奴を屠った実績がな…。

それを、世界が、管理者が重要視すれば…制限など取れる訳もない。

「「……」」

二人で、頭を抱えていると茶々丸から、朝食の用意が出来たことが伝えられる。

時計を見てみれば、時間は7時になっていた。

テーブルに向かう途中、寝ぼけ半分に2階から降りてくるエヴァンジュリンが視界に入った。

その姿を見る限り、どうしても600年を生きるモノには見えない。

「…幼女か」

「…本人の前で言っではダメですよ」

椅子につき、目の前に並べられている食事に目をやる。

それは栄養バランスを考えられているであろう、素晴らしいものだった。

空腹のこの身にはいい意味で響く、香りが満ちていた。

「これは全て、茶々丸が作ったのか？」

「はい…ですが、メドゥーサ様にもお手伝いしていただきました」

その返答を聞き、彼女の顔を見ると小さく微笑み、少しだけですよと言っ。

…衛宮の家で手伝いをしてはいたが、なるほど……。

そして、一斉にいただきますをして、食事についた。

大した会話はなかったが、味は素晴らしかったと言っておこう。

昨晩は衝撃の事実を伝えられました。

出会って、まだ間もない方から伝えられる言葉とは思えないものでした。

世界の危機…。

誰が信じられるでしょうか。

その前に並行世界から来たと言うのも本来であれば、信じられるものではないでしょう。

ですが、マスターは信じております。

なんでも、この世界の魔法ではない魔法を見せてもらったのだそうです。

魔術と言いましたか…この世界でも古い魔法使いの方々は魔法のことを魔術と呼ぶことはありますが、毛色が全く違ったようなのです。

純粹な魔力による物質化…。

アーティファクトとは違うとのこと…、確かにそのような魔法は聞いたことはありません。

なので、昨晚の会話内容はマスターからの指示により、嚴重なプロテクトをかけました。

別段、私は自分を人間だと生まれてから2年間思ったことはありませんが、このような時に自らがガイノイドだと自覚します。

朝食の準備は私の仕事のひとつです。

「お手伝いします」

ですが、今朝はメドゥーサ様にお手伝いしていただきました。一度、断りはしたのですが、一泊させてもらった手前何もしないというのは心苦しいとのことでした。

お気持ちを無下にすることは失礼なので、あくまでお手伝いという形で手伝っていただきました。

メドゥーサ様はギリシア神話におけるメドゥーサ本人だとお聞きしていたため、多少の警戒心と、料理が出来るのかという不安があったのですが、変に手馴れていました。

お話を聞いたところ、かつて召喚された時にそういったことをした事があるのだそうです。

そして、沢山お皿を割ったと苦笑いしながら仰ってました。

その姿を見る限り、伝承に伝わる怪物の姿と隣で料理の手伝いをしている姿が重なることはありませんでした。

朝食の準備を終え、私はマスターを起こしにいきました。
メドゥーサ様は元様を起こしに行ったようです。

マスターはいつも通り、朝が弱く、目頭を擦りながらテーブルにつきました。

視線をずらすと元様とメドゥーサ様はお互いに微笑み合い、朝食の準備をメドゥーサ様が手伝ったことを聞くと、どこか嬉しそうにしておられました。

その姿は昨晚の自らの責務とこの世界の危機を語る姿とは違い、普通の恋人同士が仲良く、朝食をとるものにしか見えませんでした。

——私もこのように笑い合えるのでしょうか——

「…うん？ エヴァンジェリン、コスプレか？」

「アホか！」

「マスターはこれから、学校です」

「茶々丸もですね？」

「はい」

こちらのアクションに一々返してくれる彼女は素晴らしく弄り甲斐がある。

もし、この場にエミヤがいれば素晴らしい光景を見せてくれただろう…。

「ふん！ 貴様との約束もあるからな、もうしばらくは大人しくしておいてやる」

「全く…素直なんだか素直じゃないのか」

「うるさい！」

「フフ…」

「ああ、マスターが楽しそう…」

俺がエヴァンジェリンの頭をガシガシと撫ぜてやると、彼女は顔を

真つ赤にしながら、子ども扱いするなと怒声をあげる。

しかし、俺はそれを止めることなくソレを続ける…それに合わせ、小さな身体から生える腕をブンブンと音が鳴りそうな勢いで回すが、それもリーチの差で俺には届かない。

その光景にメドゥーサは微笑み、茶々丸は何やら感動を覚えているように見える。

「ああもう！ お前らはここに居ていいから、大人しくしてろよ！」

そう言つて、エヴァンジェリンはこの場から逃げるように家を出て行った。

その後を合鴨の親子のように着いていく茶々丸。

…どちらかという逆のほうが似合いそうな気がする。

「…さて、近衛老との約束の時間までまだあるが…どうする？」

「まったりするのも魅力的ですが、学園内の探索でもしてみますか？」

エヴァンジェリンには大人しくしているとされたが、時間は4時間強もある。

確かにメドゥーサとまったりするのも魅力的だが、この後のことを考えると…。

「出かけるか？」

「そうですね…そうしましょう」

俺は彼女に腕を出し、彼女はそれに一瞬戸惑ったが、それに笑顔で腕を絡ませてくる。

「昔のあなたからは考えられませんか」

「こっついのは嫌いか？」

「…人によります」

俺は笑い、彼女は微笑む。

ああ…そうだな、こっついのを幸せっていうのかな。

エヴァンジェリンの家を後にし、暫く歩いたところで気づいた…。
戸締りは良かったのか…？

第五話 朝（後書き）

元「久しいな…」

作者「……」

元「ん？ どうした…こちらを睨みつけて」

作者「…何、メドゥーサといちゃついてんだ！」

元「お前が書いたんだろ」

作者「メタるな！ チクショウ…なのはとかアルトリアとか、その他諸々に告げ口してやる！」

元「なっ！？ それは卑怯だぞ！」

作者「黙れ！なのはさーん！アルトリアさーん！！元が浮気してますよー！！」

メドゥーサ「……」

作者「げっ！？それは石化の…」

作者は意石になった…。

第六話 夜までは…

——麻帆良学園都市。

埼玉県麻帆良市内に存在する、幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた一つの学園都市であり、麻帆良学園と呼ばれているそうだ。

その広さ年度始めには必ず迷子がでるといふ…さらには学園にある“さんぽ部”なるものまで存在し、部員もそれなりの数がいるという広さである。

「凄いな…」

「全員学生ですね…」

目の前には、朝の通学ラッシュにより鉄道、道路ともに大混雑を極めているという一つのカオスが生まれている。

どうやら、これも麻帆良の一つの名物となっているようだ。

これ“も”というのは、目の前に聳え立つ一本の大木である。

世界樹…正式名称は“神木・蟠桃”というらしい。

学園中央に聳え立つ、樹高270mという他に類を見ない巨木である。

「なんだ…この魔力は」

「神木と呼ばれるものは多かれ少ならず魔力を内包しているものですが、これは…」

尋常ではない魔力だ…。

下手をすれば、この一本に内包されている魔力だけで一つの世界に存在するマナに匹敵するのではないかと思える。

魔眼を凝らして視ると、周辺のマナを少しずつではあるが吸収しているようだ。

妖怪桜として有名なのは白玉楼だが、神木・蟠桃も何かの手違いで怪へと化けるかもしれない。

そうなれば……。

「島か…」

「先ほど、近くを歩いていた学生に聞いてみたところ、あの島は図書館島と呼ばれているらしいです」

図書館島…。

麻帆良湖に浮かぶ世界最大規模の巨大図書館である。

2度の大戦で戦火を避けるために世界中から様々な貴重書が集められたという。

また、それに伴う蔵書の増加によって、地下に向かって増改築が繰り返されたために現在では全貌を知るものはいなくなっているというのだ。

「司書をする人は大変だろうな…」

「そうですね。…ですが、魅力的です」

彼女の趣味には読書がある。

聖杯戦争後、家にいるときは常に読書をしているというくらいである。

年に100冊以上読書をする人を本の虫と呼ぶが、彼女はまさにソレであろう。

話は戻るが、ここ麻帆良学園には“図書館探検部”なるものも存在しているようで、その図書館島というモノの規模がうかがい知れる。麻帆良には多くの魔法使いがいるのだから、魔導書の類もあるかもしれない…。

「……」

そんな学校は嫌だ…。

「ふう…歩き疲れたな」

「フフ…そうですね」

俺たちは麻帆良駅前にあるSTARBOOKS CAFEというカフェで一休みしている。

午前中で回れるかと思っていたが、そうでもなかった。

というより、無理だ。

広すぎる。

要所要所だけを見てきたはずなのに、全然時間が足りなかった。
現在の時間は11:40…。

「そろそろ、近衛老との約束の時間か…」

「それでは行きますか？」

「そうだな…腹の探り合いは疲れるんだがな」

そう言うと、彼女は小さく笑みを洩らした。

何故だか、わからないが彼女の笑みは中傷の類ではなかったので、そのまま流した。

席を立ち、会計を済ましカフェを後にしようとしたところで、聞きなれない男の声で話しかけられた。

「こんな所にいたんだね」

昨晚の魔法先生の1人であった。

「貴方は…タカミチで良かったかな？」

「そういえば、自己紹介がまだだったね。タカミチ・T・高畑という…。挨拶が遅れたが、宜しく頼むよ」

「こちらこそ、ちゃんとした挨拶が遅れた…神堂元だ。どのような付き合いになるかは解らんが、高畑…宜しく頼む」

「メドゥーサです。よろしくお願いします」

俺は握手を、彼女は会釈で挨拶を返す。

昨晩は挨拶どころではなかったため、お互いに名前だけは知っていたが挨拶はしていなかった。

これでお互いに正式に挨拶を交わしたことになる。

「それで、そろそろ時間だから理事長に会う時間も近いから案内に来たんだ」

「それは助かります…さすがに一度訪れただけなので、道順に自信がなかったのす」

「そうだな…悪いが案内を頼む」

「了解した…それじゃ、着いてきて貰えるかな」

先頭を歩く高畑のあとを歩く。

さあて、狸の化かし合いの時間か…。

「おお、待っておったぞ」

学園の通路を歩き、扉を通り抜けるとそこには…。

「やはり、化生だな」

「ふお！？」

化生紛いの老人が鎮座していた。

魔眼を凝らし、視てみても…やはり人間だ。

世界が変われば、真祖の概念も変わるし、人間の概念も変わるか…。

「酷くない…？」

「そうだよ…理事長ただだよ」

「タカミチ君が一番酷いのお…」

一番の敵というものはいつの世も身内だぞ…近衛老よ。

「さて、お遊びはここまでとして…昨晚の一つ目と二つ目の条件の答えを聞きに来たんだが…」

「そうであつたの…それじゃあ、これなんかどうかの？」

そう言つて、近衛老が引き出しから取り出した書類は仕事と住居のモノだろう。
その内容は…。

「ふむ…住まいは書類を見る限り、代表的な日本家屋だな。それに大きさもかなりデカそうだ」

「仕事は…図書館島の司書に中等部3 - Aの副担任？ それに警備員とは…？」

「見てのとおりじゃ。司書にはメドウスくん、3 - Aの副担任には神堂くんに着いてもらおうと思つておる。麻帆良学園には盗賊紛いや物騒な侵入者も多くての…警備員は夜間の時間の空いたときだけでもいいのじゃが、2人をお願いしたいのじゃ」

嘘だろ？

「司書も警備員も良い…だが、教師というのはふざけているのか？」

「いやいや、ふざけて等おらんよ。3 - Aの担任というのが10歳

の子供なのじゃ」

「「な…！？」」

ふざけているとしか思えない。

それも、俺達にはなく子供達にだ…。

言い知れぬ怒りが沸々と沸いてきた。

「貴様…死にたいのか」

「「な！？」」

「元…！」

「…！」

知らず知らずのうちに殺気が漏れていたようだ。

隣に居る高畑はこちらに対して身構えている。

肺に空気を流し込み、大きく深呼吸をして、気を落ち着かせる。

殺気は押し込めたが、それでも怒りは収まらなかった。

「貴様はそれでも教職者か？ 学童期から青年期における子供のソレが疎かになれば、将来への子供に対する影響がどれほど大きくなるか解らんはずもないだろう…！」

「…うぬ。 言い返すこともできんのお…じゃが、理由があるんじや」

この老人が言うには、ネギ・スプリングフィールドという少年が担任を勤めているのだそうだ。

少年はイギリスにあるメルディアナ魔法学校という魔法学校を首席で卒業し、その最終課題として、この日本の学校で先生をするために3-Aで担任を務めているのだそうだ。

「先生として生徒に教えるだけの知識量は充分にある。それにの、彼はサウザンド・マスターの息子なのじゃ…」

「……」

「クソですね」

「…ぬう」

「……」

千の魔法を使いこなす“千の呪文の男”サウザンド マスターと謳われる最強の魔法使いであり、世界を救った英雄と呼ばれる男だ。親の七光りによる贖いか…。

胸糞が悪い…。

「先生とは、先に生きて教え導くものだ…。いくら、知識があるうと10歳のガキが青年期多感な少女達の悩みを解決できるだけの人生を積んでいるとは思えん」

「それに学校の教諭ということはそれだけ、子供達に関わらず人と触れ合う機会も多いものです…。10歳の子供が神秘に対してしつかりとした認識を持っているとは思えません。遅かれ早かれ神秘が漏洩するのは確実と考えるのですが」

「「う…」」

「おい…まさか、既に」

「いや、何もなかった!」

「そうそう、問題ないよ!」

そうとは思えない。

こいつらは嘘を付く気があるのか、ないのかわからんが…顔に出す
ぎた。

なんだか…死ねばいいのに。

「もういい…副担任になってやる」

「おお、そうか! いやぁ良かったわい」

「だが…! その少年が神秘に対しての対処をミスした場合はこち
らの判断で対処させてもらう」

「それはダメじゃ!」

「ダメなど言わせん! たかだが一人のガキのために多くの子供達
の将来を壊すわけにはいかん…必要であれば、そのメルディアナ魔
法学校とやらに送り返す」

「そうはいかないよ。彼は全ての魔法使いにとって希望なんだか
ら」

「ふざけるな…それでも教職者か!」

「とても先生の…いえ、マギステル・マギが発する言葉とは思えま

せんね」

「くっ……」

やはり、この世界の魔法使いの掲げる立派な魔法使いはただの独りよがりであつたか…。

エミヤを連れて来れなくて良かった。

アイツにこんな腐った正義など見せずにな…。

「…この世界では神秘の隠匿を守れなかった人間はオコジヨになると聞いた。ネギという少年が仮にこれから神秘を守れなければ、そしてその一般人には…状況によって、それなりの処置を取らせてもらう！」

「それは「…いいじやろう」理事長!？」

先ほどとは打って変わり、近衛老の態度が変わった。

この狸め…何を思いついた？

「君の言うとおり、ネギくんが間違った行動を取れば、その時は君の裁量に任せよう…、そのかわりと言つては何じゃが…」

「…理事長!？」

「ほお……」

「……」

目の前の老人は机に手と頭をつけて、何かを懇願する姿勢を見せた。
…何のつもりだ。

「ネギくんが間違った行動を取った時は、シツカリ導いて欲しい。生徒達に危険が及ばないようにシツカリ守って欲しい…それがワシからの頼みじゃ」

「何を今更…」「3-Aにはワシの孫娘もある」……」

孫娘ねえ…。

「木乃香は…孫娘は魔法を知らんのじゃ…じゃから」

目の前にいる男には敵わない。

魔法でも腕力でも…そんな存在に対して、人間がとることが出来る行動は逃げるか、懇願するかである。

前者が無理ならば、後者をとるしかあるまい。

それを目の前にいる老人は取ったのだ。

組織の長であり、見た目は明らかに下の男に対して…頭を下げる。

それは言葉で言うほど、簡単なことではない。

「貴様は何を言っている？」

「貴方は…!!」

「……」

俺は明日からではあるが、教師になるのだろうか…。

「教師として当然だろ？」

「…へ？」

「教師として、生徒を守るのは当然であり。人生の先輩として、未熟な者がいれば叱り、導くのは当然だろう…。何を今更言っている」

そうだ、今更なのだ。

俺は別段、副担任なることに對して怒っていたわけではない。確かに、最初は怒りもこみ上げてきたが、ソレに對する怒りなどとうになかった。

怒りの対処は目の前にいる老人と高畑の姿勢に對してであり、ネギ少年でもなく子供達にでもなかった。

「教師への着任は明日でよかったのだな？」

「そ、そうじゃ…」

「それでは、俺はここで失礼する…スーツを買いに行くので…。仕事と住居の件、感謝する…」

そう言つて、男は部屋を後にした。

その姿は怒りに染まつたものではなく、1人の漢であつた。

「何があつたんじゃ…？」

「…元はあなた方の姿勢に怒っていたのですよ。1人の将来有望な魔法使いの卵のために一つのクラスの子供達を蔑ろにしていた貴方達の態度に…。そして、悲しみを覚えたんです…彼がこの世界で希望をとじて見ていたモノが独りよがりであつたことに…」

「希望…？」

「立派な魔法使い《マギステルマギ》…。先ほどのあなた方の発言はただの大人の物でしたよね…」

そう言つて、彼女も部屋を後にした。

残された人間は昨夜と同じく、男2人であった。

「理事長…」

「皆まで言わんでええ…ワシ等は大人としても、マギステル・マギとしても失格じゃの…」

「いつの間にか、忘れていたのかもしれないね」

「そうよのお…まさか、別の世界の人間に気づかされるとは思わなかった。独りよがりの正義か…」

高畑は昨晚に彼が1人の魔法生徒に言っていた言葉を思い出していた。

『自分の価値観のみに固執』…それはしてはいけないことだった。そんなことをすれば、視界を自ら狭めているだけだ。それは誇り高い悪にすら劣るものだった。

人間は過ちを繰り返す。

だけど、過ちを繰り返さないように努力することが出来るのもまた人間だ。

「僕は彼を信じてみてもいいと思います」

「ほお…昨日までとは打って変わったのお」

「見知らぬ子供達のためにあそこまで怒れる人が信じられないはずがありません。少なくとも、僕は彼のおかげで自分の過ちを再確認できました。あまりに当たり前で考えることすら忘れていたことを…」

「それはワシも同じじゃ…」

彼が討った楔は少しずつかもしれないが、変化をもたらしているのかも知れない。

第七話 杭と拳と…

先は大人げなかったな。

1人の男として、大人として、神秘を扱う者として彼らの姿勢が気に入らなかったのは事実だ。

しかし、自らの立場が悪くなるのは確実であろう行動だったと今は反省している。

しかも、今は俺一人ではなく、メドゥーサも一緒なのだ。
軽く自己嫌悪に陥っている…。

「元…スーツは買ってきたのですか？」

「一応な…そういうば、お前はスーツを買わなくて良かったのか？」

「私には貴方に創ってもらった衣服がありますから…」

そう言っている彼女の着ているものは、エヴァンジェリンの家で創造した黒いセーターと標準的なデニムのパンツである。

しかし、彼女が持っている衣類はその一セットしかないのだ。

「そうは言っても、それしかないだろ？ まさか戦闘服で過すわけにもいかないし…」

「今日は日も暮れましたので、後日買いに行くことにします」

戦闘服…サーヴァントとしての服はボディコン的な黒と紫のモノであり、日常生活で着ていくとすれば…刺激的過ぎる。

「それにしても…この家はいいですね」

「ああ…近衛老には感謝しなければな」

用意してもらった家は所謂、武家屋敷である。

私室3つ、客間2つ、10畳の居間に広い庭がある。

二人で住むには過剰すぎる広さだと思うし、身元不明の不審者に与える住居としても恵まれすぎている。

俺たちは居間でくつろいでいる。

先ほど、エヴァンジェリンが訪れた際にあまりの素晴らしい佇まいに怒りの咆哮を上げていたのはいい思い出だ。

『こんな良い家があるんなら、何故紹介しなかったあああ！！』

確かにそう思う…。

まあ、それは日頃の行いの違いだと諭した。

勿論、自分が日頃素晴らしい行いをしているなど言うつもりはない。

そして、彼女が来た時に近衛老の伝言として、今夜警備員同士の顔見せとして試合があるのだそうだ。

時間が来れば迎えが来る…そして、動きやすい格好で来いと的事だ。俺はいつもの黒の外套と創造した黒色の聖骸布のパンツとシャツで出かけるとして…。

「メドゥーサはサーヴァントのアレでいいのか？」

「これが一番慣れ親しんでいるので…」

さて…迎えはまだかな。

街灯が夜を照らす中、僕は一人で白と黒のみで彩られる道を歩いていく。

目的地は神堂元とメドゥーサが居を構えるの武家屋敷だ。

その理由は、彼の顔合わせと力試しを行う場所である世界樹前広場まで、彼らを案内するためだ。

目的の家は、明日菜君やネギくん達が住んでいる女子寮の近くにあったりした。

…というか、目的の場所に家があるなんて今の今まで気が付かなかった。

興味がなかったため、その場所に行くことがなかったというのもそうだが…。

女子寮から10分程度でたどり着けるこの場所に、学園長の何らかの意図が見え隠れするのは、気のせいなんだと思いたい。そう思いたいが、そう思えないところが近衛近右衛門という学園長の恐ろしいところである。

道の途中でどうやっても視界に入る女子寮を横目に見ながら、ふと思う。

この時間はすでに寝ているであろう一人の子供先生とその生徒達のことをだ。

彼等に言われてしまったことを思い出してしまった。

『それでも教職者か！』

『マギステル・マギが発する言葉とは思えませんね』

そして、彼女が言った彼にとっての希望…マギステル・マギを僕たちは穢してしまった。

「情けないな…」

自らのふがない醜態を異世界の人間に晒してしまった…マギステル・マギが独りよがりの偶像だと思われてしまった罪悪感なのかは解らないが、家に向かう足は重かった。

程なくして、麻帆良においては異質な部類になる武家屋敷に到着した。

先ほどまでの落ち込んでいた気持ちを追い出すように息を吹き出し、気持ちを正す。

家主を呼び出すためのインターホンを押し、彼らを待つ。

「…はい、どちら様で…高畑先生ですか」

「もう少しで時間だからね、迎えに来たんだよ」

出て来たのは、昨晚彼女が着ていたボディコンファッションのようなものに身を包み、バイザーで目を隠している姿だった。

ボディコンはともかく、バイザーは伝承に伝わる石化の魔眼を隠すためのモノなのだろう。

「そうですか…ですが、まだ時間がありますよね？」

「うん？ …そうだね、もう少し時間はあるかな」

自分の腕時計に目をやると、待ち合わせの時間まで50分ほどある。世界樹前の広場までは30分ほどかかることから、確かに向かうにしても時間があるのは確かだ。

「少しではありますが、上がっていつてください」

「それじゃあ、遠慮なく…」

敷居を跨ぎ、鹿威しの心地よい音に耳を傾けながら板張りの縁側を歩き、居間へと向かう。

恐らくは新調されたばかりなのだろうか…畳の匂いがどこか緊張していた心を落ち着けてくれる。

居間に付くと、彼女は部屋の隅に重ねられていた座布団を手に取り、僕の前に出してくれた。

僕はその上に胡坐をかいて座り、元がどこにいるのか聞いてみる。

「そっいえば…「うん？ 高畑が迎えだったのか」…来ましたね」

「待たせたか？」

額に一筋の汗を流して彼は現われた。

裏庭のほうから来たことを考えると、鍛錬でもしていたのだろうか。その手にはタオルと鞘に収められた刀のようなものが握られていた。

「いや、僕も今着たばかりだし、それにもう少し時間はあるよ」

「そうか…客に何も出さないのは無礼だな…メドゥーサ、茶々丸がくれた茶菓子はまだあったよな？」

「はい…今用意します」

「いいのかい？」

「短い時間とはいえ、客だからな。まあ…寛いでくれ」

そして、彼女の用意してくれた茶菓子と急須で入れられたばかりの熱々の番茶に口をつける。

うん…おいしい。

だが、落ちていてばかりもいられない。

僕がここに早めに来た理由は、彼らに言わなければならないことがあったからだ。

「昼はすまなかった…」

僕の目の前に座っている男女に深く頭を下げる。

その意味を一瞬で理解してくれたのか、彼らの表情は真剣なものとなっていた。

「僕はマギステル・マギとして…いや大人として最低なことを言ってしまった」

「言っただけではないだろう？」

「……、その通りだ。僕はネギくんがやってきたことに目を背けてきた。大人として手を挙げてでも怒らなくてはいけないことをしてこなかった」

彼が言うには、無自覚に魔法を発動させてしまい女子生徒の衣服を吹き飛ばしてしまった。

惚れ薬を作り、女子生徒につかった。

女子生徒の前で魔法を使った。

試験で生徒受からせるために図書館島の魔導書…メルキセデクの書を女生徒と探しに行つて、神秘を曝け出した。

頭が痛くなってきた…。

「…それで、お前たちは何の対処をしてきた？」

「…何もしてこなかった」

「それは、その時はまだ本採用ではなかったからか？ その少年が英雄の息子だからか？ 将来有望な魔法使いだからか？」

「……」

今にしてみれば、どれだけ自分達が愚かな行為を繰り返してきたのかわかる。

裏に関わったこともある僕は、魔法に関わることの危険性を身を通して理解している。

なのに、それを元教え子の子供達に晒してきた。全ての感情を通り越して、恥ずかしさしか残らない。

「…その顔を見れば、反省していることはわかる。だから、過去に対してこれ以上何かを言うつもりはない…。だが、俺はこれからはそれなりの行動を取らせてもらう。昼にも言ったがな…」

「僕もソレでいいと思う。だけど、彼がマギステル・マギを目指す魔法使いの希望であることには…そして、魔法使いの希望であることには変わらないんです」

英雄の息子ゆえに必要な以上の期待を抱かれるか…。

その少年も災難だな。

だが、だからと言って子供達の未来を潰すわけにはいかない。

「わからなくはない。だが…いや、これから先のことはその少年を見てから決めよう」

「そろそろ、時間では？」

時計を見ると、時間は待ち合わせの時間まで30分を切っていた。

「ああ…そうだね、それじゃあ行くのか」

これから先に結論を延ばす。

それはただの先延ばしなのかもしれないが、見てみないことには決まらない。

僕たちは、家を後にして待ち合わせ場所である世界樹前まえの広場

に向かうことにした。

「高畑…今までの感情は一端捨てて、これから同じ場所で働く人間として改めて宜しく頼む」

そう言ってくれる彼にどこか嬉しかった。

僕の顔を見て微笑むメドウーサを見て、気恥ずかしかった。顔に出ていたかな。

着くまでの時間、無言というのも気が引けるので、いくらか歩いたところで彼らに話題を振ってみた。

「これから他の警備員たちと顔を合わせるわけだけど、緊張とかはしてないですか？」

「緊張か…自分で言うのもなんだが、緊張というのをした記憶がないんだ。…女が絡むと別だな」

「頼もしいねえ。女と言えば、エヴァが貴方の戦いを絶賛してましたよ。『アイツ以上に戦上手な人間は見たことがない』って…」

その話を聞いたのは、今日の放課後に特にやる事も無く顧問を勤めている美術部も休みだったため、ふと茶道部に顔を出したとき、エヴァに元のことを聞いたからだ。

戦いを見たのは彼女だけだったので、昨晚の様子を聞いてみると、彼女は垣根無しに褒めていた。

大した手札を切ることなく、彼女を圧倒したのだそうだ。それだけで、彼がどれだけ逸脱した存在なのかがわかる。

因みに、メドゥーサのことは『純粋な身体スペックだけを見れば、あの女ほど動ける奴を知らない』と言っていた。

「ほう、それは何とも喜ばしいな」

「そうですね…仮にも真祖に褒められるのは悪くはないですね」

「まあ、見た目は幼女だな」

今の台詞を、本人が聞いたらと思うとゾッとするね。

何というか、アルコル…死兆星が頭上の夜空に輝きそうだよ。

「そういえば、今夜は顔合わせと力試しを兼ねてとの事だが、力試

しはどんなことをすればいいんだ？」

「別にこれと言って特別な事はないよ。ただ他の警備員——魔法先生や魔法生徒に、貴方達の戦いぶりを見せればいいだけなんですから」

「そうですか…私はともかく、元はどうするんです？」

「どういう意味だ？」

「魔術中心でいくのか、体術中心でいくのか、剣術中心でいくのか…どうするんです？」

「ふむ…」

実際どうするかな。

まあ、その時の相手の得物に任せるとというのが本音だが、魔術は却下だな。

あまり、手札を見せるわけにはいかないしな。

「羨ましいですよ。それだけ、手札があるというのはね」

僕の返答に彼は苦笑いを浮かべながら『そうしなければ、生き残れなかったしな』とどこか懐かしむような表情を浮かべていた。

それに1人の男が生きてきた環境を想像しながら、夜の道を男2人女1人で歩いていく。

元もメドゥーサはあまり口数が多い方じゃないのだろう…この会話を最後に特に何を話す事もなく、そのまま世界樹前広場に到着した。

「ほほ、来たようじゃの」

僕達の視界に最初に入ったものは…。

「高畑…こいつを斬ればいいのか？」

「タカミチ…これを通してばいいのですか？」

「ふお！？」

「うん…」

「タカミチくん！？」

人外染みた学園長だった。

言っておきながら、学園長のアクションに無視しながら、階段を上り、踊り場に向かう。

その場にいたのは、学園長は勿論のこと、魔法先生は右から刀子先生、神多羅木先生、ガンドルフイーニ先生、シャークティ先生、瀬流彦先生、式集院先生…そして、僕を含めた七名。

魔法生徒は高音君、佐倉君、夏目君の三名。

そして、妖怪の討伐依頼をよく受けてくれている桜咲君と龍宮君の2人に、エヴァと茶々丸君を合わせた計十五名。

実はこの収集は今日決まったのだ。

当日召集にしては充分すぎる面子でだろう。

「なあ…もしかしてワシって嫌われてる？」

「…何を今更？」「…」

「（シクシクシク…）」

わざとらしく、シクシク泣く近衛老を視界の隅に押しやり、集まった者達に目をやる。

全員が昨晚、俺達が初めてこの麻帆良を訪れた時に増援として集まった者だ。

高畑は俺達の少し前から、魔法先生と魔法生徒達がいる場所に移動している。

恐らくこの中で一番、戦闘能力が高いのは近衛老を除けば…高畑であろう。

その次は日本刀を持った女史だろうか。

どちらにしても、こちらの魔法使いと魔術師のアベレージはこの世界のほうが高いのだろう。

曲がりなりにも、魔法使いということか…。

そして、復活した近衛老が俺達の説明を始める。

「急な召集によく集まってくれた皆の衆、感謝しとる。

通達していた通り、彼等を新しく警備員として雇った。

全員が昨晚顔を合わせたとは思うが、紹介しよう…神堂元くんとメドゥーサーくんじゃ」

学園長の言葉に、元とメドゥーサーが静かに一步を踏み出す。

実際に彼らの力を見たのはエヴァだけだが、歩くという動作だけで何人かは彼等の実力の一端を垣間見たようだ。

実際僕も驚いた。

ここまで、彼等と共に来たのは僕だが…その時に感じなかった“モノ”を感じた。

それは殺気ではなく、正に大きな気配が動いたという感じだった。

「紹介に預かった…神堂元だ。この場に居る方々とは昨晚顔を合わせたとは思うが、明日から3・Aの副担任と警備員を務めることになった。改めてこれから宜しく頼む」

「初めまして…メドゥーサです。図書館島の司書と同じく警備員に就きました。若輩の身ではありますが、よろしくお願いします」
簡単に挨拶をし、頭を垂れる彼等の後を学園長が言葉を紡ぐ。

「昨日の今日で疑問を抱いているものが殆どではあると思うが、彼らは信用に足る人物じゃ」

俺達がこの世界の人間ではないこと、メドゥーサのことを話はしなかった。
だが、信用に足る人物か…昼のことは悪いほうに行かなかったと信じたいな。

沈黙の中、1人の魔法生徒が手を挙げた。
その生徒は昨日の綺麗な金髪が映える少女であった。

「…色々と疑問がありますが、学園長は彼らを信じているのですね？」

「うむ…それに間違いはないのぉ」

「でしたら、私から言うことはありません。神堂元さん、メドゥーサさん…これからよろしく願いします」

少女の名は高音・D・グッドマン。

こちらにいい思いを持つてはいないと思ったんだが…。

「予想外だな…」

「…？」

「君は俺に対して、いい気持ちを持っていないと思っていたんだが…」

彼女は一瞬、顔を顰めた。

しかし、それはすぐに無くなり、自らの胸を張るように言葉を発した。

「昨日は私に非があつたんですから、私がそれに対して不快感を持つのはお門違いですわ」

「そこまで真つ直ぐに來られてはな…、いや昨日は俺も言いすぎた… 申し訳なかつた」

静かに頭を下げる俺に戸惑ったのか、彼女は拳動不審である。しかし、小さく咳払いをし、頬を赤く染めている。

「頭を上げて下さい。先ほども言った通り、私が悪かつたのですから…」

これがマギステル・マギなのか…。

自らの非を素直に認められる。

それは実に好ましい…。

高音君は彼のことを信用できたようだ。

少なくとも、自分の非を素直に認め頭を下げてくる人間を悪い人間だとは思わないだろう。

しかし、他の先生方や魔法生徒はまだそれには至っていないみたいだ。

彼の実直さ、優しさ、厳しさを少しではあるが垣間見ている僕や学園長は知っている。

見知らぬ子供達のために本気で怒れる彼を…。

だから、早く信頼を勝ち取ってもらいたいと思う。

心の中で激励をささやかながら、送ったのは秘密だ。

「では、元君とメドゥーサ君の顔合わせはこれで終了じゃ。

続い

て、彼らの実力を見るための試合を行おうと思う。 相手は…そう
じゃな、高畑君にお願いできるかの」

「なら、私が行きましょう…」

「うん？ メドゥーサが来るのかい？」

僕としては、女性に手を挙げるのは極力避けたのだけど…。
それに、元君と戦ってみたいと思ったけど、神話における怪物と恐
れられた彼女とやりあうのも面白そうだ。

「出来れば、元君とやってほしかったのじゃが…」

「僕は構いませんよ…いや、戦ってみたい。 それに元君は剣を使
うようですし、餅は餅屋に任せましょう」

「ふお…」

こうまで、彼が好戦的になることは珍しい。
考えてみれば、彼女はギリシア神話のゴルゴンの怪物というではな
かったか。

確かに、彼女の戦いがどのようなものか気になるの。

「元君もそれでいいかの？」

「ふむ…俺は別に剣に拘ってはいないのだが…メドゥーサがやる気
になるのも珍しいしな。 俺は構わない」

「それじゃあ、二人とも位置についての」

「タカミチ…」

今まで終始無言だったエヴァが口を開いた。
突然の発言に、それがエヴァという事で、この場にある全員の視線がそちらに向かった。

「何だい？ エヴァ」

「まともにやり合おうなど思うなよ、正面からぶつかれば負けるぞ」
そう言えば、身体スペックが凄いつて言ってたっけ。

周りは、まさかタカミチが負けると言われるなんて思ってもいなかったのか、ザワザワしている。

だが、エヴァンジェリンがこうまで言うのだ。

その言葉の意味はすぐに見られる。

残った人間は二人が心置きなく戦えるよう、踊り場の更に上段にあるもう一つの踊り場に移動し、左右にある階段を上っていく。

それは元とエヴァンジェリン、近衛老も同じだ。

軽く見下ろすように、二人を見ると彼女の手には鎖のついた鉄杭、高畑は手をポケットにしまっている。

「こちらの武器は当てないようにしますが…貴方はそれでいいのですか？」

「これが僕の戦闘スタイルなんですよ」

空気はいつ始まって可笑しくないまでに高まっていた。
それが、周りの人間によるものなのか、それとも本人達によるもの

なのかは解らない。

しかし、二人は実に飄々としている。
無音と4月の夜の肌寒さがのこるこの場に、学園長の声が響き渡った。

それは戦いの幕を挙げる一声だった。

「それでは…始め！」

「「！！」」

——戦いが始まった——

「…クッ！」

「ふふ…」

鎖のついた鉄杭が僕に襲い掛かってくる。

それは一直線のものから、まるで蛇が這うような縦横無尽な軌道とまさに変幻自在だ。

エヴァの言っていたことがようやく解った。

正面からぶつかり合えば、すぐさま杭の餌食になっていただろう。

だが、このまま終わるつもりはない。

襲い掛かる鉄杭を遮二無二になつて避け、彼女と距離を置く。

「…？」

当の彼女は僕が無手なのに距離を置く理由がわからないのか、手を出すことなく10m程手前で身構えている。

それもそうだろう。

最初こそ先制攻撃をうけたが、こちらの手札は向こうにはわからないのだ。

それ故に、一度間をおけば手を出そうにも出せないのだ。

「おい…どちらが勝つと思う？」

エヴァンエリンが俺に疑問を投げかけてくる。

しかし、その答えは彼女の中で出ているようにも思える。

「普通に考えれば、メドゥーサだろうな」

「ほお…何故そう思う？」

「高畑の魔法がどのようなものかは解らんが、あいつには大抵の魔法は効かない」

「効かないとはどういうことだ？」

「大規模魔術…いや大規模魔法でも彼女には傷一つ付けることは出来ない…キャンセルされる」

「な…！？ それは魔法使いにとって大敵ではないか！」

そう思う。

現に聖杯戦争でも彼女達サーヴァントでも魔術で傷を付けることは実に難しい。

それだけの魔法をぶつけるにはそれなりの時間を有してしまう…それは戦闘において命取りにかなりえない。

いつ場面が動いてもおかしくはない。

決して気を抜いてはいけないのだ。

「……」

「…！？」

しかし、彼はそれでもポケットに拳をしまった。
それが怪訝にしか思えない。

「馬鹿にしているのですか？」

「そんな事はないよ…始めに言った通り、これが僕の戦闘スタイルだ！」

「——！」

言い知れぬ気配が彼女の身体を襲った。

咄嗟に避けたが、先ほどまでいた場所には何か衝撃が走った。

「拳を剣に？ ポケットを鞘に？ 居合い…拳に拳圧を乗せたのか？」

「ほお…わかるのか？」

「目は良いんだ、動くものであれば殆ど認識できる…だがしかし、魔法でもなく唯の衝撃波であそこまでの威力を作り出すか…」

「それは居合い拳…お前の言うとおり、居合いの要領で拳に衝撃波を乗せる」

「無手故に接近戦になりがちなものの中距離戦にも対応できるようにしたのか…大したものだが、何故魔法を使わない？」

「使わないのではなく使えないんだ」

エヴァンジェリン曰く、どうやら高畑は生まれつき呪文の詠唱ができない体質ゆえに魔法の行使が出来ないのだそうだ。

それでも、マギステル・マギを目指した故に今の戦闘スタイルを師

から受け、鍛錬を重ねたのだそうだ。

ふと、脳裏に浮かんだのは1人の後輩…後の守護者と成り果てた男の姿であった。

アイツも自らの才能の無さを嘆いていたっけな…。

「だが、魔力による攻撃でないのなら、彼女にも攻撃は通るか…」

今の彼女は受肉した身である。

魔法や魔術はともかく、物理的なものは身体に通ってしまう。

だが、懐にもぐり込まれてしまえば、サーヴァントのスペックに人間が対応できるはずも無く、高畑の負けが確定するだろう。

鉄杭を用いた変則的な中距離戦を得意にするメドゥーサ…。

近距離戦を得意としながらも、中距離戦でしか戦うという選択肢しかない高畑…。

「面白くなりそうだ…」

「クッ…！」

「…！」

お互いの交戦はこう着状態になっていた。

鉄杭を放てば、男は避けながら距離を置き居合い拳を放つ。

対して、彼女はそれを避けながら再び鉄杭を投擲する。

しかし、それはお互いに決まらず、攻撃を繰り返しながらのこう着状態であった。

「（…近づけませんね）」

「（近づかせるか！）」

彼女が距離を縮めれば、その後は彼女のサーヴァントとしてのスペックを生かして一気に勝負を決められる。

だが、彼に勝利は見えてこなかった。

距離を開け続ければ、今ままスタミナが切れるまで続くこととなるだろう。

しかし、距離を縮めても彼には勝利が見えてこない。

それに、彼は焦っていた。

「（真正面を避けたつもりだったけど…ミスったかな？）」

勝利への手を必死に考える彼に投げかけられたのは…。

「考え事とは余裕ですね？」

「な…！？」

彼女の本気であった。

衝撃を避け翔け、一気に彼との距離を縮める。

アサシンという規定外のサーヴァントを除けば、メドゥーサは聖杯戦争において、ランサーに次いでのスピードと俊敏性を誇る。

誰が、彼女の疾走を止められるか？

まるで蛇のように衝撃波を避け翔ける彼女を止められるか？

この場において、それが可能なのは元を除いていないだろう。彼は寸でのところで、懐から拳を取り出し対応しようとする。しかし、それはギリギリのところで間に合わなかった。

「がぁぁー!!」

「ふふ…」

鉄杭による一撃ではなく、蹴りが横腹に入った。

「くう…!」

数mほど吹き飛ばされ、彼は痛む身体を必死に起こそうとするがそれはすでに遅かった。

「…これで終わりです」

彼女の居たであろう場所に顔を向けた瞬間、その首筋には彼女の得物である鉄杭が当てられていた。
少しでも動けば、首筋に刺さってもおかしくは無いほどに得物と頸動脈の距離は無かった。

「僕の負けですね…」

「はい…私の勝ちです」

勝つとは思っていたが、まさかこんな形で終わるとは…。

エヴァンジェリンは驚いていた。

それは、周りの魔法先生と魔法生徒も同じであったが、衝撃の度合いが違った。

タカミチ・T・高畑は近衛近右衛門を除けば、この学園最強とまで呼ばれている兵だ。^{つわもの}

それが一太刀も入れられず、負けたのだ。

「エヴァンジェリン…予想外か？」

「まさか、傷一つ与えることなく負けるとは流石の私も思わなかったぞ。お前にとっては予想通りか？」

「いや、まさかここまで粘るとは思わなかった。最初の一手で極まると思ったのだが…」

「私とは逆の予想だな…」

こうして、第一戦は周りの予想を大きく裏切る形で終わりを迎えた。

第七話 杭と拳と…（後書き）

作者「サーヴァント舐めんなよ！」

高畑「誰に言っているんだい？」

作者「画面の向こうの人…」

元「メタるな…」

作者「でもさ、本気も出さずにサーヴァントに勝てるはずもないでしょ？」

高畑「いやあ…本気を出すタイミングがなかったんだよ」

作者「負け犬の遠吠え？」

元「…高畑殺れ」

高畑「…了解したよ」

作者「そ、その構えは…！」

後に残るは1人の汚い屍だった…

第八話 格の違いを魅せてやる

まさかここまでとは思わなかった。

高畑先生は近衛学園長に続き麻帆良学園No.2の実力を有している強者である。

だが、目の前で繰り広げられているソレは圧倒されている彼であった。メドゥーサ…ギリシア神話における怪物の名を冠している彼女がどれほどのものかは解らなかったが、正しく怪物に相応しいものだった。

刹那「凄い…」

真名「ああ。スピード、パワー、俊敏性全てが異常だ」

龍宮真名は戦場を経験した傭兵のプロフェッショナルを自称するからこそ彼女の異常性が理解できる。

刹那「気を纏っていない…？」

真名「ああ…だからこそ異常なんだ。高い魔力を有しているのは解るが、強化を使っているようにも見えない…それであれだけの動きが出来るはずがない」

刹那「人間じゃない…？」

人間とは違う雰囲気と匂いを放つ彼女が只の人間だとは思ってはいなかった。

ならなんだろう？

魔族？ 化生？ それらとのハーフ？

刹那も真名もその身が他人とは一つ違うからこそ、その違いに敏感なのだろう。

だが、彼女たち以外にもメドウーサという女性の違和感に怪訝…いや不快感にも似た感情を持つもの達がいた。

魔法先生「……」

異常すぎる。

彼らの仲間として高畑先生の实力は痛いほど解っている。

戦局は今でこそ、膠着しているもののその形は決して良い状況ではない。

一手目で押され、なんとか立て直しても高畑の攻撃は全て悠々と避けられている。

衝撃波という、目に見えない攻撃を何故こんなにも簡単に避けられるのか。

気配を感じているのか…わからない。

解らないすぎる…。

そんな者に大して人が投げかける言葉はひとつしかない。

一同「（異常だ…）」

元「お疲れ様だな」

メドゥーサ「すいません」

彼の手には白のタオルが握られており、それはつい先程まで試合をしていたメドゥーサに渡される。

タオルを渡したがいいが、彼女は汗の一滴も垂らしていない。

そんな彼女は体に付いている埃をほろうのに使っており、そんな彼女の姿にどこか笑みが溢れる。

エヴァ「…で、どうだった？ タカミチ…」

タカミチ「いやあ…流石だったよ。メドゥーサの名に偽りはなかったよ」

メドゥーサ「そんな謙遜する必要はないですよ。見たところ貴方も全力ではなかったようですし…」

元「うん？ そうなのか？」

タカミチ「そんなことはないよ。少なくとも本気でやって負けたのは事実だしね」

メドゥーサ「奥の手を出さずにですか？」

タカミチ「——！ いやぁ…あははは…」

なるほど…これが彼の本気ではあるが、全力ではないということか。その真意は高畑の様子を見てもわかるし、目を見開いているエヴァンジェリンを見ても解る。

だが、身元不明の人間に奥の手を見せるほどこの男も馬鹿ではないか…。

ぬるま湯に浸った只の男だと思っていたが、少し評価をし直したほうがいいか。

視線をある人に向けながら、学園長はその人物に進言する。

近衛「さて、彼女の実力が解ったところで次は神堂くんの試合を見てもらおうかと思う」

先ほど、学園長に餅は餅屋になんて言ってしまったけど、本音を言っと元くんとも戦いたい、今日の試合の趣旨は彼らの实力を見ることがある。

僕と戦っては、彼の実力の全てを見るのは難しい。

それに、メドゥーサとの試合で想像以上に体力が消耗してしまった。だから、彼女に任せよう。

近衛「そういう訳じゃ」 刀子先生。神堂くんの試合の相手をしてもらえんかのお？」

葛葉刀子。

神鳴流の剣士であり、その剣の腕前は現在の麻帆良で最強の女性である。

そんな彼女に僕の代役を依頼した学園長も僕とメドゥーサの試合に興味をもったのだろう。

刀子「…分かりました。 どれほどの力の持ち主かはわかりませんが、彼の実力には私個人としても興味はありましたし、お受けいたします」

何の異論もなく代役を引き受けてくれた刀子先生。

長い黄金色の髪を夜風になびかせながら、静かに階段に歩を進める。その後ろを追うように静かに歩を進める元の後ろから少女が言葉を放つ。

エヴァ「…おい」

今まで無言に近かったエヴァが口を開いた。

突然の発言と、そしてそれがエヴァという事でこの場にいる全ての視線がそちらに向かった。

近衛「どしたんじゃ？」

エヴァ「もしかして、一人でこの男の相手をさせる気か？」

どういう意味だろうか？

勿論、暗に一人ではなく複数でやれと言っているのは解る。

元「それは難しい相談だな…見たところ、葛葉女史は素晴らしい剣士に見える…そんな彼女とは別に他の奴とも一緒にやれというのか？」

エヴァ「どの口がほざくか。私は少しでも、試合をまともなものにしようと思っただけだぞ」

刀子「どういう意味です…エヴァンジェリン」

自らが最強の剣士などと驕っているつもりはない。

そして、私などよりも目の前にいる少女が格上であることも嫌々ではあるが、理解している。

しかし、こつも真っ向から私がこの男よりも格下だと言われれば、

不快にもなる。

エヴァ「この私が圧倒された男にお前が勝てるはずもないだろう？」

刀子「…っ！　あなたは「エヴァンジェリン」…え？」

一瞬怒りに身を委ねようとした私の肩に手をかけられたことにより、意識は彼女から男に向かった。

元「これ以上、彼女を侮辱するのは止めるんだ…彼女は間違いなく一流の剣士だ。　侮蔑されるような謂れはない」

まさか、初対面にも近い彼から援護を受けるとは思わなかった。

刃を合わせたことはないにも関わらず、何故一流と断言できるのだろうか。

いや、それ以前にいつの間に私の背後に回られたのだろうか。全く、気がつかなかった。

エヴァ「…くっ、わかったよ。　だが「解りました」うん？」

刀子「刹那…！　来なさい」

刹那「…は、はい！」

急に自分の名前を呼ばれたことに刹那と呼ばれている少女は声が裏返り自分の出番だとは思ってなかったのか自らの愛刀を携えて、こちらに近づいてくる。

刀子「これでいいですね？　エヴァンジェリン」

エヴァ「お、おう…」

刀子「申し訳ありませんが、少し付き合ってもらいますよ?」

刹那「は、はい!」

二人を引き連れ、踊り場に向かうその後ろ姿は勇ましかった。

元「…俺の意思は無視なのか?」

タカミチ「まあ…ドンマイ」

エヴァ「なんか、スマン…」

肩に手を置かれ慰められ、幼女からも慰められる彼の後ろ姿は哀愁が漂っていたとだけ言っておこう。

元が腰から鞘を外して刀を抜き、鞘を踊り場の隅に置いた。
二尺余りという深紅の刀身を現した。

黒のロングコートを羽織い、ダラリと腕を下げた自然体に構えを取る。

一見すると隙だらけだが、それは明らかに誘いだとわかる。
無表情からは想像も出来ない鋭い視線がこちらを射抜く。

葛葉刀子と桜咲刹那も刀を抜き元を見ている。

葛葉女史の得物…その長さは標準よりやや長い程度で、鞘を腰に差したり床に置いたりせず、刀を持っている手とは逆の左手に未だ持っている。

元「（なるほど、二刀流か…）」

刀と鞘の二刀流。それが、彼女が使った型の一つだ。
しかし、少女の方は明らかに異質に見える。

元「野太刀…？」

明らかにその小さな体とは不釣り合いの長さの刀を構える少女。
しかし、その構えは硬すぎもなく、かといって緩くもない。
理想的なものだった。

元「…才能は一流、鍛錬も欠かしてないと見える。一流の剣士が
前衛に二人か…詰んだか？」

そうは言うが、彼は負ける気がなかった。
口調とは裏腹に、明らかにこちらを舐めているような口振りのソレ
は若い剣士のソレを燦るのに十分であった。

刹那「な「刹那、乗せられてはいけません」…え？」

刀子「中々したたかな御仁のようですね」

元「いやはや…試合とはいえ、戦場では冷静にか。　いや、怒りを
力に変えられることが出来る…」ということか」

刀子「…刹那。　気を抜いてはいけませんよ」

先ほどのエヴァの発言のせいかは知らないが、葛葉女史からは既に
少量の殺気が漏れている。

だが、元にそれは全く通用していなかった。
それどころか心地良く感じられた。
対して、元は微塵の殺気も発していなかった。
その佇まいは視線を除けば普段のそれと変わらなかった。
気を抜けば、凶器をその手に握っていないのではないかと思っ
てしまふほど違和感がなかった。

街灯と月明かりが、彼らを照らす。
聞こえるのは弱く吹く風と、期待に高鳴っている僕の心音と呼吸音
だけだ。

他の魔法先生たちも須らく同じなのか、踊り場の二人を食い入るよ
うに見つめている。

曇天の空の下、舞台は整った。
観客もいる。

後は、開演の合図を待つだけだった。

刀子「――神鳴流剣士…葛葉刀子」

刹那「同じく神鳴流剣士…桜咲刹那」

剣士としての血がそうさせたのか、珍しく刀子先生がそんな前口上を口にした。

それを聞いて一瞬呆けた顔になるが、それは直ぐに無くなり、口角が自然につり上がっている。

元「――傭兵、神堂元…御相手しよう！」

――今夜二回目の火蓋が切って落とされた――

第九話 神鳴流の剣士

「ハッ！」

巻き上がるは、刃の嵐。

先手を取ったのは葛葉刀子であつた。

麻帆良最強の剣士と名高い、神鳴流の剣士。

気を纏ったその剣筋は様子見などというものは無く。

一太刀のスピードは並の人間では決して避けることも受けることも敵わないモノだった。

であろうとも、元のその刃が届くことはない。

「……！」

「クウ……！」

袈裟斬り、胴切り、首元への突き……全てをいなす彼は汗一つかく事無く。

攻め込んでいるのは彼女だ。

だが、追い込まれているのも彼女だ。

それを少し離れたところで見ていた刹那は見とれていた。

「……」

美しい……。

彼の剣筋は円だ。

その大きさは刀の長さ故かそれほど大きくはない。

才能の高さ、渡り歩いてきた道、才能の高さに怠けることなく鍛え

続けたのだろう鍛錬の厚さ…。

次元が違った。

「刹那!!」

「っ!」

刀子からの一声で現実に呼び戻された。

自分は何故ここに立っている？

刀に目を向ける…夕風は寂しそうに私の手に握られている。

私は……。

「はああああ!!」

刀子先生の援護に入った。

その動きを見てから間を置かず、元の刀が動く。

高速を超える速度の円を描き、その滑らかさを利用して刀子の一太刀を受け流した。

そして返す刀で、刀子の首を落とそうと赤光を奔らせた。

その一太刀に躊躇いはなく、受け損なえば、刃の勢いに負け刀子の命はそれまでだろう。

「はっ！」

無論、その程度を受けられない刀子ではなかった。

受け流された刀をすぐさま切り返して元からの攻撃を防ぎ、左手に持った鞘で鳩尾に突きを放つ。

それを半身体を背ける事で避けた元は、再び首にその一刀を放った。一文字に迫る刀を刀子は身体を伏せる事で回避し、から空きとなった左胸に向けて一太刀を向ける。

だが、それも彼には届かない。

「…な!？」

その一太刀は彼の左腕に受け止められる。

その腕は義手だ。

友が彼に見繕った、最高の硬度と性能を誇る義手…。

左腕で防がれるなど思いもしなかった刀子は動きを止めてしまった。

「…動きを止めたな？」

「…あ」

首元への一撃…避けきれない。

だが、その一撃は彼女の教え子に防がれた。

「はあああああ！！」

「チィ！」

「刹那…！」

横一文字に放たれた人たちは上から叩きつけることで、刀子への刀を防ぐ。

そして、その勢いのまま胴へ一閃を叩き込む。

しかし、それも彼は義手で受け止め、彼女の一撃の勢いを借り後ろに大きく跳躍する。

「刹那…感謝します」

「いえ、援護が遅くなりすいません」

刀子は、体勢を立て直し再び刀を構える。

それを見て、元は紅蓮を地面に転がっている鞘に戻す。

その行動の意味が彼女たちには解らなかった。

「I am flickered…」

だらりと下げられた彼の両手には何時の間にか夫婦剣が握られていた。

「今のは…」

「本気という訳ですか…」

刀子のつぶやきに彼は口元を小さく吊り上げたただけであっただ、それだけで十分な答えだ。

「いくぞ…」

「……！？」

彼が一步を踏みしめた瞬間…一瞬の内に彼と彼女たちの距離は突き詰められ、彼の双剣が振りかざされた。

刀を構えた姿勢のまま一步後退し、元の間合いの僅か外に離脱する刀子。

しかし、取り残された刹那は彼の剣に襲われることとなり、夕風で受け止める。

しかし、彼は双剣だ。

上段からの一刀の後、間髪入れず左手に握られていた干将による下からの一撃に夕風は弾き飛ばされ、宙を舞う。

「あ……」

「まずは一人…」

「刹那！」

これで桜咲刹那は退場だ。

宙を舞った夕風は重力により、彼女のすぐ隣りに突き刺さった。それを見た刀子は更に彼との距離を開ける。

どう攻めればいいのか…。

だが、その思考は間違っていた。

「考え事か？」

「なっ！？」

そしてその瞬間、鋭角な軌道の猿耶が刀が無防備となった刀子の首に、その牙を突き立てようと襲う。

一瞬の動きに驚きを感じながらも、小次郎の太刀を正面から受け止めてしまい彼女は弾き飛ばされてしまう。

「くうううー！」

距離が開き、戦いに刹那の静寂が落ちる。

その間ですら、思考することも出来ない。

しよつものなら、先ほどの二の舞になる…だから、彼に言葉をかけた。

「…素晴らしい剣の腕です。正直、最後の太刀の鋭さには肝を冷やしました」

「…そう言う君こそ見事な腕だ。まさか、干将・獬耶を使うことになるとは思わなかった。先程の少女も年齢に見合わない見事な腕であったが…」

彼は干将・獬耶と言ったか？

「君の思っているとおり、この夫婦剣は人命で鍛えられた中国の宝剣だ…」

「…そうですか、ですが何故あなたがそれを？」

「企業秘密だ…とはいえ、犯罪行為に準じて手に入れた訳ではない」

「…そうですか」

無表情のまま刀子は彼に問いを投げかけるが、それに対し片目を閉じて口の端を吊り上げながら何事もないように元は答える。

その間にも二人は気を緩める事無く、互いに互いの隙を探り合っていた。

特に、刀子は元の得体のしれなさに心乱されていた。

「神堂元…あの男は一体…」

二人の戦いを見て、ガンドルフィーニは呟いた。

仕事で刀子と行動を共にする事が多い彼は、同時に刀子の実力も熟知している。

そして、生徒ではあるが桜咲刹那は剣士としても実に優秀である。

それ故に、刀子と渡り合い、刹那を負かせた元の実力を、信じられなかった。

それは他の魔法先生と生徒も一緒のようだ。

特に、刹那と行動をすることが多い真名はこつも簡単に彼女が敗れたことが信じたられなかった。

だが、近くでそれを見ていたエヴァンジェリンは実に愉快そうに見ていた。

「まだ早々ではあるけど、彼の實力は少なく見積もっても刀子先生クラスと見て間違いないだろうね」

神多羅木の隣に立っていたタカミチも、その意見に同意した。

接近戦のプロフェッショナルと言える彼もまた、元の實力に寒気を覚えたのだ。

言葉にこそ出していないが、この場にいる全員もその言葉には同意した。

「どうする…?」

「どうとは?」

「今は君一人だ…そろそろ終わらさないか?」

その言葉は彼女の神経を逆撫でしたが、どこかで理解していた。私では敵わない。

彼は暗に怪我をしないうちに、この試合を終わらせようと言っているのだ。

「まだ、これからです!」

とは言え、彼女もまた一人の剣士…このまま負けを認めることなど

出来るはずもなかった。

「ハアアアア！！」

「フツ……」

刀子も潜り抜けてきた死線の数はい達ではない。

左手に持った鞘で振りかざされた獏耶の刃の腹を叩いて軌道をずらし、体を滑り込ませる事によって小次郎の間合いを侵略する。

「だが、甘い……」

今の彼は二刀流……刀子と同じ。

彼の左手には干将が握られている。

「クツ！」

あと一歩が届かない。

こちらの間合いに踏み込もうとすれば、彼の干将と獏耶どちらかのひと振りに襲われる。

「いくぞ……」

「……！」

双剣から繰り出される縦横無尽の剣撃。

身体を軸に刃を振り回し、一回転したところで交差した双剣を切り開く。

「クツ……！」

彼女の守りはそれで歪むが、彼は追撃の手を止めない。

間髪入れ込まれた、攻勢は双剣を胸の前でクロスさせる形での突進。その勢いに女性と男性という体格と筋力の差もあり、無様に押し込まれてしまう。

それをいなすことなど、彼女にはできず正面から受け止める形となつてしまった。

先ほどは彼に弾き飛ばされることで、距離を開けることが出来たが、今は違う。

それをさせてくれる暇がないのだ。

「はあああああ！」

「つう…！」

幾度も打ち合わされる鋼は悲鳴を上げていた。

本来、日本刀は構造上、斬り合うことにむいてはいない。

あくまで一刀の下切り捨てるのが、刀の役目なのだ。

それが、元の連撃で休めることもいなすこともできず、真正面から受け止める…結果は見えていた。

「なっ！」

刀が折れた。

それは最後の悲鳴を上げ、彼の攻勢の前に散った。

「まだ…続けるか？」

手にある自らの愛刀は腹から先は綺麗に無くなっている。

それは、単純な敗北ではなく剣士として死であった。

「……いえ、私の負けです」

こうして、今宵最後の一幕は終わった。

無言で踊り場を降りていく彼の後ろ姿を無言で見つめる刹那は一人の剣士として目指すモノを見つけたように思えた。

だが、葛葉刀子は未だにその手に握られている愛刀の無残な姿から目を離さず、静かに涙を流していた…。

「（ごめんね…）」

だが、エヴァンジェリンはこの結果にひどく満足そうにし笑顔いっぱい
で試合を終えた元に声をかけている。

そんな姿を見たメドゥーサは一つため息を漏らした。

第十話 赴任当日

昨晚の試合から、一夜明け俺は学園長から与えられて家で目を覚ました。

布団から、体をお起こし頭をさする。

思い出すのは、近衛老が嫌いだということ、桜咲刹那という才能あふれる少女、そして葛葉刀子が流したが、心の涙…。

言い訳にしかないが、刀を折るつもりは無かった。

日本刀故、その構造は知っていた…衝撃には弱いということ。

干将・獏耶は通常の剣に比べれば、肉厚で無骨だ。

それに、叩き込まれれば日本刀のような薄手の刀身が折れてしまうのは必然だ。

それを考えれば、佐々木小次郎は見事としか言いようがない。

双剣の扱いで言えば、俺はエミヤと変わりない実力を持っていると自負している。

勿論、色は違う。

俺は才能があり、あいつは才能が無い。

だがそれ故に、アイツの剣は俺よりも重い。

真っ直ぐに愚直に、鍛え続けたアイツの剣は俺に比べれば遥かに遅く、無骨だ。

だが、重い…。

あいつの思いがそのまま剣に移ったのでは無いかと思えるほどに、重い。

そんなエミヤやアルトリア、クーと言った英雄達に圧されることなく、真っ向から打ちあった小次郎はその刀を傷つけることなく、戦い続けた…。

勿論、葛葉女史の才能が小次郎に勝っているなど思いもしない。
だが、彼女と同じく野太刀を扱う彼には改めて感嘆する。

「うん…」

隣で寝ているメドゥーサは小さく吐息を漏らす。

俺が起き上がった事で、彼女にかかっていた布団がはだけてしまい
肌寒かったのだろう。

布団のかかっている場所から見える彼女の肌はとても美しかった
…。

「……」

彼女に布団をかけなおし、俺は布団から出る。

時計に目をやれば、短針は5を指している。

起床には早すぎる時間ではあるが…まあ良い。

未だに静かに寝息を立てている、彼女の長い髪をひとでし俺は部
屋を出た。

と言うものの、俺にはすることがある。

葛葉女史の新たな刀の用意だ。

だが、ここに刀を鍛える環境は無い…。

それに鍛えようとすれば、一日どころか数日は時間がかかる。

「ふう…」

俺は縁側に座布団をひき、腰を落として目を閉じる。

魔術回路20に魔力を叩き込む。

宝具の創造こそ、世界の制限で無理だとしても、ただの刀ならば新たに創ることは可能だ…。

何を創る…創るのならば最高の名刀だ。

創造理念は野太刀…四尺余り、

基本骨子を強固に鍛え、

構造材質は鋼…、

制作技術は…思い浮かべる…、アイツの世界を、
「何」

無色だ、色は無い、彼女の想いを受け入れられる無に…。

思い出せ…昨夜、彼女が握っていた刀を、姿を、全てを…。

何年だ…。

何年彼女はアイツを握っていた。

幾たびの戦場を渡り歩いた…。

造れ、叩け、鍛えろ…彼女の想いを。

「出来た…」

手にあるのは昨晚、彼女が手にしていた野太刀と瓜二つの日本刀。

刃は綺麗な波形を波打っている。

元の額には一筋の水滴が流れている。

創ったばかりの——を手にし、縁側から下り、庭で構える。

上段から振りかざし、振りかざした刃を切り返し、下段から振り上げる。

握って解った。

こいつには俺の色がない。

だが、それで良い。

こいつが染まる色は俺ではなく、彼女なのだから…。

刀を鞘に戻し、俺は家に上がる。

時計を見れば、6時を回っていた。

まさか、こんなに経っていたとは…。

普段の宝具オモイを創造する時とは違い、全く無色のモノを創り出すというのは案外難しいものだ。

朝食を作るため、台所に向かう。

米はあるため、台所にある冷蔵庫の中の食材を見繕う。

あるのは昨日買ってきた、卵、レタス、茄子、ベーコン、豚肉、アツ。イ…。

「やあ」

静かに冷蔵庫の扉を閉める。

…あれ？

今、何かいなかったか？

「まさかな…居るはずがないよな」

そつだ居るはずが無い…ゆっくり深呼吸をして心を落ち着かせる。季節は春とはいえ、朝はまだ肌寒さが残る。

肺にはいる新鮮な空気が冷たくて気持ちいい。

再び、朝食を作るために冷蔵庫に手をかける。

あるのは昨日買ってきた、卵、レタス、茄子、ベーコン、豚肉、アツ。イ、ハ…。

「やあ」

「ハ口」

「増えたあああ！！…って、アグにハルじゃないか？」

アグにハル…。

俺がかつて訪れたとある世界で作った、生活サポート兼愛玩用小型ロボット。

見た目は正にアツガ。と。口である。

「なんで、ここにいる？」

「イシユタルさんがここに居ても良いって」

「ハル、オナジ！ オナジ！」

冷蔵庫の中で小さく飛び跳ねるハルにちよこんと座り込んで俺の問いに答えるアグ（メスらしい）。

それにしても、イシユタル《バカ》め…何でこんなところに送ってきたのだろうか。

いや、言わずもがな…面白いからだろう。

「取り敢えず…」

俺はアグとハルを冷蔵庫から取り出し、居間のテーブルの上に置く。

「元気だったか？」

「アグは元気だったよ！」

「ハルゲンキ！ ゲンキ！」

「それは何よりだ…」

あの世界は人に厳しかった。

特にニュータイプ…人の可能性を体現した人間にとっては…。

そんな中で俺の心を救ってくれたのは彼女たちであり、こいつらだろ。

「元？」

声のする方に視線をずらすと、そこには黒のセーターとデニムのパンツに身を包んだメドゥーサがいた。時計を見ると6時半になっている。起きてきても可笑しくない時間である。

「元…この子達は？」

「うん？ ああ…俺がかつて訪れた世界から来たらしい。名前はアグとハルだ。アグ、ハル…彼女はメドゥーサだ」

「初めまして。アグ、ハル」

「アグなの。初めまして」

「ハジメマシテ！ ハジメマシテ！」

「ふふ…」

どうやら、メドゥーサはこいつらを気に入ったようだ。こいつらのサイズは20cm程である。

つまりは彼女の小さいものこそ可愛らしいに当てはまるのだ。なら、こいつらの相手はメドゥーサに頼むとしよう。

「メドゥーサ。俺は朝食の準備をする、お前はこいつらの相手をしてくれ」

「わかりました。任せてください」

何だか、アルトリアが食物を目の前にした時の受け答えに似ている
気がする…まあ、気のせいだろう。

「それじゃ、行ってくる。　アグ、ハル…留守番頼むぞ」

「任せて」

「マカセロ！　マカセロ！」

「ふふ…行ってきますね。　アグ、ハル」

思いがけない新たな家族の参加に驚きもしたが、俺は今日から始ま

る教師生活のために近衛老のところに向かう。

メドゥーサも同じく、図書館島の司書を務めることになるため、近衛老の下へ向かう。

俺は創造で作り出したスーツを身に纏い、メドゥーサは普段の格好である。

何気ない会話をしながら、歩いていると何時の間にか学園長室にたどり着いた。

それにしても、何故近衛老は女子中等部の学園長室ばかりにいるのだろうか？

変態なのか？

「失礼する」

「おお、待つておつたぞ神堂くん」

近衛老の隣には、おなじみの高畑が立っている。

「昨日はご苦労さまじゃったの」

「何、大して疲れはなかった」

「そうですね」

「疲れなかったか…いやはや、分かっていたけどやっぱり君たちは凄いね」

昨晚の試合は中々に白熱したものがあつたが、あの程度は俺たちにとって日常とも言えることなので本当に疲れはしなかった。

「早速なのじゃが、昨日言った通り神堂くんには副担任としてネギ君を補佐してもらう事になる。先生とはいえまだ10歳の子供じゃ、しっかりとサポートしてやってくれ」

「分かっている…だが、昨日も言ったがネギ少年がなにかしらの問題を起こした場合は俺の裁量に任せて貰うぞ?」

「…それは分かっている。じゃが、穏便にの?」

「それは問題の規模にもよる」

苦い顔をする近衛老に高畑は苦笑いを浮かべているが、昨晚のことを考えれば高畑は問題ないだろう…。

「失礼します。学園長急な用とはなんでしょうか?」

扉をノックする音と同時に入ってきた少年は実に利口そうな顔をしていた。

なるほど…この少年がネギ・スプリングフィールドか。

「おお、ネギ君。実は、今日から君のクラスに副担任が就くことになったのじゃ」

「え? 副担任って、タカミチじゃなかったんですか?」

どうやら、このバカ爺は当のネギ少年にすら連絡してなかったらしい。

俺は近衛老に殺意を少し込めて睨んでやった。

それに、一つ咳払いをして、視線で高畑に助けを求めた。

「急な話で悪いんだけどね。ネギ君のクラスはもう3年生だろう？ 中等部もこれが最後だ…生徒たちのなかには色々な進路をもった子がいるだろうから、出張の多い僕じゃなくて、正式にしっかりクラスにいられる人が良いということで…彼が副担任になることになったんだ」

ほお…、即興だとしたら大したものだ。

実に解りやすく、有り得ることをツラツラと…。

「初めましてネギ・スプリングフィールド君…。俺の名前は神堂元という…教師としては若輩の身だが、人生の心配として君を出来るだけサポート出来るように、頑張るつもりだ。これからどれだけの付き合いになるが分かんが、よろしく頼む」

差し出された手に慌てて、手をだし握手をする。

ふむ…子供だな。

「は、初めまして！ ネギ・スプリングフィールドです！ 僕のほうこそよろしくお願いします」

「それで、こちらの人は？」

ネギはメドゥーサの方を見る。

「（凄い綺麗な人だなあ…）」

なんて感想を抱いていた。

だが、それも仕方のないことだ。

メドゥーサは、女神に嫉妬を覚えさせるくらい的美貌と髪を持ち主なのだ。

「初めまして、メドゥーサです。今日から図書館島の司書を務めることになりました。直接関わる機会は少ないと思いますが宜しくお願いします」

「こ、こちらこそ！」

緊張しながらメドゥーサと握手する少年を見ながら、元はこんなことを考えていた。

もし、メドゥーサではなくアルトリアがこの場にいたら彼はどんな反応を取るのだろうか……と。

少年はイギリスのウェールズの出身だと聞いた。

イギリスの国民的英雄と言えば、未だに陛下と呼ぶ人もいる程、信仰を集めている英雄……アーサー王。

そう思うと、内心可笑しく感じた。

そんな彼女と恋仲にある自分に、そして目の前にいる彼女もまた神話の反英雄メドゥーサもまた自分の恋人なのだ。

そして、様々な世界を渡る中、英霊こそなれど英雄たちとそんな男女の中になったことは一度や二度ではない。

そう思うと、男としてどれ程恵まれているか解る。

その後は、学園長室を後にし、ネギ君と共に職員室で挨拶をした。これから関わっていくであろう教師は源女史に新田氏であろう。

聞けば、源女史は英語教諭でネギ君が赴任した時の副担任なのだそうだ。

「ネギ先生はまだ子供ですから、お願いしますね」

「若輩の身ではありますが、出来ることをしていくつもりです。宜しく願います」

「こちらこそ…神堂先生」

先生か…、まさかこの身が人にものを教えることとなるとは…。クーが見たら、馬鹿みたく笑われそうだ。

そして、新田先生は現代国語の教員で生活指導員でもあるようだ。規則に厳しく、生徒からは“鬼の新田”と呼ばれ恐れられているらしい。

しかし、そう言った先生の殆どは生徒思いであることが多い。実際に少ししか話をしていないが、その思いが感じられた。

「初めまして、私は新田といいます。ネギ先生はまだ若いですが、私たちがサポートしていきましょう」

「勿論です。ですが、私も教師として若輩です…ご迷惑おかけする機会があると思いますが、その時はよろしく願います」

「大丈夫ですよ。そういった事も私のような年長者の仕事ですから」

俺も学生時代にこんな先生に出会えたら…なんて思ってしまったが、藤村先生も生徒思いでない先生だ。

あの頃が懐かしと思う。

海と文武ともに鍛えあい、美綴と共に遠坂を揶揄し、そんな反応を楽しみ、藤村先生の暴走を見ながら苦笑いをし、衛宮の馬鹿の行動にヒヤヒヤしたり…。

…っといかな。

年を取ると昔を懐かしむことが増えてしまう。

だが、俺も今は過程はどうあれ教師だ。

調整も重要だが、教育も重要だ…全く面倒おもしろいことになりそうだ。

職員室を後にして、3・Aの教室に向かう。

そんな中、俺はネギ君に言わなければいけないことがある。

「ネギ先生…いや、ネギ・スプリングフィールド」

「はい…え？」

不意にフルネームで呼ばれたことに訝しんだようで、ネギ君は気の抜けた返事をした。

「俺も神秘…魔法に関わる者だ」

「神堂先生もですか!？」

声が大きいきぞ…したためる俺にネギ君はしょぼんとしてしまった。予想外のことは言え、やはり神秘に対する心構えが薄いか…。

「君がこれまでしてきたことは聞いた。女生徒の前で魔法を使ったり、生徒達と図書館島に魔道書を取りに行ったり…」

「うつ…」

「俺は君のサポートの為に、2・Aの副担任となった…それは、教師として人として神秘に関わることに對してのサポートだ」

「…はい」

「今まで、君がしてきたことは…こちらの規則に従えばとくにオコジョにされていても文句は言えないことだ。特に惚れ薬など犯罪だ」

「ええ!…」

自覚なしの悪意ほど面倒なことはない。
しかし、面倒だ。

「だが、何故君が今の今まで罰せられなかったか…わかるか？」

「…僕がサウザンド・マスターだからですね」

「その通りだ…俺はちよつとばかり特殊なみ身の上でな、君の父親のことなど露にも知らん…だから、俺は君を特別扱いなどしない」

「……」

「だから、君がこれから何かしら問題を起こせばそれなりの行動を取らせてもらう…。10歳の子供だろうが、英雄の子供だろうが、君は麻帆良学園の一教師としてのプロ意識を持ってもらう」

「…プロ意識ですか？」

「そうだ…。規則を守るとはどんな世界だろうと社会で生きていく上で、非常に重要なことだ。でなければ、俺みたいになるぞ」

「神堂先生みたいにですか？」

そう言う、神堂先生は自嘲気味に苦笑しながら言った。

「社会不適合者という奴にな…」

その苦笑いするその姿はタカミチとは違う、大人の男だった。

「神堂先生は少しここで待っていてください。しばらくしたら呼びますので…」

3 - Aの前に着くとネギ君はそう言ってきた。
暫し思考できる時間が出来た。

生徒たちは3年生に進級したばかり（数日程度）とはいえ、いきなり知らない男が副担任に赴任したのだ。

思春期の子供は難しい、女の子は特に難しいと聞く。

それも俺が副担任を務める3 - Aは女子中等部のクラスなのだ。

拒絶されるのではないか？

生前に女子校に進学した知り合いに再開したとき、学校の様子を聞いてみたことがあったが、何と言うか…黒いのだという。

苛められないだろうか？

年甲斐にも無く、そんなことを考えてしまった。

もし、苛められたとしても泣きはしないがかなり傷つくのは間違いない。

などと、元は見当違いなことを考えているが、忘れてはいけない。彼は、ギャルゲーの主人公も真っ青なフラグビルダーだと言うことを…。

彼が不安に思っていることは全くの見当違いなことである。

…というか、彼の毒牙にかかってしまう女生徒が何人出てきてしまうかのほうが問題となる。

元は衛宮のような鈍感野郎ではない。

むしろ、環境の変化に敏感であり、それは感情にも同じである。

彼の見当違い不安もまた、初教師生活ということでの緊張の現れなのかもしれない。

「神堂先生入ってきてくださーい！」

思考に一区切りできたところでタイミングよく、ネギ君からの声がかかる。

「（…よし！ 行くか）」

不安がないと言ったら、それは嘘になる。

しかし、不安だらけの教師の言うことなど生徒達が聞くはずがない。俺は教師だ。

頑張って行くか…！

第十一話 修羅場

ネギがイキナリ、副担任が変わると言い出した。

何で、高畑先生が外れるのよ！

と周りのクラスメイトがドン引きする位の剣幕で彼女は自らの小さき担任に詰め寄った。

「あ、あの…タカミチは出張が多いので、その明日菜さん達ももう3年生なのでちゃんと学校にいられる先生が副担任になった方がいだろうって…タカミチが」

どうやら、高畑先生がネギに直接そう言ったようだ。

ネギが来る前は高畑先生が私たちの担任だった。

確かに、そのときから高畑先生は出張が多く、クラスに居ないときも多々あった。

それを考えると、筋の通った言い分ではあるが…納得は出来ない。

「そ、それで…その新しい先生は今教室の外で待っているの…」

ふん、いいわ。

その新しい副担任とやらが高畑先生に変わる位いい人だとは思えないけど、見てやるうじやない。

「神堂先生入ってきてくださーい！」

ネギが元気に扉の向こうにいるだろう、新しい副担任に声をかけている。

先程まで、ブツブツ文句を言っていた神楽坂明日菜は見たことのない男の姿に目を奪われてしまった。

だが、それは他の女生徒も同様だった。

「紹介に預かった神堂元だ。今日から一年間、この3-Aの副担任を務めることになった。教師としては若輩の身ではあるが、勉強と生活の両面で君達をサポート出来るよう…、精一杯頑張るつもりだ。この一年間宜しく頼む」

何度も言う形になるが、まさか教師になるとは思わなかった。目の前に広がる光景が未だに信じられない自分がいる。教壇に立ち、簡単な自己紹介を終わらす。

「……か……」

か…？

カレイドルビー？

「……カッコイイー！！！！」

「……きゃあああー！！！！」

窓が揺れ、壁が軋みを上げるほどの音量に一瞬たじろいでしまった。
隣を見ると、ネギくんが顔を引き攣っている。

恐らくは、俺も同じような顔をしているのだろう。

お互いに顔を見合わせ、苦笑いをしてしまう。

…若者の力強さに負けそうになるが、ここで引き下がってしまえば、俺の一年間が決まってしまうような気がする。

「静かに…！」

神堂先生は大きな声を出すわけでもなく、力強く一喝した。
それを聞いたクラスの皆は一瞬で静かになった。
凄い…。

僕が知る限り、静かにするように言っ…このクラスには大人しく
言うことを聞くような人は少ない。
良くも悪くも、元気すぎるのだ。

「褒めてくれるのは嬉しいが、今はHRだ…。つまりはこの時間
も授業の一環故に静かにしていてくれると嬉しい」

「……」

みんなはなんかハトが豆鉄砲で打たれたような感じで何もしゃべらない姿を初めて見た。

僕がどうしたらいいか、右往左往しているが…。

「「「「「おおおおお…」「」「」」

どうやら、僕の心配は無意味だったようだ。

その声は感嘆のモノであり、神堂先生の堂々たる姿、物言いに感心しているようだ。

その姿は、何者にも屈しないと言った感じが見られ、目からは強い意思を感じた。

僕もあの時…、神堂先生みたく堂々としていればよかったのかな…。

「あ、あのこの時間は神堂先生の紹介も含めて質問の時間としますので」

元の物言いとソレを受けての生徒たちの反応を見たネギは少し落ち込みながら、クラスに声をかける。

「おーっと！ それじゃ、私の出番だね」

それに反応して一人の女生徒が意気込んで教壇へと近づいてきた。

その手にはメモ用紙に筆記用具、そして一体どこから取り出したのか疑問が出るマイクを此方に向けてきた。

確か、この生徒は…。

「君は確か、朝倉和美だな？」

「あれ？ 何で知ってるの？」

先程にクラス名簿を見たということを、彼女に伝えた。

あのための時間があれば31人の名前と顔を覚えるには十分だ。

「へえ…凄い記憶力ですね」

「そうでもないさ…それで、何を聞きたい？」

「それじゃ、気を取り直して…歳はいくつですか？」

「26だ」

「出身は？」

「日本…とは言え、外国暮らしも長かったのな。日本と外国にいる時間は同じくらいだ」

「へえ…！ それじゃ、外国語とかも話せるんですか？」

「英語、中国語、ハングル、ドイツ語、フランス語…それ位かな」

「本当アルか？」

すると、何処からか似非中国人みたいな声が聞こえた。

ふむ…古菲か。

確か、中国からの…。

「我可以？中国（中国語は話せる）。什？是不？？（間違ってるかな？）」

「——！！它是没有？的的！（——！！大丈夫だよ！）」

「「「「おおおおお！」「」「」」

自らの言葉が間違っていないか古菲に中国語で聞く、元に嬉しそうに同じ言葉で大丈夫だと返す。

自分たちが全く解らない言葉で会話する元と古菲に驚きの声をあげる。

だが、古菲は未だに嬉しそうに彼を見ている。

異国の地で故郷の言葉が話せないのは、やはり何処か寂しく感じるのだろう。

だが、この教室には確実にもう何人かは日本人ではない人間がいる。絡繰茶々丸は人間…生き物ではないとして。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは吸血鬼だ…ドイツ系か？ザジ・レイニーデイ…彼女は何人か全く見当が付かない。

そして、何よりこの教室には幽霊までいる…あの制服はかなり古いものだろう。

「さて、まだ質問はあるか？」

「あ、はい…趣味特技はありますか？」

「趣味は歴史書や文学書の読書。特技は空手、柔術、システム、カポエラ、八極拳、八卦掌などの体術に剣術、弓術、槍術…まあ、どれも中途半端なのでどれも誇れるようなモノではないが」

「「「「おおおおお！」「」「」」

「あれで、中途半端ですか…」

クラスの喧騒にかき消された少女の小さな呟きは確実に元に届いていた。

その少女は…桜咲刹那。

昨晚の試合で葛葉女史とタッグを組んでいた野太刀を操っていた少女である。

「（君の方が間違いなく才能も時間もあるのだから…気にする必要はないのかな）」

「勝負するネ！」

「如果有???我来?是…（時間があればな…）」

「是！（はい!）」

「さて、まだ質問はあるか？」

「…じゃあ、最後に」

朝倉和美は最後と言って、とんでも無いことを言った。

「このクラスで好みの女の子は誰ですか？」

「好みか…」

まさか、そんな事を言われるとは思わなかった元は少し考え込んでしまった。

今、この場にいないだけで彼にはメドゥーサという極上の恋仲である女性がいる。

だが、元は恋人にするならという質問では無いため少し考えて口を

開いた。

そんな彼をエヴァンジェリンは楽しそうに含み笑いをしながら、見ている。

「…近衛木乃香、絡繰茶々丸、古菲、桜咲刹那、龍宮真名、長瀬楓と…」

元は見た目10歳程度の少女を見て…。

「（ふふふ…私を選べ）」

「…以上だ」

エヴァンジェリンは不敵な笑みを浮かべていた顔をそのまま机に突っ伏して、怪獣のようにガアと叫んだ。

「なんで、私を選ばない！」

「幼女嗜好趣味はない」

「誰が幼女だ！」

「貴様だ炉利江武亜」

「変な当て字を使うな！」

物凄い剣幕で叫ぶ少女を弄るように受け流す、彼を他所に彼に名前を呼ばれた少女達は各々に驚いていた。

「そんなマスターを差し置いて、私なんかが」

「いやあ、モテモテでござる」

「照れるネ」

「わ、私ですか…」

「悪い気はしないかな」

「何でうちなんやろ？」

「このメンツって…なんだか腕っ節の強そうな人を選んだって感じね」

「なあ、明日菜。うちって強そうに見えるん？」

「木乃香が強かったら、猫は世界を取れるわよ」

「それは酷いんとちゃう？」

などと、各々はそれぞれの想いを抱いているようである。
だが、元は未だにエヴァを弄り倒している。

「いや、むしろお婆ちゃんだったか？」

「誰がババアだ！こんな可愛らしいくて、ピチピチのババアなんかいるか！」

「自分で可愛い…ふっ」

「笑つなあああ！！／／／」

そんなこんなで朝の騒がしい質問大会は終わり、時は既に授業中である。

学校での元の仕事は主に３－Ａの副担任とネギの授業のサポートである。

その為、ネギが他のクラスで英語の授業をしている時は彼について行く。

しかし、今は３－Ａの英語の授業である。

生徒たちは静かに授業を受けているが、流石はトラブルメーカーネギとそのクラスである。

一々、元が叱咤している。

「ネギ先生。知識を習得するための授業だ。勉強が出来ないなどと馬鹿にするような言動は控えろ。彼女に謝るんだ」

「…明日菜さん、ごめんなさい」

……、

「ネギ先生。その漢字は間違っている。『勤める』ではなく『務める』だ。漢字には一つ一つ意味があるからな」

「すみません…」

「日本語は世界的に見ても難解な言語だからな…少しずつ理解していけばいい」

「ありがとうございます」

「ああ、ネギ先生が頭を撫ぜられて…私も撫ぜたいですわ!」

「委員長、鼻血でてるよ」

……、

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル…寝るな」

「ぎゃあああ!! 頭があああ!!」

「チョークがレールガンのように!?!」

「ああ、マスターが…！」

……………、

「（その幽…相坂さよ。フラフラするな）」

「（私が見えるんですか！？って、声が頭に…）」

「（見える…見えるから、大人しく座ってろ）」

「（はい…！（うるうる））」

……………、

「はい、今日の授業はここまでです。皆さんちゃんと復習してくださいね」

「」「」「は」「い」「」「」

「（…癖が強すぎるだろう。最近の中学生はこれが普通なのか？）」

いいえ。

普通ではありません。

彼女たちが特別なだけです。

午前の授業が終わり、時はお昼休みである。

新任の元はお昼を摂るために、メドウーサと約束した場所…食堂に向かう。

廊下を歩いていると、元に誰かが声をかけた。

「神堂先生」

「うん？…近衛木乃香に神楽坂明日菜、古菲、朝倉和美か（相坂さよもいるか）。何か授業で解らないことでもあったか？」

「ちょっと、解んないところもあったけど、今は違うよ」

午前中という短期間ではあるが、このクラスに顕著に見られることがある。

目上に対する敬語がなっていない。

俺は余り気にしないが、社会に出ると色々困るぞ？

「先生つて、これからご飯でしょ？まだ聞きたいこともあるし、私たちと一緒に昼食べない？」

「…別に構わんが先客がいてな…。その人と一緒にあれば俺は構わんよ」

「先客…？他の先生なん？」

「いや、図書館島で今日から司書をするようになった人だ」

すると、彼女たちは安心したように息を漏らした。授業以外まで先生と一緒にいたくないのだろう。その心理はわかる。

だが、一応俺も先生なのだな…。

食堂に着くと、そこには彼女が待っていた。

「待たせたな」

「いえ、私も今着いたばかりなので…。元。後ろの彼女たちは？」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「ああ…、俺が副担任をすることになったよーAの生徒たちだ…つと、どうした？」

一同は彼女の容姿を見て、絶句していた。

今まで見たことが無い程の美人なのだ。

容姿端麗、スタイル抜群…同じ女として彼女達はショックにも似た感情を抱いた。

古菲を除いて…。

「いや…その、物凄い先客だなっ」と

「ボンキュボン…何食べたら、あんな風になれるんやろ」

「さあ…」

「（幽霊とは言え、嫉妬です）」

「（この人も強そうネ!）」

そんな彼女達をみて、メドゥーサは口元を抑えて小さく微笑んだ。

「元のクラスは随分面白いですね」

「少し、元氣過ぎるがな…まあ良い。取り敢えず、食券を買いに行こう」

そう言つて、元は未だに硬直している少女達を引きずって券売機に向かった。

古菲は強者との邂逅に胸を躍らせながら、楽しそうに歩いていった。

テーブルに並べられた、各々の食事を食べながら一人の女生徒が口を開いた。

「へえ、メドゥーサさんって言うんですか。それで、神堂先生とはどういつ？」

「私と元の関係ですか？…そうですね、所謂恋人というモノでしょ

うか」

「……恋人おお!!?」……」

何時の間にか、彼等を囲うテーブルの周りには生徒達の数が増えつつあった。

恐らくは見たことのない男性教師と美人に惹かれたのだろう。その生徒たちも含めた生徒たちが一斉に驚愕の声を上げた。

「まあ…そんな所か」

「うちの事が好きだった言葉は嘘なん？」

「私も言われたネ」

「他にも色々いたわね」

「……修羅場だあ!!」……」

すると、彼女達は何やら悪い顔をしてから、そんな事を言い出した。周りの生徒たちは騒ぎ立てるように騒いでいる。

「元…?」

「言い方に悪意を感じられるな。そういうことではなく、最初の自己紹介を含めた自己紹介で好みの女性を聞かれたため、答えただけだ。他意はないさ…だから、そんな目で見るな。あと、朝倉和美は舌打ちをするな」

「そういう事ですか…」

メドゥーサは木乃香と古菲を見ながら、何か納得するように頷いた。

「ですが、そうですね。貴方が興味を持つのも分かります（というか、何で幽霊がいるのでしょうか？あと、静かに涙を流すのはちょっと怖いですよ？元はもう落としたのですか）」

などと、心の中では別のことを考えながら、元が興味を持った理由に何となく気づいていた。

「どういう事…です？」

「敬語が苦手なら、無理に使うことはないですよ。私は気にしませんから」

「あ、そう。それじゃ、どうしてわかるの？」

明らかに敬語が苦手ですと言わんばかりのたどたどしい敬語を聞いて、無理に使わなくても良いとメドゥーサは言う。

それを聞いて、元は内心苦い思いをしていた。

少しは敬語の練習をさせたかった、一教師としては彼女の申し出は余り快くは無かった。

「元は強い人が好きですから…木乃香と菲は何となく分かります。多分、残りの生徒も何かしらの武をしてるのでしょう」

「確かに木乃香を除いて、他のメンツは明らかに強者って感じだね」

「でも、木乃香は猫にも負けるわよ？」

「明日菜…それって酷くない？」

「元は純粋な力…だけではなく、心とかそういう強さでも良いんです。（木乃香の魔力は膨大…下手すれば、元よりも）あと、変わり者も好きですね」

「なあ、明日菜。うちって変わっとなる？」

「木乃香が変人なら、世界中の全生き物が変態になるでしょ」

「それって、褒めてるん？」

「…要するに、元は見境が無いんですよ」

「…うわぁ…」

酷い言われようである。

周りの女生徒は明らかにドン引きである。

元も苦虫を噛み潰したような顔になってしまった。

「…それは酷くないか？」

「私に始まり、セイバーやミス・ブルー、なのは、はやて、フェイト、スバル…数えるのも馬鹿らしくなるほどに多くの女性を落としてきた貴方に言えますか？」

「落とすつもりは無かった…などと無責任な事を言うつもりはないが…。そう言われると確かに見境ないな」

「『『『（モテる発言）』』』」

「だが、遊びの気持ちなど一度も無かったぞ？」

「そうでしょうね…。確かに、見た目は悪くない、最強と言われるに相応しい力もある、経済力も10人や20人…何人だろうと養えるだけのモノはある、女性に対する心得もある、知識も豊富、人として男としての器もある…。元が本気をだせば、あの時の様な地獄絵図が出来上がりますね」

「落としてから、持ち上げるな。…だが、あの時か。自分の事ながら、あの時はどうかしてたな…。凜のせいだ」

あの時は災難だった。

特に女性の方々には多大な迷惑をかけてしまった。

「何人でも養えるだけの経済力…」

「見た目も悪くない…」

「知識が豊富…」

「（器が大きい）」

「強い…」

「『『『（あれ？弱点無くない？）』』』」

目の前にいる男と付き合っている彼女が言う…それには最真面目もあるのだが、明らかにべた褒めである。

だが、さしたる時間を彼と過ごしていない彼女たちにとっては彼女の言葉がある意味彼に対する評価の全てとなる。

「…俺はそこまで人間は出来てないさ。それに最強などとは縁遠い…それはお前が一番わかっているだろう」

「人間最強ですよ…貴方は」

古菲は最強とまで言われる彼に対する興味が更に上がった。

「（絶対、勝負してもらっネ）」

朝倉和美は質問の答えによって更に謎が増えた彼に興味を持った。

「（神堂先生…必ず、貴方の全てを暴く）」

近衛木乃香は美人さんにここまで言われる彼に驚いていた。

「（こんな男の人もおるんやなあ）。お父さんとお爺ちゃんも見習えばええのに）」

神楽坂明日菜はとんでも無い男が現れたと驚嘆していた。

「（でも、高畑先生に比べたら、渋さが足りないわね。哀愁みたいなのは、あるけど）」

相坂さよは静かに涙していた。

「（うう…折角気づいてくれた人にこんな美人な彼女さんがいたん

なんて…。私もあと10年遅れて死んでいけば…」

だが、彼女たちの心の内を見ることなど出来るはずも無く、元は彼女達の感想に気付かなかった。

「元…帰ったら、OHANASHIしましょう」

「断る」

第十一話 修羅場（後書き）

「どうした？今日はいつもにも増してグダグダな文章だが」

私生活で色々あるんですよ…色々とね……。

ああ、学校に隕石でも落ちねえかな。

「エクスカリバーならあるが？」

遠慮します。

「そう言えば、お前って中国語話せたんだな」

中国人と何時でもお付き合い出来るように…。

「不純だな。だから、時折間違いがあつたのか」

え、マジで？

「本気と書いて、マジだ」

第十二話 優れた才能

教師生活一日目も終わりを迎えようとしていた。

空は既に夕焼けの綺麗な朱色に染まっており、目の前には自らの得物を失った女がいる。

葛葉刀子…。

「わざわざお呼び立てしてすみません。葛葉女史」

「いえ…私の丁度仕事が終わったところですから…。それで何のようですか？」

その言葉の節々にはどこか刺々しく感じられるのは間違いでは無いだろう。

その理由は実に簡単だ。

葛葉女史との試合で俺が彼女の得物を叩き壊してしまったからだ。

「葛葉女史…。新しい得物はお持ちですか？」

「部屋にありますか？」

あれ以上のものは無いのだろう。

剣士にとって、刀とは自らの半身なのだろう。

そして、自らの鍛えてきた道、歩んできた道そのものと言ってもいいのかもしれない。

俺は剣士ではないが、その想いは想像がつく。

「俺が鍛えた…。お詫びという訳ではありませんが…これを受け取って貰えませんか」

そう言っ、彼は黒の映えるロングコートの中からひと振りの野太

刀を乗り出した。

彼女は俺の手から受け取った刀の刀身を鞘から引き抜き、その鋼を夕焼けの朱に染める。

「これは…私の。でも、違う」

何も無かった。

私の刀はあの時、目の前の彼に打ち破られた。

だから、この手に握られているハズがないのだ。

だが、この刀は余りに異色。

色が無い…。

鍛えられた刀というのは鍛冶の想いが少なからず、写る。

だが、この刀には無かった。

鍛えたはずの鍛冶の色も何も無い…まるで私にその身の全てを委ねる様に。

「無色の刀…銘は無い。だから、貴方に名前を付けて欲しい」

「…何故、これを私に？」

「言っただけです…。お詫びだと…だが、手は抜いていない」

俺が神秘の粹を集めて、創った無色のひと振り。

「無色故に真作にも贋作にも成りえる。だが、名刀のひと振りには違いない…それは保証しよう」

そのひと振りを上段から振り下ろす。

これが無色？

まるで、今まで私が握っていたように手に身体に馴染む。

「受け取ってもらえるか？」

「本当にいいのですか？」

「勿論だ…その為に鍛えた。昨日今日で出来るはずが無いというツッコミは受け付یکنからな」

「それでは有り難く頂きます…それと地が出てますよ」

「ぬ…」

「ふふ、敬語は必要ありません」

何だが、さきほどまでツンケンしていたのが馬鹿らしくなった。

彼はあの行為を恥じて、私に新しい刀を用意してくれた。

ハッキリ言つて、昨晚の彼には落ち度がない。

剣を砕かれたのも単純に私の剣の腕が彼よりも下だっただけである。そして、それを私は戦いの最中に理解してしまった…なのに私は剣を下げなかった。

「これは俺の我俣なのでな、気にせずそいつをドンドン使つてやつてくれ」

「その前に名前を付けないと…でしょ？」

「…ああ、そうだな」

彼はその言葉を最後に身を翻し、この場を去った。

太陽に背を向ける彼の背中は大きかった。

そうよね“朝風”…。

俺はこのまま家路に着くつもりだった。
だが、そうはいかないらしい。

「師父！与我決？？？！（師父！私と勝負ネ！）」

「ニンニン」

「……」

そこには古菲、長瀬楓がいた。
さて、どうするか。

選択肢は三つ。

1．了承する。

2．断る。

3．精神的に攻め立て潰す。

「…仕方無い」

1番でいいつう。

「感謝！（ありがとうアル！）」

「お時間お借りするでござる」

「気にするな…約束だしな。それで長瀬もやるのか？」

「今日は遠慮するでござる」

「そうか…それで場所は？」

「ここでもいいネ」

此処って…。

此処は家路に着くための近道になる木々が生い茂る雑木林である。

だが、俺たち三人を中心とした半径5メートルを楕円状にそこは草木が生えてなかった。

「ここは拙者の鍛錬場所でござる」

どうやら、俺がこれから毎日通ろうと思っていた道は長瀬の修行場所のようだ。

というか、今更だがこいつは本当に中学生か？

大河内アキラに龍宮真名、こいつに那波千鶴雪広あやかと高身長にスタイルの良さ…。

いや、スタイルだけを見れば3 - Aの生徒は殆ど平均以上だろう。ああ、凜が居なく本当に良かった。

「では、時間も惜しい…早速やろうか」

元はコートを脱ぎ、近くの木枝に掛けた後、首の骨を鳴らした。

「作？、古。（いくぞ、古）」

「是！（はい！）」

。

「ハッ！」

「ぬう！？」

始まりの合図は誰とも無く始まり、その先手は古がとった。その一撃は、数メートル離れた元まで一瞬で届き、彼の腕を掠めた。判断が遅ければ、その一撃は鳩尾に入っていたと思われる。

「（予備動作も無く、間合いに入っただと！？）チイ！！」
「アイヤー、避けられるとは思わなかったネ」

無拍子、縮地、いや闖歩か！？

「冗談ではない！」
「！！」

元は目の前の少女の年齢に不釣合な功夫に驚きを隠せず、その腕前に一瞬怯んでしまった自分に恥じた。

気持ちを持ち直し、地面を踏みしめた。

それは地面を揺るがし、目の前の少女を威嚇するに十分なものはずであった。

しかし、それは彼女には喜びの源でしかなかった。

「（震脚！何て見事な！！）最高アル！」
「いくぞ、古！」

元は縮地により、古の死角回り込み掌打を打ち込もうとしたが、それは同じく予備動作の無い動くで動いた古によって防がれた。

「フン！」

「——！？」

だが、彼の攻撃は止むことなく彼の上段蹴りが彼女を襲った。それを避ける事が出来なかった古は両腕でその蹴りを防ごうとしたが、如何せん体格差が大きすぎる。

攻撃力というのは、スピードと体重の乗じたものとなる。

恐らくは、元の半分近い体重しかない古には受け止める事など出来はしない。

「有效果…（効いたネ）「まだだ」！！」

木に叩き込まれた古まで一瞬で駆け込み、古の身体に掌打を打ち込んだ。

その一撃は強烈の一文字であつた。

「かはっ…！」

少女の瞳に映った者は、苦い顔をした副担任の顔と彼の背後から駆け寄って来る友の姿だった。

そして、その光景を最後に彼女の意識は途切れた。

「……」

ここまでとは思わなかった。

彼を初めて見たのは、今朝のHRでござった。

一目見て、分かった。

彼は間違いなく強者…それも拙者などとは比べ物にならない位の。でも、今彼と仕合っている古菲は体術と言う点で見れば、拙者よりも上である。

そんな彼女は去年のウルティマホラの優勝者である。

だから、彼女の一撃が初見の彼に避ける姿は驚いたのだ。

「冗談ではない！」

憤りというよりは自らの情けなさに対する怒りが感じられる彼の言葉と同時に地面が揺れた。

「（あれは確か…震脚という）」

楓はかつて古に見せてもらったことがあった。

その時は室内ということもあり、板張りの床が大きく軋んだことを

覚えていた。

だが、ここは外であり大地なのだ。

揺れるはずが無い。

だが、確かに揺れたのだ。

「かは……！」

驚きで視界が埋めつくされていた彼女は、友人の苦しみがこもった声を聞いて、現実を引き戻された。

古は木に叩きつけられており、その小さな身体の腹部には彼の掌打が打ち込まれていた。

「古……！」

気を失った友の下に全力で駆け寄った。

前に倒れ込んだ少女の身体を支えているのは、副担任で彼女を倒した神堂元である。

「神堂先生！」

「スマン……つい本気になってしまった」

元は恥じていた。

彼女の余りにも素晴らしい功夫に熱が入ってしまい、スイッチが入ってしまった。

とてもではないが、凜のなんちゃって八極拳とは次元が違った。

元は気を失っている古を背負い、楓に頭を下げた。

「すまんが、宿舎の彼女の部屋まで案内してくれないか」

「わかったでござる」

元はとても済まなそうだった。

故に、楓はそれ以上の事を元に言えなかった。

本当はかなり文句を言いたいのだろうが、本人が反省しているのであれば不要だと理解しているのだろう。

彼女は見た目同様に精神も歳不相応であった。

「それにしても、古は凄いな…。この歳でここまで功夫を極められるとは」

「そうでござるな。古の家は武道の名門なのでござる」

「武道の名門ねえ…。あの一瞬でも八卦掌に八極拳の動きが見えた…恐らくは他にも使えるのだろうが…。龍宮に桜咲、お前と3-Aの生徒は恐ろしいな」

「いやあゝ、そんなことはないでござるよ。拙者などより神堂先生の方が遥かに強そうでござる」

生きてる年月も命を掛けた戦場を渡り歩いた数も桁違いに違う。だから、彼女と元に明確な差が出るのは致し方ない。

「お前も強いんだろう？長瀬」

「どうでござろうか」

そう言つて、ケラケラと笑う長瀬の目には光が見えた。

彼女は糸目であるが故に、その光が大きな変化に見えた。

どうやらこの少女もバトルマニアのようである。

だが、ジャンキーでないだけマシだろう。

夕暮れから夜に成りかける空の下を気絶した少女を背負いながら、二人の男女が歩いているのは少し滑稽な光景だろう。

あの後、家に帰るとアグとハロがメドゥーサによって様々なコスプレをさせられており、目もないのに半ベそをかいていた。
何があった！？

第十三話 殺人鬼

「殺人鬼？」

朝起きて、朝食の準備をしていると唐突にメドゥーサから物騒な単語を聞いた。

どうやら、テレビの朝のニュース番組で特集をしているようだ。

「ハジメ。サツジン、サツジン」

「殺人鬼なのさ」

「どうやら、ここ麻帆良で起こっているみたいですよ」

麻帆良で殺人事件か…。

近衛老がこちらに報告が無いという事を鑑みれば、神秘関連ではないと見ていいのだろうが…。
なにやら嫌な感じがする。

「今月に入って、まだ数日だと言っのにな…何人目だ？」

「4人ですね」

随分とイキのいい奴だ。

だが成程…連続殺人事件か…。

恐らくは、今日にでも学園側から何らかの対処がされるだろうな。

例えば、生徒たちの下校時間の短縮とかな。

まさか、魔法先生が駆り出される事など有り得んと思うが…。

~~~~~。

「そのまさかじゃよ」

朝一番の早朝に神秘に関わる魔法先生、エヴァンジェリン、勿論ネギ君にも招集がかかった。

特にエヴァンジェリンは朝早くに起こされた事で大層機嫌が悪い。近衛老にガンをこれでもかという位に、くれている。

目の前にいる近衛老は今まで以上に警備を強化し、更には殺人鬼の搜索をもするというのだ。

「殺すぞ…?」

「な、何故じゃ!?」

神秘の隠匿は何処にいった?

言い方は悪いが、高々殺人鬼だ…魔法を使うなど言語強談だ。

「国家公務員に任せている。

というか、警察の領分だ…俺たちは大人しくしていればいいだろう」

「神堂先生! こういう時こそ我ら魔法使いの出番でしょう!!」

「ガンドルフィーニ先生、そういうことでは無いのです。

確かに人命は守らねばなりません…ですが、それと同等に神秘の隠匿も守らねばならないのです。

魔法先生を駆り出すという事は、それ相応に神秘を曝け出す機会も増える」

「ですが、魔法というのは「世のため、人のために使う」そうです! それこそが、我ら“マギステル・マギ”を目指す者の義務でしょう!」

マギステル・マギが…。

立派な魔法使いねえ…。

「だから何です?」

この場にいるマギステル・マギを目指している魔法先生とネギ君は元の言葉に驚きを隠せなかった。端的に彼は、目の前の人命よりも神秘の隠匿を重要視しろと言っているからだ。

「マギステル・マギ？くだらん…。  
無責任な正義など、そのオコジョにでも食らわせておけ」

ネギ君の肩の上には昨日までいなかったオコジョがいた。そう言えば、この世界で魔法に関わる犯罪を行うとオコジョになると聞いた。  
後で、確かめておくか…。

「神堂先生、無責任とは一体どういう意味ですか？」

葛葉刀子は冷静になって、元に言葉の意味を問う。  
一部の教師など、余りな元の言い方に怒りを覚え、肩がガクガクと震えている。

エヴァンジェリンなどは大層愉快そうに笑いを堪えている。

「文字通りの意味だ。」

仮に魔法が一般市民にバレたらネギ君はどうする、魔法使いとして」

「ぼ、ぼくですか…？」

えーと…記憶を消します」

「それこそが、無責任だと言っている。」

記憶とは、人が生きていく上に信じる指針であり、生きてきた証だ。それを一時の間とは言え、自分勝手な都合で消す。これを無責任を言わずして、何という？」

「「「「！！！！」」」」

神秘の隠匿がマニュアル化した弊害といえよう。  
それが当たり前の中で、彼の言葉は一同に衝撃と疑問を投げかける  
に十分なものだった。

「その方が安全だからか？」

危険がないから、記憶を消して改竄するか？」

「！！！」

その言葉にタカミチは顔を顰め、元を見ていた顔を下げた。

元はタカミチ個人に向けてかけた言葉では無いため、その彼の反応  
に気づけなかった。

「だからと言って、やたらめったら魔法に頼るなどと言うのも気に  
食わんがな。

その挙句に一般人に見られる、神秘を曝け出す。

その方が、みんなの役に立つから……などと言って。

魔法の危険性も理解できずに……愚の極みだ」

そう言つて、元はネギの顔を見る。

元が来る前のネギの行動は目を逸らしたくなるほどに酷かった。

だから、それを自覚している少年は羞恥心の余りに小さくなった。

「神堂先生……そこまでじゃ」

「ふん……」

「残念じゃが、これは決定事項じゃからの。

生徒たちの部活動は犯人が捕まるまで無し、下校も出来るだけ集団  
でするように先生方は朝のHRで伝えておいて欲しい」

こうして、各々に不満と疑念を覚えた朝の招集は終わった。

先生たちはHRまで時間があるため、一部の人間は一度家に帰るようである。

元はまだ何かを言いたげにしていたが、職員室に向かうために学園長室を出ていった。

廊下を歩いていると、後ろから聞いたことの無い声によって止められた。

「神堂先生」

「ん…？」

失礼ですが、何処かでお会いしましたか？」

「いいえ…。」

これが初めてですよ。

初めまして、明石裕奈の父で大学で教授をしています」

その男性は教え子の父親であった。

少し驚きであった。

明石の父が魔法先生だとは思わなかった。

まさか、彼女も“こちら側”なのか…？

「初めまして、神堂元です。」

3-Aの副担任をしています」

「娘から話を聞きました。」

知識が豊富で、授業もわかりやすい良い先生だと」

「とは言っても、まだ授業を一日…それもサポートしかしてないのですが」

「子供にはわかるのでしょうか…。」

良い先生か…。

悪くない響きだが、まだまだ未熟だ。

少なくとも、新田先生や源先生のようにはいかない。

「それで、どのようなご要件でしょうか？」

「そうですね…単刀直入で聞きます。

神堂先生は魔法をどのようにお考えですか？」

「…人間が生きていく上で必要がないと考えています」

数多の魔術師が目指した一つの到達点である魔法使いである神堂元がこのような発言をしたと知れば、多くの魔術師に顰蹙を買うこと間違いないだろう。

しかし、到達したからこそ理解したのだ。

「それは何故？」

「神秘に頼らずとも人は生きていくことが出来るから…」

それでは足りませんか？」

「しかし、魔法があれば多くの人を助ける事が出来ますが？」

「神秘に頼らねば、生きていく事が出来ない…ならばそれがその人の運命なのでしょう。」

マジステル・マギ…意味の無い言葉だとは思いませんか？」

「意味がない？」

「立派な魔法使い…」

少なくとも“立派な人間”でなければ成立しない言葉とは思いませんか？」

「——！？」

人間性のみでならず、行動、理念、生き方、認識全てがあってこそ  
の立派という言葉だと思っている。

「魔法で人の役に立てば、立派な魔法使い？」

ならば、魔法も使えずに多くの人の役に立つ人間は何だと言つので

す？」

「それは…」

「少なくとも、魔法に頼らずに生きていく事も出来ない人間を立派などと言うわけにはいきませんので…」

「それは私たち魔法先生やネギ君の事を言っていますか？」

目の前にいる明石教授がどのような人間かは解らない。

少なくとも俺に言葉の真意を聞きに来た点を見れば、魔法の危険性を知っていると思われる。

「それはどうでしょうか。」

まだ数日しか麻帆良にいないこの身ですから、ここの魔法先生がどのような人物の集まりか分かりません。

ですが、少なくとも近衛老とネギ君は立派からは程遠いと思いますね」

「そうですね。」

もう一つ聞きたいことがありますが良いでしょうか？」

まだ聞きたいことがあると元に問う。

それに元は頭を上下に振ることです承の意を伝える。

——魔法で人を殺したことがありますか——

「魔法で人を殺したことがありますか？」

それは余りに予想外な質問だった。  
だからだろうか、元は一瞬何を聞かれたか解らなかった。  
だが、数秒の後頭はクリアになり、言葉の意味を理解した。

「無論…両手の指でも足りません」

「——！！」

そうですか…その中に大切な人はいましたか？」

「……いますよ。」

初めて殺した人間が妹でしたから」

「！！！？」

なんのために神秘に触れたのか…妹を助けるため。  
その為だけに生きて、魔術を学び、全てを擲った。

「妹は脳死…植物人間という状態でしてね、科学の象徴たる医学では治療が不可能でした」

「ですが、それは魔法でも…」

「ええ… 勿論不可能でしょう。」

ですが、俺は最後の希望に… 神秘に縋り付いた。

科学でも具現できない現象を起こすことが出来る“魔法”に頼った…。

ですが、結末は…」

元は自らの頭を指差し、手をパーンと開いた。

「頭が破裂するという結果のみ」

「……」

「顔にこびり付いた脳髓が血の感触は今でも覚えています。」

俺は師の言葉を忘れていたのでしょうか」

「言葉ですか…？」

「魔法は死を容認することから始まる」

「死の容認…」

魔術は一言で言えば、危険なものである。

身に余る魔術はそれ相応の対価を取られる。

「自らの死だけなら安いものなのですが… そうではなく。」

隣の人死に、全くの他人死に、そして愛する人が死に…」

「それは分かります。」

私も魔法の事故で妻を失いましたから」

「ですが、（この世界の）殆どの魔法使いはそれを理解してない。只の道具と見ている。」

魔法が人に牙を向けないと？

神秘を人間が扱いきれると？

不可能です… 人間の知恵でははかり知ることのできないから神秘と呼ぶ」

「なら、何故君は魔法を今でも捨てないのですか？」

「目には目、歯には歯…。」

魔法には魔法を、魔法を使い人の尊厳を命を奪う人間から守るために…。

神でも無い只の人間が守る？

実に愚かで余りに自分勝手に傲慢な、どうしようも無い理由ですよ。マギステル・マギなどなるうとも思っていないですし、なりたいても思っていない…」

それを聞いた明石はどこか感心してしまった。

魔法使いの大半が目指す“マギステル・マギ”を下らない、成りたくなひと言う人間を初めて見た。

だが、彼こそが真のマギステル・マギの姿だと思った。

神秘の重要性、危険性を理解しているからこそ、先の招集であのよきな言葉を吐いたのだと。

そして、彼の言葉を受け入れてしまった。

「神堂先生…貴方は間違いなくマギステル・マギですよ」

その言葉を聞いて、元はそんな事は無いと小さく笑った。

「俺は本当の“正義の味方”を知っているから、そんな風には思えませんよ」

「本当の正義の味方？」

「見知らぬ9の為に、大切な1を切り捨てた…馬鹿な奴ですよ。」

自分の命すら感心が無く、捨てるように生きていった馬鹿な後輩を…。

戦って戦って戦い抜いて、世界の危機とやらを救った…。

その果てに最後は戦争の権化だと言って、守った人々に陥れられ、処刑された。

それでも、笑顔で死んでいった馬鹿をね」

寂しそうに語る彼の顔を見て、明石は何も言えなかった。  
だから、一度で良いから見てみたかった。  
そんな正義の味方がいるのか確かめたかった。

御伽噺にも出てこないような、“本当の正義の味方”というものを  
…。

「え」と…。

というわけで今日から暫く部活動はありませんので、皆さんは早く  
下校するようになしてくださいね」

「……はい……」

ネギは朝のHRで学園の決定を生徒たちに伝えていた。  
素直に元気よく返事をする生徒たちが、何だか可愛らしく感じて元  
は苦笑いをした。

「下校も出来るだけ、友達を帰るようにしてくれ」

「先生、授業は早く終わらないんですかあ？」

「終わらん…学生の本分は勉強だからな。」

残念だったな、佐々木」

佐々木まき絵の何とも学生らしい？質問に分かりきった答えを言う  
元。

一部の生徒はぶつぶつ言っているが、無視だ。

ふむ…一時限目は国語か。

ということとは、新田先生だな。

「しっかり勉強しろよ、特にバカレンジャー」

「分かってるわよ！」

…っていうか、何で知ってるの!？」

「朝倉が教えてくれた」

「朝倉あああ!!」

「ちよ、ちよと先生言わないでよ!」

「言っていたではないか。」

『学園公認の戦隊もの』だと…」

どうやら、本人は認めていないようだがな…。  
つと、ダメだな。

教師が生徒を貶める発言というのは。

「アイヤー、神堂先生ネ」

「…古か。」

昨日はすまなかつたな…それでどうした？  
もう下校時間だぞ」

そこには、12人の生徒がいた。

朝倉、椎名、綾瀬、宮崎、古、和泉、明石、早乙女、近衛、神楽坂、  
佐々木、早乙女。  
随分と大所帯だ。

「わかってるネ。」

これから帰るところネ」

「そうか…古がいるから問題は無いと思うが、気を付けて帰れよ。知らない人について行くなよ」

「うちら子供と違うんよ？」

「俺から見れば、まだまだ子供だよ」

頬を目一杯に膨らます、近衛の頭を優しく撫でてやる。

子供じゃないと言っている内は子供なんだと理解出来れば、大人だな。

「ばいばい先生」

「さようなら、和泉」

「それじゃあね」

「ああ、神楽坂」

「再見、師父！」

「再見、古」

「ばいばい先生」

「気を付けて帰れよ、佐々木」

「それじゃね、先生」

「お父上によろしく言っといてくれ、明石」

……

……

……

「神堂先生って案外心配性だよな」

「怖くないよ…怖くないね…」

「のどかは心配性ですね」

明石は見た目との意外なギャップを持つ神堂元という副担任の姿を思い出しながら、笑っていた。

「本当だよ。」

学園から寮まで案外距離があるからって、そんな不審者がでる訳無いよ」

「まきちゃんの言うとおりよ。」

寧ろ、そんな不審者が出たらクーフェがやっつけてくれるしね」

「私に任せるネ！」

そう言っつて、古は胸を張ってドーンを構えている。  
そこに朝倉が何かを訪ねた。

「そう言えばクーちゃん、昨日なにがあったのさ？」

「師父と勝負したネ」

「へえ、それでどうだったの？」

「完敗ネ。」

師父は強かったネ」

それを聞いて、一同は驚いた。

古といえば、ウルティマホラの優勝者である。

つまりは、学園最強である。

そんな彼女が完敗と言ったのだ。

「神堂先生って、そんなに強かったんかあ」

「クーちゃんの…功夫って言ったけ？」

それよりも凄かったの？」

「師父に比べれば、私の功夫はおママゴトのようネ…。  
鍛え直さなきゃ、いけないアル」

「それ以上強くなって、どうするの?」

椎名の問いに古はニツカリ笑って、

「もう一度、勝負を挑むアル!」

胸を張って言った。

それを見て、一同は何だか眩しく感じた。

桜通りは桜の木々が立ち並ぶことから、その名が付いた。

話をしながら、家路についていたため、空は夕暮れから夜に成りかけていた。

——いい月夜だ——

「え…?」

そんな中、この場には不釣り合いな男の声が響いた。

その声は何とも艶やかで冷め切っていて、

空は何時の間にか綺麗な夜。

綺麗な満月が彼をライトアップしていた。

「…だれ?」

その問いに答える者はいなく。

答えるべき男は答えず。

——殺しあうには最高の夜だ——

これから演劇が始まる前の舞台挨拶のように見える。  
惨劇と殺戮と惨殺の演劇が始まる。

——そうは思わないか？——

一同は煌々と蒼く輝く瞳と目があった。  
そして理解してしまった。

彼女たちは、私たちは…殺される。

## 第十四話 殺人貴

月の光で照らし出される桜並木。  
春の爽やかな風が頬を伝い、木々の花を程よく揺らす。

——いい月夜だ——

そして、ここは演劇の舞台。  
これから始まる演劇<sup>サツリク</sup>の舞台だ。  
主役はいない。  
ヒロインは12人：少し多いな。

——殺しあうには最高の夜だ——

ここにはヒーローがない。  
だから、ヒロインを守る騎士はいない。  
だから、彼女達はすべからず死を迎える。

——そうは思わないか？——

彼の瞳が蒼く煌めく。  
その先には12人の少女が彼の瞳を見て、身体が固まる。  
所詮は14、5歳の少女。

彼の蜘蛛の糸からは逃れられない。

「あ、あああ…」

「だ、大丈夫ですよ、のどか」

少女は余りの恐怖に腰を抜かした。

まだ彼は何もしていない。

彼の何処に恐怖を感じる場所がある？

手にあるナイフか、彼の言葉か、姿か…。  
全てだ。

「くーへ…」

「大丈夫アル、まき絵…。」

私が皆を守るアル」

「クーちゃん…」

なんとも気丈な言葉だろうか。

少女たちは、彼の歪さに恐怖を感じて動けないでいる。

だから、古が恐怖を感じてないのか？

そんなハズがない。

彼女の功夫が幾ら年不相応のものだからと言って、目の前の殺人鬼には通用しない。

それは、彼女の第六感が告げている。

——死になくなければ全力で逃げろ——

だが、目の前の少年は違う事を言った。

「このまま何もしないのなら、次におまえが瞬きをした間に殺すよ。  
だから、シッカリ戦え」

跳躍した。

一番近くにいる古までの距離を測った彼は、古の死角になるように低い体勢で跳んだ。

「——！！」

「遅い」

七ツ夜の刃が彼女を襲うが、それは彼女の反応速度で避けきれた。古は崩された体勢のまま、掌打による一撃を彼の腹に向け放つが、それは彼の蜘蛛のような跳躍で避けられる。

「…功夫か、それとも八極拳？」

有間の娘に比べれば、差は明確に君が上…。

「ただ、それだけだ」

「お嬢様ああああ！！」

「おっと…！！」

「せつちゃん！？」

頼りになる増援が彼の首に向かって、木々の間から現れた。だが、そんな奇襲も彼には当たらず、彼は数メートル後ろに下がる形で避けた。

「お嬢様、ご無事で！」

「う、うん…うちは大丈夫や」

「へえ…また、随分と生きの良いのが来たも…！？」

彼は桜咲の姿を視認した瞬間動きを止めた。その顔は何とも、嬉しそうな、狂喜に満ちていた。

「お嬢様方は早く此処から…！」

「で、でも刹那さんは」

「私は大丈夫ですから、それに先生方も直ぐに来ます」

「ああ…見つけた」

「——！」

「君は魔を孕んでいるな」

「…！？」

「仕方無い、ここからは七夜として退魔に移るか…」

「純粹な殺し合いが出来ないのは残念だが」

「な…」

——閃鞘・七夜——

彼女と彼は一直線の空間。

予備動作もなく最高速へ達する。

一直線にあつた空間を一瞬で通過する…終点は少女。

推進力をそのままに、狙った少女の胸。

体側から横なぎに真つ二つに斬る。

「くう…！！！」

「へえ…」

だが、それは夕風によって防がれる。

それは命の反射に近い動作だったが、確かに彼女の命は彼の刃から守れた。

「ハアアアア！！！」

「——！！！」

まさか、抑えられるとは思わなかった彼は一瞬の動作を止めてしまった。

そこに横腹を貫く強烈な一撃が古から放たれた。  
今度は避けられなかった。

大きく飛ばされた彼は地面に無様に叩きつけられることなく、宙で一回転して綺麗に着地を決めた。

未だに動けないでいる少女達は彼の余りに見事な動きに目を奪われた。

「はあ…情けない俺」

「…」

「こんなのが最高の殺人鬼か？  
こんなじゃ、あの男に笑われる」

古の一撃を何ともないようである。

その一撃の瞬間、彼は大きく後ろに跳んだのだ。

勢いと衝撃を完全には殺しきれないが、大半が殺せた。

たっぷりを間をとって、彼はため息を吐いた。

「悪かった」

「え…」

「ダメだな…これでは君達に失礼だ」

彼は蜘蛛のように体勢を落とし、言葉を紡いだ。

「その魂、極彩と散るがいい。」

毒々しい輝きならば、誘蛾の役割は果たせるだろう」

「――！！」

――閃鞘・八点衝――

地面を蹴り抜き、一瞬で2人の前まで到達した。

目指すは剣士の少女。

腕の範囲から七ツ夜で斜め上から斜め下にかけて連続で切りつける。余りのスピードに彼女は満足の行く受けが出来ず、その身体に幾つか切り傷が出来る。

「くううう！」

「せつちゃん！！」

「ハッ！！」

「次は君だ……」

「！？」

――閃走・六兎――

明らかに人間の身体を無視した動きで大きく飛び上がり、古の剛拳を避ける。

そのまま、後ろ蹴りを彼女の顔面向かって蹴り放つ。

直撃こそ無くとも、彼の一撃は確実に彼女に届き、古は咄嗟に右腕を出し受ける。

だが、その蹴りは余りに強烈で彼女は地に付く足を支点に地面に頭を叩き付けられる。

「きゃうー！！」

「くーちゃん！？」

彼は一瞬で2人を蹴散らした。

そして、刃に付いた桜咲の血をなぞる。

退魔の血が疼くのか…、それとも殺人鬼としての血が疼くのか。

彼は楽しそうに静かに笑い、ナイフを2人の少女に向け振り下ろす。

「運が良かったな。

大凶にあたるなんて、選ばれた人間の証だよ…。

だから、素直に死んで「殺らせん」…来たか」

「先生…？」

彼の腕は男に止められ、彼は待ちわびていた恋人に出会った様な感慨深い声を出した。

「…！」

「おおっと!!」

元は掴んだ腕を力任せに少女達からは反対の方向に投げた。

「メドウーサ…こいつらを頼む。

ついでに桜咲を医務室に連れていってくれ」

「殺人貴ですか…ご武運を」

「神堂先生、気を付けてください！

彼は「知っている」え…？」

ああ…俺はこいつを知っている。

忘れられるハズがない。

鮮烈で華麗で何とも危うい青年を。

「皆さん、ここは元に任せて行きましょう」

「は、はい！」

「刹那さん、立てる！？」

「だ、大丈夫です」

「くーちゃん！！」

「アイヤー…地球が回るネ」

「地球は回ってるよ！？」

何とも慌ただしく、少女達はお互いに手を取りながら学園に向かって走り去った。

だが、その間も元は目の前の青年から目を離さなかった。

…違う、離せなかったのだ。

この男の前では、例え瞬きですらタブーだ。

「久しいな遠野…いや、貴様は七夜だな？」

「ああそうだよ。」

調整者、神堂元…元氣そうで何よりだ」

「何故、貴様が此処にいる？」

「分かっているんだろ？」

だったら聞くな…無意味だ」

やはりバグか…。

何とも危険なバグだ…。

「だが、直死を持っていないだけマシか…。

だが、あいつ等も良くもったものだ…殺人貴相手に」

「直死か…それも可能かな」

「何だと…？」

どういう意味「分かっているんだろっ？」…タタリか」

だが、だとすれば疑問が出る。

タタリがバグでいるのは別段驚かない。

だが、何故殺人貴がカタチになる。

この世界ではコイツを知っているのは俺とメドゥーサのみ。

「ここ最近の殺しは俺じゃ無いと言えは解るだろ？」

「…成程、貴様は俺か」

「そういうことだね」

朝のニュースで俺が抱いた恐怖のカタチをカタチにしたか…。

つまりは生後1日か…。

だが、そのスペックは十全。

「俺が直死という恐怖を同時に抱いていれば、貴様は浄眼ではなく直死の魔眼になっていたというわけか。

今日は満月…タタリがカタチにならないのは恐怖が足りないからだな？」

「そこまで分かっているならば、後は…」

七夜は楽しそうに笑いながら、演劇の第二幕を告げた。

——存分に殺し合おう——

少女達は走っていた。

目指すは学園。

刹那と古はメドゥーサに背負われていた。

「ねえ！

神堂先生は大丈夫なの！？」

「心配はありません。

彼はかつて、彼に勝っていますから」

「知り合い…？」

「残念ながら…」

少女達は殺人鬼が知り合いにいる副担任が解らなくなった。  
一体、どんな人生を送れば殺人鬼と知り合えるのだろうか…。

「刹那」

「な、なんでしょう」

「七夜という退魔…家名に覚えはありますか？」

「七夜…？」

いえ、ありませんが…それがあの男の名前ですか」

「知らないのならば良いです」

世界の裏を知る刹那が七夜を知らない…。

恐らくは彼がバグ…それも、バグから生まれたバグ。

バグとはいえ、今日昨日生まれる訳ではない。

七夜という家が無ければ、殺人貴は生まれない。

となれば…。

「（タタリですか…）。

恐らく、今朝のニュースで私が思い浮かべたのが原因でしょう。

死徒27祖が出張してくるとは…かなり厄介ですね」

メドゥーサは走りながら、空を見上げる。

今宵は満月。

だが、タタリは出てきていない。

「（恐怖が足りないのでしょうか…）」

状況を冷静に分析出来る彼女は自らが愛する男が殺人貴如きに負けるはずはない。

直死の魔眼は持っていない。

でなければ、少女達は間違いなく肉片になっていたから。

「（とは言え、私たちが到着するまで良く持たせました）」

メドゥーサは同時に感心していた。

確かに、刹那は年不相応の剣技を身に付けている。

とは言え、彼相手に持たせるなど出来るはずもない。

となれば、古もかなりの腕前なのでしょう…。

「（それでも、敵うはずがない…殺人貴が遊んでいた？  
まさか…ありえませんか。  
だったら、元を待っていた？）」

少女達は全力で走っていた。

暗闇を走り抜けると、そこには見慣れた校門があった。

「すいませんが、刹那を宜しく願いします」

「え…？」

何処に行くんですか？」

「元の下…その必要はありませんね」

「「「「「？？」」「」「」

「終わっていたようです」

メドゥーサの視線の先には此方に走ってくる男の姿があった。  
その男は少女達が授業で見ている副担任だった。

「この程度ではあるまい！」

「チッ！」

やっぱり、アンタの相手は疲れる！」

左手の義手がナイフをいなす。

桜通りには金属音が鳴り響いていた。

——キンッ

——キンッ

——ガキンッ

「おっと！」

「ハッ！」

不意打ちのアンカーが彼の胸元に向かって放たれる。

それを七ツ夜で弾き、大きく後ろに跳躍し、距離を取る。

「何故本気を出さん」

「いやはや…こっちは本気なんだが。」

まあ、タタリが恐怖を溜め込んでいないからじゃないか？」

「そうか…。」

ならば、I am flickered」

手には弓と深紅の剣。  
剣を弓に添え、力強く弦を引く。

「骨子は捻じ狂い…」

「ああ…なんて無様だ」

フルンティング  
—— 赤原獵犬 ——

獵犬の名を冠する剣は矢のように骨子を捻じ狂わせ、彼の身体を撃ち抜いた。

「ガッ！

…… ああ、今回は大人しくこのまま無残に千切れて消えるさ。

それじゃあ、また会おう」

「もう会いたく無いがな…」

霞のように消えていく彼の身体の在った場所は月夜の光で照らされるだけだった。

まるで幻…。

「七夜志貴…殺人貴か。

また来るんだろうな…直死の魔眼をこさえてさ」

元は学園に向かって、走り去った生徒たちを追いかけるため、強化を足に施した。

走り去った後の桜通りでは桜が寂しそうにサワサワと風に吹かれていた。

—— カット ——



## 第十五話 早過ぎる告白

裕奈「神堂先生！」

桜子「神堂先生、無事だったの!？」

元「ああ…問題ない。

潰したとは言え、逃がしたがな…「皆、無事かい!？」高畑先生か…」

明日菜「高畑先生！」

学園前に次々と見回りに散らばっていた魔法先生が集まってきた。その中には一部の魔法生徒もいた。

タカミチ「明日菜くん！」

良かった、怪我はないみたいだね」

元「それでも無い…桜咲が手傷を負った」

ガンドル「なっ！」

犯人はどうしたのです!？」

元「一応潰したが逃がしてしまった」

などと言いながら、元はタカミチ達魔法先生の下に近づき、彼らにしか聞こえない音量の声で語りかけた。

元「（魔法先生全員を招集してくれ…あと、警備配置に就いている

魔法生徒と裏の人間もだ…」

タカミチ「(…!!」

つまりは、それだけ不味いことが起きたと?)」

元「(残念ながら…魔法に頼らざる負えない状況になった)」

タカミチ「(ネギ君も呼んだ方がいいかい?)」

元「(いや、あのガキはいい…どうせ見回りにも出んからな)」

元は必要事項だけを伝えたと、刹那の下に歩み寄った。  
片膝を突き、傷口の具合を確かめる。

元「痛みはあるな…?」

刹那「はい…心配かけてすみません」

元「気にするな。

お前は良くやった…それに古も良くもたせた」

古「でも…完敗ネ」

結果からみればそうなるが、元はそう思わなかった。

七夜のソレは殺人術の中でも暗殺に特化し、人外を殺すためのモノ  
なのだ。

それを武術最強を呼ばれる八極拳や形意拳、八卦掌を使えるとは言  
え、まだ少女なのだ。

もし、彼女の立場に当時中学生の元が居れば、一蹴とまでは言えな  
いが、確実に体を切り刻まれていただろう。

元「いや、見事だ…」

古「でも、悔しいネ…」

少女の瞳から頬にかけては一筋の雫が流れていた。  
だが、少女は笑っている。

それは何とも痛々しく、元の心を攪った。

古「え…師父…？」

和美「これはスクープ…「朝倉、空気読もうね」はい…」

明石「（うゝん…これじゃ、誑しって言われても文句は言えないよね）」

元は古の小さな身体を優しく抱きしめた。

それは異性にするようなモノではなく…父が娘にする抱擁と似ていた。

元「その気持ちがあれば、君はもっと強くなれる。

だから、今はゆっくり休め…」

古「是…（はい…）」

元は彼女から離れ、頬の涙を指で拭った。

そして、笑顔でこう言った。

元「古は美人の女の子だから、涙より笑顔が似合う」

古「え…」

一同「……」（何を！？）「……」

元「因、我想笑容和？相配。（だから、笑顔でいいと思う）」

古「……？？可以？？（……こうかな？）」

少女は自らの頬を指で持ち上げて、笑顔で笑う。

ああ…それで良い。

本当にいい笑顔だ…。

元は古の頭を優しく撫せて、刹那に近づき彼女を背負った。

元「桜咲の傷は深くないからな…それに切り口も綺麗だ。

痕は残らないと思う」

刹那「何から何まで…」

元「先生だからな…気にするな。

（少し、話がある…先の話だ）」

刹那「——！！」

（わかりました）あの、私は怪我の治療に向かいますから、皆さんは先に帰っていて下さい」

ハルナ「でも、大丈夫なの？」

刹那「はい、大丈夫ですので…。

神堂先生も仰っておりますが、幸か不幸か切り傷も綺麗ですので」

木乃香「せっちゃん…」

刹那「……」

刹那は木乃香の言葉から目を逸らすように元の首元に視線を落とした。

元は刹那の態度に疑問を抱いた。

一体なにが在った？

確かに、この二日間で2人が仲良くしている所を見たことは無いが、この態度はあまりな反応であった。

最初は喧嘩でもしているのか思ったが、どうやら違うらしい。

元「（まさか…魔の血が関係しているのか？）」

近衛の家系は神秘に関わりながらも、本人の近衛木乃香は神秘の存在を知らない。

だが、桜咲は神秘に関わるものだ…。

成程…大体読めてきた。

元「近衛、刹那も疲れているんだろう。

それにスツカリ夜だ…。

メドゥーサ、彼女達を寮まで送っていつてくれ（その後、学園長室まで来てくれ）」

メドゥーサ「わかりました（少し面倒な事になりそうですね）」

元は苦笑いで同意の意を返した。

刹那を心配しながらも、渋々とメドゥーサに引き連れて少女達は帰っていく。

夕映「そういえば、のどかと和泉さんは静かでしたね…って」

のどか「……」

亜子「……」

夕映「…気絶してたですか」

近衛「まずは、御苦労じゃった神堂先生」

神堂「いや、悲鳴が聞こえた先に彼女たちがいただけだからな…。それに、ギリギリ間に合わなかった」

元は学園長室のソファで治癒魔法を受けている刹那の姿に目やる。

こういう時は確かに魔法は便利だと感じるが…。

全く、俺もフラフラと軟派だな。

そして、学園長室にはエヴァンジェリンとメドゥーサを除いた、警備についている学生と魔法先生が一堂に会している。

タカミチ「それで、犯人はどんな人間だったんだい？

刹那くんだけでなく、古くんまでも一蹴する人物は」

ガンドル「まさか、西の！？」

元「西…？」

元は初めて出てきた単語に疑問が生まれた。

どうやら、彼等にとっては当たり前のことのようなだが、神堂元は新参者だ。

警備にもまだ顔を出していない。

明石「神堂先生、西とは関西呪術協会のことです」

関西呪術協会。

それは文字通り、関西に本拠をもつ日本を大きく二つに分ける神秘を司る巨大組織である。

そして、関西呪術協会は関東魔法協会…つまりは麻帆良に本拠地を置く、近衛老が長を務める組織と最悪に仲が悪いのだそうだ。

今までも、西からの侵入者は毎日のように襲撃を繰り返しており、その被害は案外馬鹿に出来ない程である。

元「…成程。」

だが、残念ながら関西呪術協会とやらではない。  
もっと、面倒かつ危険なものだ」

エヴァほお…貴様がそこまで言うか」

そこに重役出勤のように入ってきた吸血鬼。

その後ろには少女の首根っこを掴むようにして立っているメドゥーサ。

重役出勤からは程遠かった。

元「何をしているメドゥーサ…」

メドゥーサ「扉の前でちよろちよろしてましたから…捕まえてきました」

元「…そうか」

そんな事しか言えない自らのボキャブラリーの無さを寂しく思った元であった。

元「さて…これで役者は全員揃ったかな」

メドゥーサ「元…」

メドゥーサの呼びかけに頷き、近衛老に向き合う。

その顔は何時にも増して真剣なモノであり、事態の危険性を物語っていた。

目は口ほどに物を言うと言う…それを体現出来る人間は限られているが、神堂元という人間は基本、口より態度で示すタイプの人間である。

元「近衛老、俺とメドウーサの事を言わねばならん時が来た」

近衛「ふぉ…!？」

随分と早いことじゃ…じゃが、それ程面倒な事が起きておるのじやな？」

元「残念ながら」

元と近衛老の会話についていけてるのは、エヴァンジェリンとメドウーサ、タカミチだけである。

それ故に周りの人間は頭に疑問符を浮かべている。  
彼等の事が殺人鬼に一体どのような関係があるのか。

葛葉「学園長、彼等の事とは？」

近衛「うむ…それは本人の口から告げられるじやろつ。  
そつじやろ？」

元「…まず、最初に言っておく。

俺とメドウーサはこの世界の人間ではない」

余りに早すぎた告白であった。

元から語られる衝撃の事実。

元とメドゥーサはこの場にいる全員に近衛老達にした同じ説明をした。

彼等は別世界の人間だと。

魔法世界ではなく、完全な並行異世界であること。

証拠として、神話の英雄が持ちし聖剣を創造した。

そして、彼等が使うものは魔法ではなく魔術というのかもしれない。

魔術の説明、魔術師にとっての魔法。

その力を使い、エヴァンジェリンにかけられた呪いを解除したこと。無論、その間も様々な疑問の声も上がった。

そして、エヴァンジェリンの呪いを解いたことを言った瞬間、多くの人間から顰蹙を買った。

ガンドル「何故、そんな事をした！！」

瀬流彦「あまりに浅はかな行動では？」

葛葉「そうです！

あまりに危険すぎます！！」

元「本当にそう思うか？

彼女は本来、この麻帆良には3年間しか居ないはずだった…。  
その約束を破ったのは貴様らの言う英雄だぞ？

ならば、彼女には既に自由となる権利がある」

ガンドル「吸血鬼に自由など！

本気で言っているのですか！？」

元「吸血鬼だろうと、権利はある」

エヴァ「元……」

メドゥーサ「自由に生きた。

幸せに、ただ生きていたい…。

誰にそれを否定する権利があるのです？」

ガンドル「だ、だが…」

メドゥーサ「誰にもそんな権利はありません。

例え…それがかつて多くの人間を殺した吸血鬼だろうと、なんだろうと。

貴方は神ではないのですよ」

一同「……」

元「それに彼女は俺と約束した…少なくとも高校卒業までは麻帆良

にいます。

忠告もした…馬鹿な行動にできれば、俺が殺すとも」

エヴァ「……」

式集院「神堂先生なら、彼女を殺せると？

真祖の吸血鬼を、不老不死の吸血鬼を、闇の福音を！」

元「可能だ…手こずるやもしれんが、俺はこいつを殺せる」

そう言う彼の瞳は嘘偽り無い、自信に満ちた確かなものだった。  
それを見た以上、それ以上の事を彼等には言うことが出来なかった。

真名「それで、殺人鬼というのはどんな存在だったんだい？

聞くところによると、神堂先生は魔法先生がこの件に乗り出すは否定的だと聞いたが…」

元「耳が早いな…。

確かに最初はそう言った…だが、事態は面倒な方向に進んでいるよ  
うなのでな。

残念だが、魔法使いに出てきてもらう他無い」

葛葉「それは、刹那が怪我をしたことと関係が？」

元「直接の関係は無い…とも言えないな」

何とも不明瞭な元の言葉に一同は怪訝な表情を示す。

今までの彼の物言いはキツパリと言い切るものだったからだ。

元「先も言ったが、俺とメドゥーサは別世界の人間だと言ったな？」

タカミチ「まさか、その殺人鬼も？」

一同「……なっ…！」「……」

何と説明すれば良いのか…。

元が思案していると、メドゥーサが彼の代わりに説明を始めた。

メドゥーサ「私たちの世界にも吸血鬼というのが存在しました…。

ですが、その存在はこの世界の吸血鬼とは比べ物にならない程危険  
です。

エヴァンジェリンには以前説明しましたね？」

エヴァ「確か、お前らにとっての真祖は人間を抑止する存在だったな…」

メドゥーサ「そうです」

人間の抑止…そんな言葉に一同は明らかに分かっていないような顔をしている。

元「世界を見れば分かると思うが、有史以来…人間は世界の多くの場所に散らばり木々を切り倒し、数々の文明を気づいてきた。そして、科学を発展させ、大気を水を大地を汚染してきた」

一同「……」

元「故に世界は人間に対して危機感を抱いた。

世界にとって、人間はウィルスなんだ…人間が癌になれば、手術で癌腫瘍を取り除くだろ？」

明石「成程…つまりは、世界が身体で真祖が医者、人間が癌細胞という訳だね」

元「そうです…本来の真祖は増えすぎた人間を減らし、世界に対する負担を軽減するために存在していた」

明石「本来？

今は違うと？」

元「吸血鬼も感情がある…それが世界の触覚たる真祖でもな。奴らにとって人間の血は何とも甘美な美酒なのだそうだ…」

多くの真祖が血に溺れた…堕ちた真祖は魔王と呼ばれた」

刹那「魔王…」

元「世界のバックアップを受け、吸血衝動を抑えるのに力の大半を使っている真祖が吸血衝動を抑えなければ…その力は魔王に相応しい」

メドゥーサ「そして、彼等に血を吸われたものは死者となり、一定期間の時をおいて、自我を持つ死徒と呼ばれる存在となります。そして、死徒の中でも最も強く古くから存在する存在を“死徒二十七祖”と呼びました」

元「死徒二十七祖…中には魔術師上がりの連中もいるが、大抵はそうだ」

高音「魔法使いが自ら望んで吸血鬼になると!？」

彼女のように、立派な魔法使いを目指す人間から見ればあまりに馬鹿げた話だろうが、残念ながら事実だ。

元「魔法使いではなく、魔術師な。」

とは言え、魔法使いも一人二十七に名を連ねているが…。

魔術師というのは自分本位な人間でな、神秘を目的として神秘を扱っている…解らないと思うから、流してくれても構わない。

根源にたどり着くために、永遠を手に入れるために…理由は様々だが、そうして魔術的儀式で自ら使徒となる」

高音「自分の私利私欲の為ですか…」

元「そうだ…そして、今日起きた事件の犯人はその死徒二十七祖だ」

一同「「「「なっ…!!?」」」」

元「ワラキアの夜とか呼ばれる死徒だ」

エヴァ「ワラキア…確かルーマニア南部の地方名だったな」

元「よく知っているな、そのワラキアで間違いない。

ワラキアで初めて確認された事から、その名が付いた」

元はそう言って、良くできましたといった感じにエヴァンジェリン

の頭を撫でてやった。

エヴァ「ええい！

子供扱いするな！

それで、その死徒はどんな死徒なんだ！」

もともとはズエピア・エルトナム・オベローンという名前の錬金術師であつた。

五百年近く前のアトラス院で院長を務めた近代稀に見る天才錬金術師である。

元「そして、彼が死徒に身を堕とした原因である、未来を求めるという過程で初代のアトロシアがたどり着いてしまった未来」

タカミチ「天才が我を見失う程の未来……それは一体？」

元「人類滅亡……それが確定事項であつたことだ」

一同「……——！！」「……」

元「だから、彼も未来を求めた。

その未来に抗おうと、数年、数十年と只々愚直に数多の策を講じた。それを実行に移すも、尽く失敗……そしてより悲惨な未来を叩き付けられた」

エヴァ「当たり前だ……どんな生き物でも終わりはある。

それが人間だろうとだ」

元「その通りだ。

恐らくはこの世界でも数千年後には人類はこの地球上には居ないだ

ろう…だが、彼はそれを認められなかった」

覆す方法を模索し続けるもその度に“より明確な滅亡”という計算結果を見せつけられる。

元「未来を求めたアトラス院の錬金術師はその結果に例外なく発狂し、心が壊れた。

それはズエピア・エルトナム・オベローンという天才の名を欲しいがままにした彼も同様だった」

一同「……」

元「それ故に死徒に身を堕とし、第六法に挑んだ。

世界に革新的な変化をもたらすと呼ばれている、未だに担い手が現れていない第六の魔法に…だが、敗北した」

肉体は消滅し、身体を構築していた霊子が霧散した。

だが、それ以前に完成させた“タタリの駆動式”と“霊子の航海図”にアルトルージュ・ブリュンスタッドと交わした“契約”等多数の保険により、意識も記憶も関係なく霊子たちを留めて置くことに成功した。

元「俺からしてみれば余りにご都合主義と言えるが、天才のアイツから見ればそれも計算通りだったのかもしれない。

そして、奴は物体というカタチから現象というカタチになった」

刹那「現象ですか…」

今の奴は“特定の時間と地域に固有結界タタリを展開する現象”だ。

葛葉「タタリというのはあの祟りでいいのですか？」

元「その祟りで間違いない。

“人々の噂や不安を元にソレを様々なカタチで具現化する”…それが奴の固有結界だ」

エヴァ「つまり、ここ最近の殺人事件はそのワラキアの夜によるものではなく、全くの別物…。

そして、その不安を下に今日の殺人鬼をカタチにしたというわけか…」

近衛「ふむ…それで彼奴の目的は魔法なんじゃろ？

ただ、人を襲うだけでは“魔法”にはたどり着けんと思うんじゃが」

元「奴は人の不安を下にカタチになる。

そして、より大きく多くの恐怖を集め力を蓄え、アルクエイド…真祖の身体を手に入れ第六法に挑む…。

この世界に彼女はいないことから鑑みても」

メドゥーサ「麻帆良に現れたことを考えても恐らく…」

エヴァ「うん？

何だ、こつちを見て…」

2人は美しいブロンドの吸血鬼の少女を見る。

タカミチ「もしかして…目的はエヴァかい？」

エヴァ「え！？」

元「恐らくはな…」

一同「「「「何iiiiiiii!?!?」「」」」」

タタリとして虐殺を行ないつつ、強大な存在である真祖の肉体を得て再び第六法に挑む。

それが、奴の目的だ。

だが、この世界には奴の求める真祖は居ない。

だが、別の真祖はいる。

元「エヴァンジェリンの肉体で第六法に勝てるかは解らんが、恐らくは間違い無いだろう」

メドゥーサ「もしくは、元か」

刹那「え!?!?」

メドゥーサ「元は第一から六の魔法に当てはまらない異端の魔法使いですから…ですが、元と彼女のリスクを見ればエヴァンジェリンでしょうね」

エヴァ「ふん！

死徒二十七祖だが、なんだか知らんがおも「間違っても勝とうなどと思うなよ」何故だ!?!」

元「先も言ったが、奴は現象だ…殺すことなど出来ん。お前は風が吹くという現象を殺すことが出来るか?」

エヴァ「出来るか…って、ならどうするんだ? 私に大人しく殺されると?」

タカミチ「待ってくれ、なら前回はどうやって彼を撃退したんだい？」

元「前回…つまり、前の世界で奴を殺したのは俺ではない。

俺は真祖と奴の子孫と共に援護に回ったに過ぎん。

奴を殺したのは魔術師でもない、吸血鬼でも、死徒でもない、魔眼を持つているだけの只の人間だ」

真名「魔眼？

それは一体どんなモノなんだい？」

元「直死の魔眼…この世全てのモノを殺せる目だ。

有機、無機、不死、世界、神…存在するなら現象だろうと何だろうと殺せる目だ」

一同「……！！！！」

元「今回、奴がカタチにしたものは殺人鬼という噂と俺とメドゥーサの不安を下にカタチ作った殺人貴だ。

名は七夜志貴…退魔の家系に生まれた最高の殺人鬼だ。

真祖にすら“ただの人間の中では最強”とまで言われた存在だ」

剎那「…（退魔…だから、あの時彼は私に）」

メドゥーサ「そして、直死の持ち主のもう一つの可能性でもありません」

葛葉「可能性…？」

遺伝として超能力を継承している七夜一族の当主である七夜黄理の長男として生まれた。

近衛「超能力？」

魔法や魔術とは違うのかの？」

元「ヒトがヒトのまま持つ特異能力の事をいう。

本来は一代限りの突然変異のようなものだが、七夜の家系では血を薄めない為に、超能力を維持するために近親相姦で血を繋いでいた」

近衛「近親相姦のお…確かに大昔まではそんな事も行われておった

が、現代でもそんな事をしておるとはのお…」

だが、そうはならない。

彼が6歳の時に七夜殲滅が行なわれ、一族を皆殺しにされた。

葛葉「何故です？」

七夜は退魔という、人を守るものなのでしょう？」

元「過程は分かんが、撲滅を行なったのは魔との混血の家系である遠野という家だ。

恐らくは、七夜黄理の力に七夜の力に恐怖したのだろうさ…何時、自分たちが殺されるかという強迫観念に襲われてな」

それにより、父は遠野に雇われた軋間紅摩との交戦で死亡し、母も志貴を庇って殺された。

志貴自身も母を殺したものに胸を穿たれ、最初の臨死を体験した。

元「そして、志貴少年は遠野の当主の気まぐれで引き取られ、七夜志貴から遠野志貴になった。

だが、その後再び彼は臨死を体験し、死を理解してしまった」

エヴァ「生きている人間が死を理解？

そんな事が可能なのか？」

元「無理だ。

コインの表が裏を見ようとしても見れないのと同じで本来は不可能なはずだった。

しかし、彼は理解してしまった。

そして、遠野志貴は直死の魔眼を手に入れてしまった…本来彼が持つ浄眼という退魔の魔眼では無く、異端の魔眼を…」

その後も色々あったが、遠野志貴は反転した自分自身“七夜志貴”に対する恐れや不安があった。

彼には類い稀なる殺人技能と殺人衝動があった。

元「それを前の世界のタタリはカタチにした…。

だが、その志貴は遠野ではなく七夜だったからな…直死を持つてはいなかった。

だからと言って良いのものが解らんが、そのおかげで刹那達は生きていられた訳だが」

メドゥーサ「元もしくはエヴァンジェリンを待っていた可能性もあります」

元「今回はまだ恐怖のカタチが不明瞭なこともあったせいか、タタリの力も不十分だった。

だから、七夜を簡単に撃退できた。

だが、出来だけ早くにその殺人鬼を捕まえないと奴も力を手にしてしまう」

近衛「成程のお…やはり、我らも犯人探しに出るしかないかの」

元「俺はエヴァンジェリンの警護、メドゥーサは学園から寮までの道のりの見回りで動けんが…魔法先生の方々にはお願いしたい。

そして、魔法生徒は警備から外れて欲しい」

高音「何故です!?

私たちも「話を聞いてなかったのか」…ですが」

元「タタリは不安と恐怖を形にする…今回俺が七夜を目にしてしまった瞬間、直死が頭から離れん」

明石「つまり、次七夜が現れたら、その直死の魔眼を持っている可能性がある？」

その可能性は高かった。

人間として最高クラスの戦闘能力をもつ七夜に直死の魔眼が手に入れば…。

想像もしたくない。

だが、奴はそんな俺とメドゥーサの恐怖をもとに力を蓄える。

元「直死は魔法も殺せる。

魔法だろつと何だろつと、奴が視認してしまえば、それは殺される。次も七夜が現れるか解らが、今回奴を撃退したから少しの間は奴も出てこれんだろう…。

だが、奴がどんな恐怖をカタチにするか分からん」

近衛「つまり、今まで以上に警備に力をいれんとならんか…。  
人手が足りんのお」

元「タタリの力が最大になるのは満月の夜…今日がそうだから、次は5月10日、6月10日…その日がタタリとの最終決戦だ」

今宵は4月10日…。

満月が煌めく夜がタタリの力が満ちる日だ。

さて…どうなることやら。



## 第十五話 早過ぎる告白（後書き）

書き方が一々変わりますが、感想から様々な意見があります。

なので、登場人物のセリフの前に名前をいれた方がいいか、入れない方がいいか…。

良ければ、感想というカタチで送って頂けたら幸いです。

また、以前に『この子は元に惚れさせてほしい』という様なお願い？があつたので、もし『この子はネギには相応しくない！』や『この子は原作通りにいってほしい！』などの意見が有りましたら、上記と同じように感想という形でお送り下さい。

出来る限りの範囲で、応えていきたいと思います。

長々となりましたが、これからも応援、ご愛好頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7646x/>

---

ネギま！advance

2011年12月13日07時51分発行